

1. [はじめに](#)
2. [無料ダウンロード音声について](#)
3. [CONTENTS](#)
4. [ロックスターの"素顔の"英語](#)
5. [ロックスターのインタビューで英語力パワーアップ](#)
6. [インタビュー・ページの読み方](#)
7. [Paul McCartney](#)
8. [Jimmy Page](#)
9. [The Rolling Stones & Martin Scorsese](#)
10. [Noel Gallagher](#)
11. [Sting](#)
12. [Carlos Santana](#)
13. [Brian May](#)
14. [Brian Johnson](#)
15. [Lenny Kravitz](#)
16. [奥付](#)

はじめに

ロック界に君臨する“生きる伝説”たちの生声インタビューが聞ける！

この本は、アルクの月刊誌『イングリッシュ・ジャーナル』の「The Voice of EJ」に2001年～2009年にかけて掲載されたロックスターのインタビューの中から4本を厳選、さらにこの本のために5本のインタビューを追加して、全てを1本6～7分の長さに編集したものです。

インタビューごとに、音声に極めて忠実な英文トランスクリプト、日本語訳、語注などが掲載され、インタビューそのものを収めた音声もついているので、入手したその日からすぐ、スターたちの本物の声でリスニング練習ができます（※インタビュー音声は無料でダウンロードできます）。

レベル別・モデル学習法で英語力アップ！

さらに、インタビューページの前には、本書の内容を利用した英語力レベル別の学習モデルプランが掲載されていますので、これを使えば、ご自身のレベルに応じて、リスニング力はもちろんのこと、スピーキング力を含む英語力全体もステップアップさせることができます。

また、各インタビューの最後には「理解度チェック」が付いていますので、自分がどの程度聞き取れたか確認するために、ぜひご利用ください。

また、かつてJ-WAVEやInterFMで、元祖バイリンガルDJとしてリスナーの耳を楽しませてきたキャロル久末さんによる、ロックスターたちの普段の英語の話しぶりに関するエッセーもどうぞお見逃しなく！

9本のインタビューに登場するスターたちは、主に1970～80年代にデビューし、今もその歩みを止めることを知らない、ロック界の英雄たちばかりです。

さあ、彼らの話がどのくらい聞き取れるか、早速挑戦してみましょう！

表紙写真：Mark Harrison/Camera Press/アフロ

無料ダウンロード音声について

本書に対応する音声は、すべて無料でダウンロードしていただけます。下記URLにアクセスし、『ロックスターの英語』を選択、フォームに必要事項をご記入の上送信いただくと、ダウンロードページURLのご案内メールが届きます。

ALC Download Center
ダウンロードセンター

ダウンロードした音声ファイルはiTunesなどの音声再生ソフトで取りこんでご利用ください。音声再生ソフトでのファイルの取り込み方法や携帯音楽プレーヤーでの利用方法については、ソフトやプレーヤーに付属するマニュアルでご確認ください。

取り込んだ音声ファイルは、音声再生ソフトで次のように表示されます。

出版社名（アーティスト名）：「ALC PRESS INC.」と表示。

書名（アルバム名）：

『ロックスターの英語』

トラック名（曲名）：どの学習に必要な音声なのかがすぐわかるよう、[トラック名_アーティスト名]で曲名が表示されます。（例：[01_Paul McCartney]

本書では、ダウンロードした音声を使用する部分は **DL Track01** のように、トラックの通し番号で記載しています。該当のトラックを再生して学習してください。

[はじめに](#)

[無料ダウンロード音声について](#)

元祖バイリンガルDJが聞いた
[ロックスターの“素顔の”英語](#)

〔レベル別・本書を使ったモデル学習プラン〕
[ロックスターのインタビューで英語力パワーアップ](#)

[インタビューページの読み方](#)

Paul McCartney

ロンドン五輪の開会式ではビートルズ時代のヒット曲「ヘイ・ジュード」を披露し、世界中を熱狂させたポール・マッカートニー。ここでは、その彼が、ジョン・レノンとの出会い、父親との思い出、そして名曲「イエスタデイ」の誕生秘話について語る。

▶ [語注](#)

Jimmy Page

ロックに1つの新しい潮流を築き上げ、今もなお後進のバンドに絶大な影響を与え続けるレッド・ツェッペリン。リーダー兼ギタリストだったジミー・ページが、デビュー前後に思いをはせる。ページが考えるツェッペリンとヘビーマタルの関係、「天国への階段」の思い出話も必聴。

▶ [語注](#)

The Rolling Stones & Martin Scorsese

「生ける伝説」との呼び声も高いザ・ローリング・ストーンズが、アカデミー賞監督のマーティン・スコセッシを迎えて、**2006**年にニューヨークで行われたコンサートの舞台裏を映画化。撮影当時でメンバー平均年齢**64**歳、今も現役バリバリな彼らの、若者顔負けなパワーを見よ！

▶ [語注](#)

Noel Gallagher

2009年、弟リアムとの仲たがいがから世界的ロックバンド・オアシスを突如脱退したノエル・ギャラガー。脱退1カ月前に収録された本インタビューでは、彼が、同バンドにおける事実上最後のアルバムとなってしまった『ディグ・アウト・ユア・ソウル』について縦横無尽に話す。

[▶ 語注](#)

Sting

1980年代を代表するグループ「ポリス」の中心メンバーとして名声をほしいままにし、昨今はソロ活動を精力的に行っているスティング。ここでは彼が、イギリスの伝統歌をテーマにした自らのアルバム、世界の経済危機・2007年に期限付きで再結成されたポリスについて語った。

▶ [語注](#)

Carlos Santana

グラミー賞を通算**10**回獲得という驚異的な記録を誇るラテン系ギタリスト、カルロス・サンタナ。一流ボーカリストたちとコラボしてロックギターの名曲群をカバーした『ギター・ヘヴン』の制作裏話、愛する女性に行ったサンタナ流仰天プロポーズ.....聞き逃せない！

▶ [語注](#)

Brian May

1991年のフレディー・マーキュリーの死去後も、今もお人々の心をつかんで離さない伝説のバンド、クイーン。ギタリストのブライアン・メイが、ブレイクする前の数年間や、アメリカで経験した栄光と挫折、また、メディアには明かさなかった盟友フレディーの素顔について語る。。

▶ [語注](#)

Brian Johnson

アルバムの世界総売上はなんと2億枚以上（!）、カルト的人気を誇るオーストラリアのバンド**AC/DC**。ボーカルのブライアン・ジョンソンが、バンドのツアーの様子、思い出のステージ、あのフレディー・マーキュリーとの1度きりの出会いなどについて、オヤジトークを炸裂させる！

▶[語注](#)

Lenny Kravitz

2011年にリリースした『ブラック・アンド・ホワイト・アメリカ』では、黒人としての出自を意識し、強い政治的メッセージを発信したレニー・クラヴィッツ。ここでは彼が、同アルバム誕生の経緯や、敬愛するマイケル・ジャクソンとのコラボ、溺愛する娘について、胸の内を明かす。

▶ [語注](#)

[奥付](#)

ロックスターの“素顔の”英語

How do the rock stars talk?

Text: Carole Hisasue

スターたちが時折見せる「素顔」の英語を要チェック！

日本のメディアで働いていた数十年の間、多彩な分野のアーティストを多く取材してきた。誰が一番印象に残ったかなど、よく聞かれるが、一人、いや、一握りに絞るのは難しい。なにしろ取材それぞれがユニークだし、どれもスペシャルだからだ。

ミュージシャンの場合、他の業種と違い、ジャンルでしゃべり方が変わる場合が多い。例えば、ジャズ系アーティストのしゃべり方は、ヘビーメタルのミュージシャンのそれとは全く違う。ボキャブラリーも、会話のリズムもだ。

アーティストたちに直接取材していると、会話を進めるにつれ、ときどきドキッとするような回答が返ってきたり、スターの素顔がふと感じられたりすることがある。彼らのガードが消え「本物」の会話になる瞬間は、実に楽しいものだ。世界的なスターのインタビューばかりを取り上げた本書で、スターたちはどのようなやり取りを繰り返しているのだろうか。

状況をわきまえてしゃべり方を変えるザ・ローリング・ストーンズ

本書で収録されているストーンズの音源は、自らのバンドのドキュメンタリー映画を監督したマーティン・スコセッシと共同で会見した時のものだ。メンバーは、そうした状況を踏まえ、記者からの質問に対し率直に答えている。特にふざけることもなければ、ロックスターを気どるところもない。しゃべり方も一般的な英語で分かりやすい。

一方、私が1990年代前半にキース・リチャーズを取材した時のことだが、彼の一言目は“Where's the booze?”だった。写真撮影のために来ていたスタイリストは「えっ？ ブーツなんて用意していない……」と焦り出したが、キースはブーツではなく、ブーズ（酒）が欲しかったのだ。彼は結局、ジャック・ダニエルズのジンジャーエール割りを片手に2時間近く、時に4文字言葉を飛ばしながら楽しそうにしゃべりまくった。

ミック・ジャガーとロン・ウッドと話をする機会もあったが、彼らの音楽に対する愛はやはり格別だった。半世紀も活躍する自分たちの音楽だけでなく、自分たちのヒーローについて語る時が一番イキイキしていたのを覚えている。

ここでは、メンバーたちとスコセッシ監督の英語を聴き比べるのも面白いだろう。監督のニューヨーク訛りはあまり濃くないがallなどの発音にはニューヨーカーらしさを感じてしまう。一方、ミックの英語の母音と声門閉鎖（platformがpla'formになるところなど）はベリー・ブリティッシュ！

初めはアメリカ英語で歌っていた？イギリス発のザ・ビートルズ

ザ・ビートルズ、モノクロテレビの時代から彼らの取材シーンを何度見ただろう。若い頃から愉快でユーモアに富んでいたあの4人は世界一のバンドとなり、scouse（「リバプール方言」の意）を世界に教えた。

今やポール・マッカートニーは、リバプールのルーツからかなり離れている。しかし、初期のビートルズはアメリカンロックを真似し、実は歌詞もアメリカ英語だったのだ（リバプール式でいけば“ln My Life”という曲は“ln Me Life”というタイトルになってしまう！）。それでも“must”の発音が“moost”になったりと、リバプールらしさが今も完全に消えたわけではない。

イギリス東北部訛りのオージー・バンド、AC/DC

オーストラリアの国民的ロックバンド、AC/DCを取材しに行った時、友人から「彼らのstrine（「オーストラリア英語」の意）、理解できた？」と尋ねられたことがある。しかし、中心メンバーは皆イギリス出身なので多少はオーストラリア訛りになっていても彼らの英語は基本的にGeordie（ジョーディ）と呼ばれるイギリス東北部訛り。それに従うと、バンド名にあるAも辞書にある「エイ」ではなく「エー」だ。

ボーカルのブライアン・ジョンソンは、自分のルーツと労働者階級のバックグラウンドに誇りを持っている。俺たちは貴族や政治家と付き合うロックスターとは違うんだ、と主張する彼らだからこそ、階級嫌いなオーストラリア人に親しまれてきたのかもしれない。そういえば、ブライアンのあの新聞配達少年のキャップも、イギリス北部の労働者階級のシンボルだ！

若者のしゃべり方を変えた？元オアシスのノエル・ギャラガー

国際的露出から方言が薄れるミュージシャンもたくさんいるが、オアシスのノエル・ギャラガーは最後までマンチェスターを背負う男だ。ビートルズがリバプール訛りを世界に紹介したように、オアシスはマンチェスター訛りを世界に送り出した。彼らのしゃべり方が若者のイギリス英語を変えたという言語学者もいるくらいだ。

ファンならもうご存じのように、ノエルは大のインタビュー嫌いだ。しかも、イギリスのプレスは意地悪で有名。若手バンドはみなガードが固くなってしまうところだが、ノエルは汚いスラングをばんばん入れてしゃべり、バッドボーイぶりを見せつけている。どこまでが本当のノエルでどこからが演技なのか、私には分からない。ただ、演技だとしても、それもアーティストなら必要だと思う。自分や自分の才能が「商品」なら、イメージというのも大切だろう。そのイメージを築く上で重要なのがしゃべり方だからだ。

ヒッピームーブメントの中で培われたカルロス・サンタナの英語

カルロス・サンタナはメキシコ生まれ。中学時代にカリフォルニアに移住した彼は、今もメキシコ訛りの英語でしゃべる。そして、ヒッピームーブメントが胎動しつつあったサンフランシスコで育ったため、英語のベースにはヒッピー／精神世界／抽象論的な言語がある。ミュージシャン用語（音楽をopen upする、リフをbreatheさせる）やヒッピー用語（trippy、in）。教養あるネイティブには少々陳腐に感じてしまう大衆心理学的な言い回し（cleaning up my inner act）や、広告コピーのような言い回し（the 7Up has more bubbles）。全てがカルロスのバックグラウンドから醸成されたもので、だからこそ、カルロスの英語は時代を代表するミュージシャンのものなのだろう。

レニー・クラヴィッツの英語は、カメレオンの？

レニー・クラヴィッツも'60年代ヒッピーカルチャーが大好きだが、メディアとしゃべる時は、分かりやすい標準英語で話してくれる。最初にブレイクしたのがフランスや日本というアメリカ以外の国だったからなのかもしれない。また、彼がニューヨークとロサンゼルス、ユダヤ系とバハマ系、白人社会と黒人社会の間で育ったということも関係していそうだ。

私はラジオ時代、彼と親しくなれたので日本に来ると一緒に食事したり、ツアーに同行したりしていたが、レニーのカメレオンぶりが印象的だった。いろんな世界で育った彼はあらゆる世界の中に溶けこめる。英語もその場その場で変わり、取材の時とバンドメンバーや友人たちとはしゃべり方もかなり異なった。

本書の彼の発言で特に興味深いのが、「スタンド」という曲のインスピレーションとなった友人の話をする時のこと。him/herやhis/herを避けるレニーはthis personやtheirなどというノン・ジェンダーな代名詞しか使っていない。たぶんレニーの場合は、自らを応援してくれている女性ファンの気持ちを考えて、あえて性別を明かさなかったのでは？と、私は想像している（相手が男性だったら、普通にhim/hisを使っていたはず！）。

教養がにじみ出る！ スティングとブライアン・メイの英語

ロック曲はシンプルな歌詞が多いが、スティングの書く歌詞は、常に教養と知性にあふれている。大学卒業後、高校の英語と数学の教師だったスティングの文学的な歌詞もそうだが、しゃべる英語もイギリス東北部ニューカッスル生まれなのに、きれいな標準英語だ（とはいえ、彼はニューカッスルのサッカーチームの熱烈なサポーターだ。ニューカッスルといえば、ブライアン・ジョンソン以上にジョーディのすごい地域だ！）。

インタビューでもインテリジェントでユーモラスなスティングは「ルネサンス・マンと呼ばれるには600年遅過ぎたね」と軽いジョークを交えながら、神話の持つ力、ロックスターの稼ぎ、ボリスの再結成などについてフランクに、分かりやすい英語で語っている。

そして、頭の良さでいえば、クイーンのブライアン・メイに勝てるミュージシャンはいない。彼は、発明家で天体物理学者でもあり、イギリスのインペリアル・カレッジから博士号も取得している（しかも、研究を開始してからなんと30年後に！）。

ロンドン出身のブライアンは教養あるイギリス人のソフトな英語でしゃべるが、これはアメリカ人にとってかなり女性的に聞こえてしまう（「イギリス人の話し方ってみんなゲイに聞こえる」というアメリカ人の偏見は、こうした上品な英語のことを指すのかもしれない）。しかし、上品だけど気どらないブライアンは、むやみに言葉を飾らず、ここでも知性を感じさせる。

伝説になって人間が円くなった？ ジミー・ペイジ

ジミー・ペイジも若い頃はお騒がせロックスターで、いくつもの事件を起こしている。しかし私が会ってみるととても紳士的で、「え？ この人がハリウッドのホテルの窓からテレビを放り投げた男？ 東京ヒルトンを出入り禁止になったバンドのメンバー？」と拍子抜けしたものだった。

何十年ものキャリアを経て伝説となった人たちは、何も証明する必要がないのでフランクでフレンドリー。自分の功績に大きな自信を持っているジミーは、音楽の話、特にテクニカルな内容になると目を輝かせながら細かく説明してくれた。音楽オタクでもあるので会話はいつも音楽用語が多いが、プライベートなエピソードでも詳しく話してくれるサービス精神も備えていた。

本書に登場するようなロック業界を切り開いてきた「サバイバー」たちは、あらゆる国のあらゆるメディアと触れ合っているため、取材の受け手としてもプロ。自分というものをしっかり持っているので、声を聞くだけでも「あ、ミックだ」などと分かるものだ。もちろん地声を聴く機会がそうそうないスターたちもいるだろうが、全員に共通するぶれないしゃべり方は、聞いていて非常に心地良い。本書は、私にとって「もっといろんなアーティストに会って、話してみたい」という気持ちにさせてくれる、粒ぞろいのインタビューが詰まった一冊だ。

キャロル久末●DJ、コラムニスト。国際基督教大学卒業後、ジャーナリストとして国際誌および日本の英文誌に執筆。FMラジオ（J-WAVE、InterFMなど）のDJをはじめ、コラムニスト、映像プロデューサー、インタビュアー等、多方面で活躍。現在は、アメリカを拠点に、旅と冒険とアートの日々を満喫している。

英語力パワーアップ

ロックスターの生素材を使ったリスニング学習のメリットとは？

Text by Matsuoka Noboru

01 生の英語素材には魅力がいっぱい

生のインタビュー素材には、教科書の英語にはないさまざまな魅力があります。

第1に、話している人物が声優やナレーターではなく、本人が自分の思いや考えを自分の言葉で話している点です。特に本書では、世界的に著名なロックスター本人が、ファンでも耳にする機会はなかなかない地声で話しているのですから、たまらなく貴重です。また、ファンならずとも、世界的なスターの話なら、興奮度ははるかに高くなるはずですよ。

第2に、バラエティーに富んでいることです。画一化された教科書英語とは違って、スピードや言い回し、アクセントなどに人それぞれの話し方の癖が見られ、個性を楽しむことができます。

第3は「不完全」であることです。教科書の英語は完璧なセンテンスの集合体ですが、そのような英語は現実の人間の発話には存在しません。会話は瞬間芸ですから、間違いもすれば、言い直しもするし、言葉に詰まることもあれば、途中で中断することもあります。生の素材は、こうした「現実の不完全な英語」を教えてくれる貴重な教科書なのです。

02 リスニングは4技能の原点

本書は、音声素材を使ってリスニング力をアップさせることを目的に編集されたものです。音声を聞くことが練習の中心になり、テキスト（英文、日本語訳、語注）はあくまでも補助的なものです。しかし、リスニングは4技能（聞く、話す、読む、書く）の原点です。リスニング力のアップはスピーキング力の向上にも直結します。同時に、音声を文字に置き換えれば、リーディング力、ライティング力のアップにもつながるといえます。また、これらのプロセスで語彙力の増強も同時進行します。したがって、本書の利用を聞き取り練習にとどめず、欲張って活用し、あなたの英語力全体のパワーアップにつなげてください。

03 学習方法

次のページからは、本書を利用した学習方法の例をレベル別に紹介します。自分の力に合っていると思うものを選んで学習を進めましょう。各インタビューの最終ページには「理解度チェック」があります。**GOAL** に示された得点のクリアを目指してください。なお、各レベルとも、スピーキングやリーディングのパワーアップにつながる〈発展学習〉の項目を用意しています。範囲や回数は指定していませんので、自分のペースに合わせていろいろ試してみてください。

松岡 昇●青山学院大学大学院国際政治経済研究科修了。現在、獨協大学、東洋大学などで講師を務める。専門は、国際コミュニケーション、社会言語学。
著書に『英語の「壁」はディクテーションで乗り越える！』『日本人は英語のここが聞き取れない』（アルク）など。アルクの看板通信講座「**1000時間**にアリングマラソン」の主任コーチとして活躍する傍ら、英語およびグローバル人材育成セミナーで講師を務めている。

初級者

TOEIC 500点未満

話の「森」（＝大筋）が見える

初級レベルでは、語注とインタビュー어의質問（英文、日本語訳）の助けを借りて、計8回の聞き取りで話の「大筋」をつかむことを目標とします。

たとえ最初はまったく聞き取れなくても、ステップに従って、語注（背景知識とボキャブラリー）をあらかじめ頭に入れることで、聞き取りの負担が軽減され、次いでインタビューの質問を理解することでインタビュー어의答えの「大筋」も予想できるようになります。

どれほど速い英語でも、途中で音声を止めることはせずに、自然の英語の流れに身を任せてください。少しずつ聞こえてくる語句が増えてくるはずです。

STEP 1 全体を聞く

まずは音声を最初から最後までノンストップで2回聞く。気持ちでは、いつでも、最初の1回で「森」（＝大筋）をつかむつもりで。（1～2回目）

STEP 2 語注＋全体を聞く

トラックごとに、語注に目を通してから音声を聞く。この作業が最後まで終わったら、再度、全体を最初から最後までノンストップで2回聞く。（3～5回目）

STEP 3 質問文＋全体を聞く

インタビュアーの質問（英文と日本語訳）を読んで理解する。その後、全体の音声を最初から最後までノンストップで2回聞く。（6～8回目）

「理解度チェック」を行う

GOAL

STEP 4

スクリプトを1文ずつ読み、内容を確認する。

STEP 5

自分のスピードで音読をする。

STEP 6

1文ごとに、スクリプトを見て読み、その後、顔を上げて（スクリプトから目を離して）同じ文をもう一度繰り返して言う。

STEP 7

スクリプトを見ながら、音声のシャドーイング（音声を止めずに、すぐ後から影のようについて英文を音読する練習）をする。音声についていけるようになるまで繰り返す。

中級者

TOEIC 500～750点

話の「森」と「木」（＝要点）が見える

中級レベルでは、語注とインタビュアーの質問（英文）の助けを借りて、計5回の聞き取りで話の「大筋」と「要点」をつかむことを目指します。

固有名詞（人名、曲・アルバム名など）が数多く登場するため、何の予備知識もなく聞けば「大筋」をつかむことは困難です。語注にあらかじめ目を通して背景知識とボキャブラリーを押さえたり、インタビュアーの質問（英文）を読んでおいたりするだけでも、聞き取りやすさが違ってきます。

聞いた英語を頭の中で日本語に置き換えていく作業は、速い英語では、理解の妨げにしかありません。英語の流れに身を任せながら諦めずに聞けば、少しずつ「映像」（＝話されている内容のイメージ）が見えてきます。

STEP 1 全体を聞く

まずは音声を最初から最後までノンストップで1回聞く。気持ちでは、いつでも、最初の1回で「木」（＝要点）をつかむつもりで。（1回目）

STEP 2 語注＋全体を聞く

トラックごとに、語注に目を通してから音声を聞く。この作業が最後まで終わったら、再度、全体を最初から最後までノンストップで1回聞く。（2～3回目）

STEP 3 質問文＋全体を聞く

インタビュアーの質問（英文のみ）を読んで理解する。その後、全体の音声を最初から最後までノンストップで2回聞く。（4～5回目）

GOAL

STEP 4

スクリプトを1文ずつ読み、内容を確認する。

STEP 5

自分のスピードで音読をする。

STEP 6

1文ごとに、スクリプトを見て読み、その後、顔を上げて（スクリプトから目を離して）同じ文をもう一度繰り返して言う。

STEP 7

スクリプトを見ながら、音声のシャドーイング（音声を止めずに、すぐ後から影のようについて英文を音読する練習）をする。音声についていけるようになるまで繰り返す。

STEP 8

スクリプトを見ずに、音声のシャドーイングをする。音声についていけるようになるまで繰り返す。

上級者

TOEIC 750点以上

話の「森」と「木」と「枝葉」（＝詳細）が見える

上級レベルでは、語注の助けのみを借りて、計3回の聞き取りで話の「大筋」「要点」、そして「詳細」をつかむことを目標とします。

このレベルの人は、いきなり1、2度聞いただけでも、「大筋」や「要点」をかなりのところまでつかめるはずです。しかし、細かい部分を聞き取るとなると、もうひとつ自信が持てないかもしれません。やはりポイントは、背景知識とボキャブラリーです。「知っていること」なら細かい部分まで比較的楽に聞き取れるものだからです。

詳細の聞き取りを意識し過ぎると、理解できない特定の語句が気になり始め、全体の理解を妨げます。語注をチェックした後は、力を抜いて英語の流れに身を任せてください。初めのうちはザルのように細かい情報が素通りしていく不安を覚えますが、徐々に慣れて、リラックスした状態で「枝葉」まで見えるようになってきます。

STEP 1 全体を聞く

まずは音声を最初から最後までノンストップで1回聞く。気持ちでは、いつでも、最初の1回で「枝葉」（＝詳細）までつかむつもりで。（1回目）

STEP 2 語注＋全体を聞く

トラックごとに、語注に目を通してから音声を聞く。この作業が最後まで終わったら、再度、全体を最初から最後までノンストップで1回聞く。（2～3回目）

GOAL

STEP 3

スクリプトを1文ずつ読み、内容を確認する。

STEP 4

自分のスピードで音読をする。

STEP 5

1文ごとに、スクリプトを見て読み、その後、顔を上げて（スクリプトから目を離し）同じ文をもう一度繰り返して言う。

STEP 6

スクリプトを見ながら、音声のシャドーイング（音声を止めずに、すぐ後から影のようについて英文を音読する練習）をする。音声についていけるようになるまで繰り返す。

STEP 7

スクリプトを見ずに、音声のシャドーイングをする。音声についていけるようになるまで繰り返す。

STEP 8

日本語訳を見ながら、1文ずつ口頭で英訳する。

STEP 9

インタビューの内容を自分の英語で要約する。

インタビュー・ページの読み方

この本のインタビューページの本文は、次のように構成されています。最初の扉ページで、それぞれのスターのプロフィールや、インタビューの難易度、話し方の特徴などをチェックし、自分のレベルや関心に合わせて聞いて／読んでいきましょう。

音声トラック

各インタビューとも、第1トラックがタイトルコール、第2トラック以降がインタビュー本文という構成になっています。また、各トラックの冒頭には、そのトラックで述べられている内容の参考になるよう、中見出しを付けてあります。中見出しは必ずしも英和対訳にはなっていません。

英文スクリプト

音声に忠実に書き起こした英文スクリプトです。ただし、単語と認識し難い発声や相づち、言いよどみなどは、表記されていない場合があります。

和訳例

英文のスタイルにできる限り即した訳になるようにしています。学習の参考にしてください。ただし、どのレベルの方も、最初は日本語訳を見ないで英文をリスニング／リーディングされることをお勧めします。

語注

注意が必要と思われる単語や表現、また、固有名詞や話の理解に必要と思われる背景や事情について解説しています。さらに、必要に応じて、訳語の後に★印で補足説明を付けています。

※英文中の色が変わっている部分をタップすると語注に遷移します。*から始まっている下線箇所は、下線部分を含め複数の語注を含んでいます。*をタップすると下線部分全体の語注に遷移します。

Paul McCartney

「イエスタデイ」は「スクランブルエッグ」を書き直したものなんですよ。

発音分析

落ち着いた話しぶりで聞きやすい。出身地リバプールは北イングランドにあるが、彼の訛りは強くはない。世界的に活躍し、ナイトの称号も与えられた人物だけに、かなり発音は標準化されているのだろう。とはいえ、北イングランド訛りを感じさせるところもわずかにある。北イングランド訛りでは、[ʌ]は「ウ」ないしは「オ」に近い発音になる。彼の[A]も時々この音になっている。

Interview Data	
放送日	2001年4月30日
番組名	Fresh Air
スピード	普通
語彙・表現	やや難しい

ポール・マッカートニー
Paul McCartney
1942年、イギリス・リバプール生まれ。ギネスブックに「ポピュラー音楽史上最も成功した作曲家」として掲載されている、世界有数のミュージシャン。ザ・ビートルズ（1960-70）の中心メンバーとして、ベース、ギター、ボーカルなどマルチな分野で才能を発揮。また、「イエスタデイ」「ヘイ・ジュード」「レット・イット・ビー」など、ザ・ビートルズを代表する名曲を多数生み出した。ザ・ビートルズ解散後も自身のグループやソロで活動し、精力的に作品を発表し続けている。
ロンドン五輪の開会式ではビートルズ時代のヒット曲「ヘイ・ジュード」を披露し、世界中を熱狂させたポール・マッカートニー。ここでは、その彼が、ジョン・レノンとの出会い、父親との思い出、そして名曲「イエスタデイ」の誕生秘話について語る。

Ingenious John

DL Track02

語注

Radio personality Terry Gross talks about how McCartney's school friend, [Ivan Vaughan](#), [was responsible for](#) Paul's historical meeting with [John Lennon](#).

Terry Gross: So, your friend Ivan introduced you to John Lennon. Do you remember, what, um, what the band was playing the first time you heard John with, with the band [the Quarrymen](#)?

Paul McCartney: Yeah, they were, um, they had a [repertoire](#) of, kind of, [folksy](#), sort-of [bluesy](#) things, um, mixed with early rock 'n' roll. And John and the band were playing a thing called "[Come go with me,](#)" which, uh, was a record for a group called [the Del Vikings](#). It was an early rock 'n' roll record. But John obviously didn't have the record, and he'd probably heard it a few times on radio. And being so musical, he'd just [picked it up](#). And, so, he was doing a version of it.

But what [impressed](#) me was even though he didn't know the words he would [make 'em up](#). And he'd [steal](#) words from, sort of, blues songs. So, instead of the real words, which I don't know, but, he, he was singing, "Come, come go with me, down to the [penitentiary](#)." Which was, which was [more off Big Bill Broonzy](#) or somebody, you know.

But I thought, "You know, that's [inventive](#)! That's, that's, uh, [ingenious](#)." So I [warmed to](#) him immediately, hearing that.

translation ▶

A Left-handed Audition

DL Track03

語注

Gross: And how were you invited to play with the band?

McCartney: Well, um, they were doing two sets. There was one in the afternoon -- when I first of all saw them -- which was outdoors. And then there was to be one in the evening. And, meantime, they had all this time to fill, so they went into the village hall, where the evening [gig](#) was to be. And, um, they were [sitting around](#) and, with all this time on their hands, uh, John, who was one and a half years older than me, had, um, [got hold of](#) some beer from somewhere and was, and was, uh, having a little drink. And, um, we were sitting around and just playing various songs.

And, even though I was [left handed](#), I'd kind of learned to turn the guitar [upside down](#) and just about play songs. 'Cause my friends wouldn't let me re-tune their guitars, obviously; too [inconvenient](#) for them. So I'd had to learn this, uh, left-handed method.

So I [turned the guitar around](#) -- I think it was his guitar -- and I played a song, an early Ellie--, [Eddie Cochran](#) song which was called "[Twenty Flight Rock.](#)"

And I must've done it quite well because, uh, a couple of days later I was [cycling](#) around [Woolton](#), which was the area where I met John, and, um, one of the friends -- a guy called [Pete Shotton](#) -- uh, cycled up to me and said, "Hey, we were talking about you. You know, we enjoyed that 'Twenty Flight Rock' and, uh, would you like to be in the band?" you know. So I said, "Well, I'll have to consider this." You know, this were a big [move](#) to me. I'd never been in a professional [outfit](#) before. I'd never actually even hardly sung onstage before. I think I'd just done it once at a [holiday camp](#) somewhere. And, uh, so I said, "I'll get back to you on that one." And a couple of days later I, I did, and said, "Yeah, you know what? It wouldn't be a bad idea."

translation ►

Gross: Now, when you were growing up, your, your, your father was an amateur musician; he played piano.

McCartney: Yeah.

Gross: And, um, I imagine he had a lot of records around the house?

McCartney: No, not so much records, we didn't. We listened to the radio, and he played piano in the house. But, [in actual fact](#), I can't remember him having one record -- [let alone](#) lots.

Gross: Did the songs that you grew up with that your father played, or that you listened to on the radio with your father, did, did they affect your sense of, like, song structure or the kind of [chords](#) you put to a song?

McCartney: Yeah, very definitely, yes. I loved listening, uh, as a kid, to him playing the piano. I can still remember now, sort of, lying on the floor with my, uh, [chin cupped in my hands](#), um, listening to him play. He played, um, from another [era](#), songs from another era. One of my favorites he played was a song called "[Lullaby of the Leaves](#)." He used to play, um, things by [Paul Whiteman](#) and his orchestra. He played, uh, "[Chicago](#)." "Chicago, Chi--," so I loved all those songs, you know, I loved hearing him.

And he would actually take me and my brother, and he would [educate](#) us in his own [primitive](#) way, 'cause he didn't know how to read or write music. He'd [learned by ear](#).

But he was very musical. And so we'd be listening to the radio, and he'd say, "Can you hear that deep noise, there?" He'd say, "That's the bass." So he'd [pick out](#) things for us to listen to. And he would sometimes show us how to do a harmony. He'd say, "Now here's a [tune](#), and this is the harmony to it." So, in the Beatles, in the early days of the Beatles, I [was very keen on](#) us doing harmonies. And I p--I would have to, uh, [put that down to him](#).

Gross: The vocal harmonies, you're talking about?

McCartney: Yeah. I would always encourage the Beatles to do harmonies. Or, if John had a song, I would immediately harmonize to it. And you can hear that right the way through the Beatles career. I'm often harmonizing a third above John, or we're often harmonizing as a group. Um, so I think my love of harmony came from him actually sitting my brother Mike and I down, and saying, um, "This is how it goes."

Scrambled Eggs

DL Track05

語注

Gross: Now, one of the song lyrics included in [your new book of poems and lyrics](#), uh, "Blackbird Singing" is "Yesterday." And this, apparently, is a re-writing of the very first song that you wrote at the age of 14, which is called "[I Lost My Little Girl](#)."

McCartney: No, that's not quite true. Um, the, my very first song was called "I Lost My Little Girl," and that was, um, written at the age of 14. But, um, where I think the [confusion](#) is, is that "Yesterday" was a re-writing of the original lyric of "Yesterday," because the song "Yesterday," tune of it, uh, came to me in a dream. I just woke up one morning and I, I had this melody in my head.

And, being, by then, a professional musician, I thought, "I wonder what that is." And I had a piano by the side of my bed so I, I actually, uh, sort of got some chords and put this tune to it. But I didn't have any words, so the original words to "Yesterday" were, "[Scrambled eggs](#), oh my baby how I love your legs, duh duh duh duh duh duh duh duh duh, I [believe in](#) scrambled eggs." And I thought, "[You know what?](#) The tune's too nice to have those as the lyrics." So, heh ... so, "Yesterday" is a re-write of "Scrambled Eggs."

Gross: That's funny. That's, that [reminds me of](#) how, like, [Ira Gershwin](#) and some of the other great lyricists used to write what was called [dummy](#) lyrics. They'd come up with anything, like, [the equivalent of](#) "scrambled eggs" ...

McCartney: Uh-huh?

Gross: ... just to have a fake lyric, to give them the [rhyme](#) scheme for, for the melody.

McCartney: That, well, that's it, yeah. I call that [blocking in](#). You, it sometimes happens ...

Gross: Uh-huh, uh-huh ...

McCartney: ... it sometimes happens as you're doing the song; you get a tune and it feels sort of [silly](#) going "bah, dee-dee, bah-dee, bah-doh, dah-dee, dah-doo, dah-doh." So you just [go](#), "I'm a girl, da-dah, da-dan, du-somebody-boh, de-doo, be-dee." And you, you find words just come to you, some of which you keep, some -- like "scrambled eggs" -- you lose, quickly.

tanslation ▶

*Interview reproduced with the permission of WHY?, Inc.
Narrated by Greg Dale*

独創的なジョン

 [DL](#)  [Track02](#)


ラジオパーソナリティーのテリー・グロスが、マッカートニーの学生時代の友達アイバン・ボーンがポールとジョン・レノンの歴史的な出会いをどのように取り持ったかについて、話している。

テリー・グロス：では、お友達のアイバンが、あなたをジョン・レノンに紹介したんですね。ジョンが当時のバンド、ザ・クオリーメンで演奏しているのを初めて聞いたときに、何の曲を演奏していたか、覚えていますか？

ポール・マッカートニー：そうですね、彼らのレパートリーはフォークっぽい、ブルース的なものに、初期のロックンロールが入り交じったものでした。そしてジョンとバンドは、「カム・ゴー・ウィズ・ミー」という曲を演奏していました。それは、デル・バイキングスというグループのレコードでした。初期のロックンロールのレコードです。ですが、ジョンがそのレコードを持っていなかったのは明らかで、恐らくラジオで何回かこの曲を耳にしたんでしょうね。彼は音楽の才能にあふれていたの、それを（耳で）覚えたんです。そういうわけで、彼はその曲の（彼自身の）バージョンを演奏していました。

だけど、何がすごいつて、彼は歌詞を知らないのに、勝手にそれを作っていたんです。ブルースなんかの曲から歌詞を拝借するわけです。だから、僕もよく知らないんですが、本来の歌詞の代わりに、「僕と一緒にいこう、刑務所まで」なんて歌っていたんです。それはどちらかというと、もっとビッグ・ビル・ブルーンジーか誰かみたいな感じでしたね。

でも僕は、「これは独創的だ！ これは、これは賢いな」と思いました。だから、それを聞いて、すぐに彼のことが気になりましたね。

[【原文】](#) 

左利きの演奏が縁で

  Track03

グロス：どういう経緯で、そのバンドとの演奏に誘われたんですか？

マッカートニー：ええと、彼らの公演は2回あったんです。午後に1回あって――僕が最初に見たときですね――これは屋外でやっていた。そして、夜に、もう1度やることになっていました。それまでの間、彼らは時間をつぶさなきゃいけないで、夜の公演が行われる村のホールに入っていました。みんなぶらぶらと暇をもてあましていたんです。ジョンは僕より1歳半年上なんですけど、どこからかビールを手に入れて、ちょっと飲んでいました。それで、僕らは他にやることもなく、とにかくいろんな曲を演奏していました。

それで、僕は左利きなんですけど、ギターを逆さに持って、曲を弾けるようになっていたんですね。友達みんな、僕が彼らのギターをチューニングし直すのを嫌がったんですよ、当たり前ですけどね、彼らにしてみれば（戻すのが）あまりにも面倒ですから。だから、この左利き用の弾き方を覚えるしかなかったんです。

それで、ギターを反転させて――あれはジョンのギターだったと思います――1曲弾きました。エリー、エディー・コ克蘭の初期の歌で、「トゥエンティ・フライト・ロック」というものです。

かなりうまく弾けたんでしょうね、というのも、2日後に、ウールトンで、そこはジョンと出会った地域なんですけど、そこを自転車で走り回っていると、友人の1人――ピート・ショットンという男ですが――彼が自転車で近寄ってきて、「おい、君のことを話してたんだ。例の『トゥエンティ・フライト・ロック』は気に入ったよ、だからバンドに入らないか？」と言ったんです。だから、僕は「まあ、考えてみなくちゃね」と言いましたよ。僕にとっては大きな決断でしたからね。それ以前にプロのグループに入ったことはありませんでしたし。舞台上で歌うこと自体、ほとんどやったことがなかった。どこかのホリデーキャンプで1度やったぐらいだったと思います。だから僕は、「それについてはあらためて連絡するよ」と言ったんです。そして2日後、連絡して、こう言いました、「ああ、そうだな。悪いアイデアじゃないと思う」ってね。

【原文】[▶](#)

父親からのレッスン

DL **Track04**

グロス：さて、子どものころ、お父さまは、アマチュア・ミュージシャンだったそうですね、ピアノを弾かれたとか。

マッカートニー：ええ。

グロス：そして、家にはお父さま所有のレコードがたくさんあったんじゃないかと思いますが。

マッカートニー：いえ、レコードはあまりありませんでした。僕たちはラジオを聴き、そして父がピアノを弾いてくれました、家でね。でも、実のところ、父がレコードを1枚でも持っていたという覚えはありません——たくさんどころか。

グロス：子どものころにお父さまが弾いたり、お父さまとラジオで聴いたりした曲は、歌の作りだとか、どんなコードを歌に入れるか、というような感覚に、影響を与えたと思いますか？

マッカートニー：ええ、間違いなくそうですね。子どものころ、父がピアノを弾いているのを聴くのが、大好きでした。床に寝そべり、頬づえをついて、父の演奏を聴いていたことを今も覚えていますよ。父は別の時代、古き良き時代の曲を弾いていました。父が弾いてくれた中でも、「木の葉の子守唄」という曲は、とても好きでした。ポール・ホワイトマンと彼のオーケストラの曲はよく弾いていましたね。「シカゴ」とか。「シカゴ、シ——」、まあ、そんな曲が全部好きでしたし、父の演奏を聴くのが大好きでした。

そして、実際に僕と弟を呼んで、父なりの、武骨なやり方で、僕たちに指導してくれました、というのも、父は楽譜の読み方も書き方も知らなかったんですから。父は耳で覚えたんですね。

でも、父はとても音楽的な人でした。例えばラジオを聴いていると、「あの深い音が聞こえるかい、ほら、そこ」なんてことを言いました。「それがベースだよ」つてね。ですから、僕らが耳を傾けるべきものを選んでくれました。そして時には、ハーモニーの付け方も教えてくれました。例えば、「ほら、これがメロディーで、これがそれに対するハーモニーだ」というように。そしてビートルズでも、ビートルズ初期のころには、僕はバンドのハーモニーにとっても力を入れていました。それは父の影響だったと思っています。

グロス：声のハーモニーのことをおっしゃっているのですか？

マッカートニー：そうです。僕は常に、ビートルズにハーモニーをやるよう促していました。あるいは、ジョンが曲を用意していたら、すぐにそれにハーモニーを付けました。それは、ビートルズの全キャリアを通じて、聴くことができます。僕は大概ジョンの3度上を歌っているか、あるいはグループとしてよくハーモニーで歌っていました。ですから、ハーモニーがこれほど好きなのは、全部父が、実際に弟のマイクと僕を座らせて、「これはこうやるんだぞ」と教えてくれたからだと思っています。

【原文】[▶](#)

スクランブルエッグ

 **DL**  **Track05**

グロス：さて、あなたの詩と歌詞を収めた新刊、『ブラックバード・シンギング』の中の歌詞の1つに、「イエスタデイ」があります。これは、あなたが**14歳**のときに初めて書いた曲、「アイ・ロスト・マイ・リトル・ガール」を書き直したものだそうですね。

マッカートニー：いえ、それはちょっと違います。僕の初めての曲は、「アイ・ロスト・マイ・リトル・ガール」で、それは**14歳**のときに書いたものです。ですが、何がややこしいかというと、「イエスタデイ」は、「イエスタデイ」のもともとの歌詞を書き直したもののなんです。というのも「イエスタデイ」のメロディーは、ええと、夢に現れたものだったのです。ある朝目覚めると、このメロディーが頭の中にあったのです。

そして、そのころにはプロのミュージシャンになっていましたから、「これは一体なんだろう」と思いました。そしてベッドの脇に、ピアノを置いていたので、実際に、コードを見つけて、このメロディーを付けてみたのです。でも歌詞はなかったので、「イエスタデイ」の最初の歌詞は、「スクランブルエッグ、オーマイベイビー、君の足がとても好き、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、僕は信じている、スクランブルエッグを」でした。そして、「おい、こんなに良いメロディーに、こんなのは歌詞としてふさわしくないぞ」と思ったのです。ですから・・・そういうわけで、「イエスタデイ」は「スクランブルエッグ」を書き直したもののなんですよ。

グロス：それは面白いですね。今のお話を聞いて、アイラ・ガーシュウィンや他の偉大な作詞家たちも、いわゆるダミーの歌詞を書いていた、という話を思い出します。彼らは、例えば「スクランブルエッグ」に相当する適切なことを考え出して・・・

マッカートニー：ほう。

グロス：・・・とりえず、偽の歌詞を付けるためにです、メロディーに対して、韻の踏み方を決めるためにね。

マッカートニー：ああ、そういうことですよ、ええ。僕はそれを、ブロッキング・インと呼んでいます。たまにあることなんですけど・・・

グロス：ええ、ええ・・・

マッカートニー：・・・たまに起こるんですよ、歌を書いているときにね。頭にメロディーが浮かんて、「バー、ディディ、バーディ、バードゥ、ダーディ、ダードゥ、ダードゥ」とやるのが、ばからしく思えるんです。だからただ、「私は女の子、ダーダ、ダーダン、ドゥー・誰か・ポー、ディードゥ、ビーディ」とやるわけです。そしてそのうち、歌詞が自然と浮かんてくるんですよ。そのまま使うやつもあれば、中には——「スクランブルエッグ」みたいに——ボツにするものもあります、即座にね。

【原文】[▶](#)

（訳：春日聡子）

Vocabulary List

B

- believe in** ~ ~を信じる
- block in** 大まかな見取り図を書く、概略を描く

C

- chin** あご
- chord** 和音、コード
- confusion** 混乱
- cup ~ in one's hands** ~を両手で包む ★cupは「カップに入れるように置く」という意味。cup one's chin in one's handsは、日本語では「頬づえをつく」ということ。
- cycle** 自転車に乗る

E

- educate** 教育する
- era** 時代

G

- get hold of** ~ ~を手に入れる
- gig** 演奏会、コンサート

I

- impress** （～に）感銘を与える
- in actual fact** 実際に、実は
- inconvenient** 不便な、不自由な
- ingenious** 巧みな、独創的な
- inventive** 創意に富む、独創的な

K

- (be) keen on** ~ ~を熱望している

L

- learn by ear** 聞き覚える、耳から学ぶ
- left handed** 左利きの
- let alone** ~ （通例否定文の後で）～は言うまでもなく

M

- make ~ up** ~を作り上げる
- move** 動き、手だて

O

- outfit** 組織、団体 ★口語。

P

- penitentiary** 刑務所、感化院
- pick ~ up** ~を身に付ける、～を習得する
- pick out** ~ ~を選び出す
- primitive** 粗野な、未発達な
- put A down to B** AをBのせいにする

R

- remind A of B** AにBのことを思い出させる、AにBを連想させる
- (be) responsible for** ~ ~に対して責任がある、～の原因である
- rhyme** 韻

S

- silly** ばかばかしい
- sit around** ぶらぶらして過ごす
- steal** 盗む、拝借する

T

- the equivalent of** ~ ~に相当するもの
- tune** 旋律、メロディー
- turn ~ around** ~を回転させる

U

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(* 質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	マッカートニーがジョン・レノンの演奏を初めて聞いたとき、レノンはデル・バイキングスというグループに所属していた。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	マッカートニーはレノンより1年半早く生まれた。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	マッカートニーは左利きである。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	マッカートニーとレノンの出会いの場所は、ウールトンという地区だった。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	マッカートニーは、バンド「ザ・クオリーメン」に加入するまで、ほとんどステージで演奏したことがなかった。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	マッカートニーの父親はプロのギタリストだった。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	マッカートニーが子どものころ、彼の家にはレコードがたくさんあった。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	「木の葉の子守唄」はマッカートニーの詩集のタイトルである。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	「アイ・ロスト・マイ・リトル・ガール」は、マッカートニーが14歳のときに初めて作った曲だ。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	マッカートニーはスクランブルエッグを作っているときに「イエスタデイ」のメロディーを思い付いた。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(* 質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	マッカートニーがジョン・レノンの演奏を初めて聞いたとき、レノンはデル・バイキングスというグループに所属していた。	C	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	マッカートニーはレノンより1年半早く生まれた。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
3	マッカートニーは左利きである。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	マッカートニーとレノンの出会いの場所は、ウールトンという地区だった。	C	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	マッカートニーは、バンド「ザ・クオリーメン」に加入するまで、ほとんどステージで演奏したことがなかった。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	マッカートニーの父親はプロのギタリストだった。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
7	マッカートニーが子どものころ、彼の家にはレコードがたくさんあった。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
8	「木の葉の子守唄」はマッカートニーの詩集のタイトルである。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
9	「アイ・ロスト・マイ・リトル・ガール」は、マッカートニーが14歳のときに初めて作った曲だ。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	マッカートニーはスクランブルエッグを作っているときに「イエスタデイ」のメロディーを思い付いた。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

語注

Ivan Vaughan

アイバン・ボーン ★（1942-93）ジョン・レノン、マッカートニーの旧友。レノンのバンド、ザ・クオリーメンでベースを弾いていた。
[▶ 本文に戻る](#)

be responsible for ~

～に対して責任がある、～の原因である
[▶ 本文に戻る](#)

John Lennon

ジョン・レノン ★（1940-80）イギリスのミュージシャン。ザ・ビートルズのボーカル・ギタリスト。マッカートニーと「レノン=マッカートニー」として、ビートルズの大半の曲を書いた。ビートルズ解散後もソロとして活動。平和運動家としても活躍した。
[▶ 本文に戻る](#)

the Quarrymen

ザ・クオリーメン ★（1956-60、'97-）イギリスのロックバンド。レノンを中心に結成された、ザ・ビートルズの前身バンド。
[▶ 本文に戻る](#)

repertoire

レパートリー
[▶ 本文に戻る](#)

folksy

フォーク音楽っぽい
[▶ 本文に戻る](#)

bluesy

ブルース的な、ブルースっぽい
[▶ 本文に戻る](#)

"Come go with me"

「カム・ゴー・ウィズ・ミー」 ★（1957）デル・バイキングスのシングル曲。
[▶ 本文に戻る](#)

the Del Vikings

デル・バイキングス ★（1955-）アメリカのドゥーワップ・ボーカルグループ。
[▶ 本文に戻る](#)

pick ~ up

～を身に付ける、～を習得する
[▶ 本文に戻る](#)

impress

（～に）感銘を与える
[▶ 本文に戻る](#)

make ~ up

～を作り上げる
[▶ 本文に戻る](#)

steal

盗む、拝借する
[▶ 本文に戻る](#)

penitentiary

刑務所、感化院
[▶ 本文に戻る](#)

more off ~

もっと～寄りの
[▶ 本文に戻る](#)

Big Bill Broonzy

ビッグ・ビル・ブルーンジー ★（1893?-1958）アメリカのブルース・ミュージシャン。

[▶本文に戻る](#)

inventive

創意に富む、独創的な

[▶本文に戻る](#)

ingenious

巧妙な、独創的な

[▶本文に戻る](#)

warm to ~

～に共感を寄せる

[▶本文に戻る](#)

gig

演奏会、コンサート

[▶本文に戻る](#)

sit around

ぶらぶらして過ごす

[▶本文に戻る](#)

get hold of ~

~を手に入れる

[▶本文に戻る](#)

left handed

左利きの

[▶本文に戻る](#)

upside down

逆さまに

[▶本文に戻る](#)

inconvenient

不便な、不自由な

[▶本文に戻る](#)

turn ~ around

~を回転させる

[▶本文に戻る](#)

Eddie Cochran

エディー・コ克蘭 ★（1938-60）アメリカのロカビリー奏者。

[▶本文に戻る](#)

"Twenty Flight Rock"

「トゥエンティ・フライト・ロック」 ★コ克蘭が映画『女はそれを我慢できない』（1956）で歌った曲。

[▶本文に戻る](#)

cycle

自転車に乗る

[▶本文に戻る](#)

Woolton

ウールトン ★イギリス、リバプール郊外の中流層が住む地区。

[▶本文に戻る](#)

Pete Shotton

ピート・ショットン ★（1941-）ジョン・レノンの旧友。ザ・クオリーメンではパーカッションを担当していた。

[▶本文に戻る](#)

move

動き、手だて

[▶本文に戻る](#)

outfit

組織、団体 ★口語。

[▶本文に戻る](#)

holiday camp

ホリデー・キャンプ、行楽地 ★イギリスで、さまざまなレクリエーション施設を備えた行楽地のこと。

[▶本文に戻る](#)

in actual fact

実際に、実は
[▶ 本文に戻る](#)

let alone ~

(通例否定文の後で) ~は言うまでもなく
[▶ 本文に戻る](#)

chord

和音、コード
[▶ 本文に戻る](#)

chin

あご
[▶ 本文に戻る](#)

cup ~ in one's hands

~を両手で包む ★cupは「カップに入れるように置く」という意味。cup one's chin in one's handsは、日本語では「頬づえをつく」ということ。
[▶ 本文に戻る](#)

era

時代
[▶ 本文に戻る](#)

"Lullaby of the Leaves"

「木の葉の子守唄」 ★(1932)元はブロードウェー・ミュージカルのために書かれた歌だったが、やがてジャズのスタンダード・ナンバーとなった。
[▶ 本文に戻る](#)

Paul Whiteman

ポール・ホワイトマン ★(1890-1967)アメリカのジャズバンドリーダー、オーケストラディレクター。
[▶ 本文に戻る](#)

"Chicago (That Toddling Town)"

「シカゴ(・ザット・トドルング・タウン)」 ★(1922)フレッド・フィッシャー作詞・作曲。
[▶ 本文に戻る](#)

educate

教育する
[▶ 本文に戻る](#)

primitive

粗野な、未発達の
[▶ 本文に戻る](#)

learn by ear

聞き覚える、耳から学ぶ
[▶ 本文に戻る](#)

pick out ~

~を選び出す
[▶ 本文に戻る](#)

tune

旋律、メロディー
[▶ 本文に戻る](#)

be keen on ~

~を熱望している
[▶ 本文に戻る](#)

put A down to B

AをBのせいにする
[▶ 本文に戻る](#)

your new book of poems and lyrics, uh, "Blackbird Singing"

★マッカートニーの詩・歌詞集"Blackbird Singing: Poems and Lyrics, 1965-2001"（2001）のこと。これは'01年に収録されたインタビューであるため、「新刊」と話している。

[▶本文に戻る](#)

"Yesterday"

「イエスタデイ」 ★ビートルズのアルバム*Help!*（1965、邦題『4人はアイドル』）収録曲。マッカートニーによる、ビートルズの代表曲の1つ。

[▶本文に戻る](#)

"I Lost My Little Girl"

「アイ・ロスト・マイ・リトル・ガール」 ★マッカートニーが1956年に書いた曲。アルバム『アンプラグド』（'91）に収録されている。

[▶本文に戻る](#)

confusion

混乱

[▶本文に戻る](#)

scrambled eggs

スクランブルエッグ ★通例、複数形。

[▶本文に戻る](#)

believe in ~

~を信じる

[▶本文に戻る](#)

You know what?

あのね

[▶本文に戻る](#)

remind A of B

AにBのことを思い出させる、AにBを連想させる

[▶本文に戻る](#)

Ira Gershwin

アイラ・ガーシュウィン ★（1896-1983）アメリカの作詞家。弟で作曲家のジョージ・ガーシュウィンと共に、数々の名曲を生み出した。

[▶本文に戻る](#)

dummy

ダミー、代用品

[▶本文に戻る](#)

the equivalent of ~

~に相当するもの

[▶本文に戻る](#)

rhyme

韻

[▶本文に戻る](#)

block in

大まかな見取り図を書く、概略を描く

[▶本文に戻る](#)

silly

ばかばかしい

[▶本文に戻る](#)

go

言う ★= say

[▶本文に戻る](#)

Jimmy Page

あの曲（『天国への階段』）は、僕が1つにまとめたいと思っていた幾つかの楽節が集まったものなんです。

発音分析

若々しい声だ。イギリスには、彼のように女性的な高い声を出す男性は多い。一方、アメリカ人の声は概して低く響く。巻頭コラムのブライアン・メイの項で触れていたアメリカ人の偏見は、話し方もそうだが、それ以上に声のことを指して言っていると思われる。なお、ページには南イングランド訛りがある。spaceのように、[eɪ]が「アイ」になるのが典型。またkitのように、語末や語中の[t]が聞こえなくなることもそうだ。

Interview Data	
番組名	Fresh Air
放送日	2003年6月2日
スピード	速い
語彙・表現	普通

ジミー・ページ
Jimmy Page
1944年、イギリス・ミドルセックス州生まれ。ジェフ・ベック、エリック・クラプトンと並び「ロックの3大ギタリスト」と呼ばれ、ギターをバイオリンの弓で弾くなど、特殊奏法でも知られる。伝説のロックバンド、レッド・ツェッペリン（1968-80）では、ギタリストとしてのみならずプロデューサーとしても活躍。作曲の才能にもあふれ、「天国への階段」（71）のギターリフは「ロック史上最高」とも評される。バンド解散後もさまざまなユニットで音楽活動を続けている。
ロックに1つの新しい潮流を築き上げ、今もなお後進のバンドに絶大な影響を与え続けるレッド・ツェッペリン。リーダー兼ギタリストだったジミー・ページが、デビュー前後に思いをはせる。ページが考えるツェッペリンとヘビーメタルの関係、「天国への階段」の思い出話も必聴。

An Outsider in the Closed Shop

DL Track07

語注

Barbara Bogaev: Before you joined up with [the Yardbirds](#) and [before the whole Led Zeppelin thing happened](#), you were an [established session player](#) in London. You played with [the Kinks](#), with [the Stones](#), with [Donovan](#), with [Burt Bacharach](#). What did you learn from session work that you used later in both playing and producing in Led Zeppelin?

Jimmy Page: Well, I've gotta tell you that what it was, really, was an [apprenticeship](#). But the reality of it was that, um, that session musicians were actually, in London, a very, very [closed shop](#). It was, you know, the [crème-de-la-crème](#) really. However, they needed somebody who really knew exactly what was going on with all the music of the day and the [source](#) music of it and everything, and also somebody who could [come up with](#) his own ideas.

And, uh, I played on a record anyway that got in the lower end of the top 20. And [all of a sudden](#), behind these closed doors of the [crème-de-la-crème](#), there was like, "Who's that guitarist on that record?" And I was [brought in](#) just to, initially to play exactly what I wanted to--, they said, "Just play what you want." They gave me the [chord charts](#), and it was really, it was really fun. You can imagine that, you know. It was good.

translation ▶

Bogaev: I'm thinking that Led Zeppelin is one of the first, uh, bands to really have an [ambient](#)--a band that recorded its ambient sound. I mean it ...

Page: Yeah.

Bogaev: ... it sounded as if someone was playing drums at a party when you listened to Led Zeppelin records. Was that the sound that you were [going for](#)?

Page: Um, well, [certainly so that the drums could breathe](#). One of the, the [marvelous](#) things about [John Bonham](#), which made things very easy, was the fact that he really knew how to tune his drums. And [I'll tell you what](#), that's [pretty](#) rare in drummers those days. He really knew how to make [the instrument sing](#), and because of that, he could get so much volume out of it just by playing with his wrists, you know -- just an [astonishing](#) technique that was [sort of](#) pretty [holistic](#) if you see what I mean.

But, uh, yeah, [as far as the drums went](#), right from the first recording, it was given a lot of space so you could get the [ambience](#) of it. As far as my [end](#) of it went, there was always great attention paid to where the drums were going to be and whether you could hear all the [harmonics](#) from them.

And also, uh, the one that, for instance, like, "[Levee Breaks](#)" was something where we were playing in one room in a house with a [recording truck](#), and, uh, a drum kit was [duly](#) set up in the main [hallway](#), which was a [three-story](#) hall with a [staircase](#) going up all around the inside of it in a big house, you know. And when John Bonham went out to play the kit in the hall, I [went](#), "Oh, wait a minute, we [gotta](#) do this." And [curiously enough](#), that's just a stereo mic that's up the stairs on the second floor of this building, and that, well, this is natural balance.

Bogaev: Now the term "heavy metal" didn't exist before Led Zeppelin. Um, when you first heard the term heavy metal, what did it mean to you, and is that what you thought you were playing? I mean, the band started out as a blues-rock band and had a slow [evolution](#).

Page: Yeah, I'm not really sure where we got a [tag](#) of that, but [there's no denying](#), I mean, the fact that the elements of what became known as heavy metal is [definitely](#) there within Led Zeppelin. But the reality of it is that it's a [riff music](#), and riff music [goes back to](#) the blues -- the electric blues of the 50s, you know, and what was going on down there in Chicago. And that's it, you know. It's curious.

Actually, it, it, it's said that it's [William Burroughs](#) who first [termed](#) it in, in the book, the Heavy Metal Kid, uh, is one of the characters, you know. When he did an article in the 70s with me for a magazine called [Crawdaddy!](#), and at that time, I was really [honored](#) that he'd been to Zeppelin concerts, and he'd been to a few. I was really quite surprised, 'cause I didn't know.

But he'd asked to interview me. And at that time, he said, "You've got to go to Morocco, because that's where you're gonna--" He said, "What you're doing is [trance music](#)." Well, I knew that. I knew it was trance music without any doubt. But he said, "You've got to go to Morocco, because that's where you're gonna hear, um, you know, riff music." But y--you know, it was a [good call](#), and I went there, and I, and I understood exactly, you know, why he'd asked me to go there.

tanslation ▶

Bogaev: Now, "[Stairway to Heaven](#)." "Stairway to Heaven" you wrote in 1970. What was going on in the band at the time that you wrote that song?

Page: Well, we were recording at [Headley Grange](#), which was a house where we were staying. But we had a recording truck, and it was a really, really good working environment, you know. Um, and I had these [pieces](#), these guitar pieces that I wanted to [put together](#). I had a whole idea of a piece of music that I really wanted to try and [present to](#) everybody and try and [come to terms with](#).

It was a bit difficult really, because it started on [acoustic](#), and, as you know, it goes through to the electric parts. But we had various [run-throughs](#) where I was playing the acoustic guitar and then [jumping over](#) and [picking up](#) the electric guitar. And, um, [Robert](#) was sitting in the corner or [leaning against](#) the wall. And he was, as, as I was [routining](#) the rest of the band with, with this, um, idea and this piece, he was just writing. And all of a sudden, he got up and he started singing along with the, like, the f--, another run-through. And he had, he must have had 80 percent of the words there.

And I, why I'm [saying](#) that story is I want, just wanna let you know just how [inspired](#) we all were at that point of time. We were inspired by each other, you know.

translation ▶

Shifting through the Gears

DL Track11

語注

Bogaev: Now, your guitar part. Uh, of course, the [introduction](#) is one of the most famous acoustic guitar [bits](#) in rock. That and maybe "[Free Bird](#)" is what all [aspiring](#) guitarists play. And I think *every guitar store in the world has a [sign requesting](#) that you please not play "Stairway to Heaven" when [trying out](#) the instruments.

Page: Yeah, but would they [permit me to do](#) it if I went in there?

Bogaev: Did you ever ask? I was going to ask ...

Page: No, no. I won't, I won't ask. "Stairway" denied.

Bogaev: Was the [lead-in](#) something that you had [fiddled around](#) with on your own when you picked up your--

Page: Oh, no, that was part of one of the [sections](#) that I had. You know, yeah, that, as I said, it was [a number of](#) sections that I wanted to [join together](#). And, uh, yeah, I had that bit -- oh, I had that [well and truly](#) before I went into Headley Grange, yeah.

And the whole thing about "Stairway" was that it was something which, going back to those studio days, for me and [John Paul Jones](#), the one thing you didn't do was [speed up](#). Because if you sped up, you wouldn't be seen again, you know. Everything had to be right [on the meter](#) all the way through. And I really wanted to write something which did speed up and took the emotion and the [adrenaline](#) with it and would reach a sort of [crescendo](#), you know. And that was the idea of it. And that's, that's why it was a bit [tricky](#) to sort of [get together](#) in its early stages.

But no, I, I had these sections that, and I knew what [order](#) they were gonna [go in](#), but it, it was just a matter of getting everybody to feel comfortable with each, sort of, sh--, [gear sh--shift](#) that was gonna be coming.

Bogaev: I'm curious what stories fans tell you about that song, what it means to them, what memories they have.

Page: Well, you know, the wonderful thing about "Stairway" is the fact that just about everybody's got their own [individual interpretation](#) to it and actually what it meant to them at their point of life. And that's what's so great about it.

Over the [passage](#) of years, you know, people come to me with [all manner of](#), sort of, stories about, you know, how it meant, well, or what it meant to them at certain points of their lives, how it actually [got them through](#) some really [tragic c-circumstances](#), or to the other point where--you know, 'cause it's an extremely positive song, you know. It's such a positive energy in it. You know, people have [got married to](#) that.

translation ▶

Interview reproduced with the permission of WHYY, Inc.

セッション・ミュージシャン時代

 [DL](#)  [Track07](#)

バーバラ・ボゲフ：ヤードバーズに加入する前、そしてレッド・ツェッペリンが一世を風靡する前に、あなたはロンドンで名の知れたセッション・プレーヤーでしたよね。キンクス、ストーンズ、ドノヴァン、バート・バカラックとも共演していました。後にレッド・ツェッペリンでの演奏とプロデュースに役立てたどんなことを、セッションの仕事から学ばれたのですか？

ジミー・ペイジ：そうですね、あれは実のところ訓練期間だったということは言っておかなければなりません。しかし現実には、ロンドンのセッション・ミュージシャンというのは実際、ものすごく狭い世界でした。まさに、超一流の人間の集まりだったんですよ。とはいえ、その時代の音楽に何が起きているかとか、その元となった音楽といったあらゆることをきちんと知っている人、そしてまた、自らのアイデアを提供できる人が必要とされていたのです。

僕は、ともかくもチャートのトップ**20**の下の方に食い込んだレコードで演奏したんです。そして突然、その閉ざされた扉の向こうの超一流の人々の世界で、「あのレコードでギターを弾いているのは誰だ？」という話になったわけです。それで僕は迎え入れられて、とにかくまずは思いどおりに弾いてくれと——「好きなように弾いてくればいいよ」と言われたんです。コード譜をくれてね。あれは実際、実に楽しかった。想像が付くでしょう。良かったですよ。

【原文】[▶](#)

レッド・ツェッペリンのサウンド

 [DL](#)  [Track08](#)

ボゲフ：レッド・ツェッペリンはまさにアンビエントな（音を持った）最初のバンドの1つだと思っているのですが——アンビエントなサウンドをレコーディングしたバンドだと。つまり・・・

ページ：ええ。

ボゲフ：・・・レッド・ツェッペリンのレコードを聴くと、誰かがパーティーでドラムをたたいているように聞こえたんです。そういったサウンドは、あなたが狙っていたものですか？

ページ：ええと、そうですね、ドラムがはっきり聞こえるようにしたんですよ。ジョン・ボーナムの素晴らしいところの1つは、そのおかげでいろいろなことが非常に楽になったのですが、彼がドラムのチューニングの仕方を本当によくわかっていたということです。言っておくと、これは当時のドラマーとしては非常に珍しいことだったんですよ。彼は、ドラムの響かせ方を本当によく知っていた。そのおかげで、彼は手首（のひねり）だけであれほどの大音量を出すことができたのです——とにかく極めて全体論的な驚くべきテクニックなのです。言いたいこと、わかるでしょうか。

しかし、ええ、ドラムに関する限り、最初のレコーディングのときから、ドラムの空間を包み込む音を得ることができるように広いスペースを用意しました。僕の意図した限りにおいては、ドラムをどこに置くべきかとか、ドラムから倍音がちゃんと聞こえるか、といったことには常に大いに注意を払っていましたね。

そしてまた、例えば「レヴィー・ブレイク」みたいな曲では、録音車を使ってある家の一室で演奏していたのですが、ドラムキットは玄関ホールにきちんと設置しており、そのホールは3階分の吹き抜けになっていて、大きな家の中で、その吹き抜けの内部を階段がぐるりと巡りながら上がっていく造りになっていたんです。それで、ジョン・ボーナムが出ていってホールでドラムをたたいたとき、僕は「おっと、ちょっと待ってくれ。これでいかなきゃ」と言ったんです。おかしなことに、ステレオマイクが1本、この建物の2階の階段に取り付けてあっただけなんです、これが自然なバランスなんですね。

[【原文】](#) [▶](#)

ヘビーメタルの起源

 [DL](#)  [Track09](#)

ボゲフ：「ヘビーメタル」という言葉は、レッド・ツェッペリン以前には存在しませんでした。ヘビーメタルという言葉を最初に聞いたとき、それはあなたにとってどんな意味がありましたか？　そして、それはあなた方がやっている音楽のことだと思われましたか？　というのも、レッド・ツェッペリンはブルースロック系バンドとしてスタートして徐々に進化していったんですよね。

ページ：そうですね、どこでそういうレッテルを張られたのかよくわかりませんが、それを否定することはできないと思います。つまり、ヘビーメタルとして知られるようになった諸要素が、レッド・ツェッペリンの中には間違いなくあるということです。しかし実際のところ、あれはリフ・ミュージックだったんです。そしてリフ・ミュージックはブルースにさかのぼります——**’50年代**のエレクトリック・ブルース、そしてシカゴで起こっていたこと（シカゴ・ブルース）に。そういうことなんですよ。面白いことに。

実は、初めてこの音楽をそう（ヘビーメタル）と名付けたのは、ウィリアム・パロウズだと言われています。彼の著作の中ですが、ヘビーメタル・キッドは登場人物の1人なんですよ。**’70年代**に彼が僕について『クローダディ』という雑誌の記事を書いたとき、彼がツェッペリンのコンサートに来たことがあると知って、すごく光栄に思いました。彼は何回かコンサートに来てくれていたんです。知らなかったので、とてもびつくりしました。

でも、彼は僕にインタビューしたいと申し込んでいたんです。そしてそのとき、彼は「君はモロッコに行かなければいけない。なぜならそこそ君が——」。彼は「君がやっているのはトランス・ミュージックだ」と言ったんです。それは自分でもわかっていました。一点の疑いもなく、トランス・ミュージックだと思っていました。でも彼はこう言ったんです。「君はモロッコに行かなければいけないよ。そこそがリフ・ミュージックを聴ける場所なんだから」と。でも、とにかくそれはいい考えだったので、モロッコに行きました。そして僕は、なぜ彼が僕にモロッコに行くように言ったのかがはつきりわかりました。

【原文】[▶](#)

インスピレーションを受けて

 **DL**  **Track10**

ボゲフ：さて、「天国への階段」の話に移りましょう。あなたが**1970**年に作曲した「天国への階段」です。あなたがあの曲を書いたとき、バンドでは何が起きていたのですか？

ページ：僕たちはヘッドリー・グレインジでレコーディングをしていました。ヘッドリー・グレインジというのは、僕たちが滞在していた家です。でも、僕たちは録音車を持っていたので、本当にすごくいい作業環境でした。僕は小曲を、ギターの小曲を幾つか用意していて、それをまとめたと思っていました。僕には1つの作品全体の構想があって、それをみんなに披露するよう努め、それでなんとか折り合いを付けたい（1つにまとめた）と思っていたんです。

実際、その作業は少々難しかった。というのも、あの曲はアコースティックで始まって、それから、ご存じの通りエレクトリックパートへと進むからです。でも、いろいろリハーサルする中で、僕はまずアコースティックギターを弾いてから、次に（床の上のケーブルや機材を）跳び越えてエレキギターを手に取りました。一方ロパートは部屋の隅に座っていたか、あるいは壁にもたれ掛かっていました。そして彼は、僕が他のみんなにこの構想と曲を披露している間、彼はひたすら作詞していました。そして突然立ち上がって、次の通し演奏に合わせて歌い始めました。そこで彼は、その時点で歌詞の**80**パーセントを完成させていたに違いありません。

で、なぜこんな話をするかというと、あの当時僕たちがどれほどインスピレーションを受けていたかを知ってもらいたいからです。僕たちは皆、お互いにインスピレーションを受け合っていました。

【原文】 [▶](#)

ギアを入れていく

 **DL**  **Track11**

ボゲフ：では、あなたのギターパートについてです。もちろん、あのイントロはロックにおいて最も有名なアコースティックギター・フレーズの1つです。「天国への階段」と、恐らく「フリー・バード」は、全てのギタリスト志望者が弾く曲でしょうね。それに、世界中の全てのギターショップが、ギターを試奏する際に「天国への階段」を弾くのはおやめください、という掲示を出しているんじゃないかしら。

ページ：ええ。でも、僕が行ったら「天国への階段」を弾かせてくれるかな。

ボゲフ：そう聞いてみたことがあるんですか？ それをお尋ねしようかと・・・

ページ：いやいや。そんなこと聞きませんよ。「天国への階段」は禁止ですよ。

ボゲフ：あの導入部は、あなたがギターを持って、独りでいろいろつま弾いていてできたものなのですか――

ページ：いや、違いますよ。すでに作っていた楽節の一部です。つまり、さっき言ったように、あの曲は、僕が1つにまとめたいと思っていた幾つかの楽節が集まったものなんです。そして、ええ、あの導入部分は――あれはヘッドリー・グレインジ入りする前に完全にできあがっていました。

「天国への階段」全体について言えるのは、あれは、スタジオでセッションしていた時期に話を戻すと、僕とジョン・ポール・ジョーンズがやらなかったことが1つあって、それはテンポを上げることでした。テンポを上げれば、もう顧みられなく（セッションに呼ばれなく）なりますからね。何もかも、最後までずっと同じ拍子で行かなければならなかったのです。それで僕は、実際にテンポを上げながら、感情を高め、アドレナリンを分泌させつつ、一種のクレッシェンドに達するような曲をすぐ書きたかった。そしてそれがこの曲の根本のアイデアだったんです。だからこそ、初期の段階では、まとめるといった作業が少々難しかったわけです。

とにかく、あの楽節はすでにできていて、どういう順序で収めるべきかはわかっていました。でも後は、（曲の中で）次に来る1つ1つのギアチェンジのようなものに対して、みんながじっくりくるようにするということだけが問題だったのです。

ボゲフ：ファンがこの曲についてあなたにどんな話をするのか、興味があります。自分にとってこの曲はどんな意味があるのか、とか、どんな思い出があるのか、とか。

ページ：そうですね、「天国への階段」の素晴らしいところは、ほとんど誰もが、この曲について、そして、各々の人生のその時点においてこの曲がどんな意味を持っていたかについて、自分なりの解釈があるということです。この曲がすごいのはそういうところなんです。

何年にもわたって、僕の所へいろいろな人がやって来ては、ありとあらゆる種類の話を聞かせてくれました。その人の人生の特定の時期において、あの曲がどれほどの意味を持っていたか、本当に悲劇的な状況やその他のことを乗り越えるのに、あの曲が実際、どんな風に役に立ったかということをね――なぜなら「天国への階段」は非常にポジティブな曲ですからね。この曲にはとてもポジティブなエネルギーがあるんです。そう、みんな、そのポジティブなエネルギーと密接に結び付いているんですよ。

【原文】 [▶](#)

（訳：久永 優）

Vocabulary List

A

- all manner of ~** あらゆる種類の～、種々の～
- all of a sudden** 突然
- apprenticeship** 見習い（期間）、訓練
- as far as ~ goes** ～に関して言えば
- aspiring** 野心に燃える
- astonishing** 驚くべき

C

- circumstance** 状況
- come to terms with ~** ～との折り合いを付ける
- come up with ~** ～を思い付く、～を持ち出す

D

- definitely** 確かに
- duly** ふさわしく、正しく、適当に

E

- end** 意図、狙い
- established** 確立された、定評のある
- evolution** 進化、展開

F

- fiddle around** いじくり回す

G

- get A through B** AにBを切り抜けさせる
- get married to ~** ～に結び付く、～と密接な関係になる
- get together** （考えなどを）まとめる
- go back to ~** ～にさかのぼる
- go for ~** ～を目指す
- go in ~** ～に収まる、～にはまる
- good call** いい判断、いい考え

H

- hallway** （玄関、入り口の）広間
- honored** 光栄に思って

I

- individual** 個人の、個々の
- interpretation** 解釈

J

- join together** 結合する、まとめる
- jump over** 跳び越える

L

- lead-in** 導入部、イントロ
- lean against ~** ～に寄り掛かる

M

- marvelous** 素晴らしい

O

- order** 順番

P

- passage** 経過
- permit A to do** Aに～することを許す
- piece** 小曲、小品
- present to ~** ～に披露する
- pretty** 非常に、かなり
- put together** まとめる

T

- term** ～を...と名付ける、称する、呼ぶ
- tragic** 悲劇的な、悲惨な
- tricky** やりにくい、難しい
- try out** ~ ～を試してみる

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	ページは、レッド・ツェッペリンに加入する以前は商業音楽活動を行っていなかった。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	レッド・ツェッペリンの持つアンビエントなサウンドは、偶然の産物である。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	「レヴィー・ブレイク」のレコーディングは、スタジオではなく、一般の邸宅で行われた。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	ページは、レッド・ツェッペリンの源流はブルースにあると思っている。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	作家、ウィリアム・バロウズは、雑誌『クローダディ』の記事の中で初めて「ヘビーメタル」という用語を使った。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	「天国への階段」のイントロは、レコーディング時にページが即興で作曲したものである。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	「天国への階段」の詞の大半は、ボーカルのロバート・プラントがレコーディング時に即興で作詞したものである。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	ページは、ギターショップで「天国への階段」を試奏したいと言ったことがある。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	「天国への階段」は、最初から最後まで同じテンポで演奏される。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	ページは、「天国への階段」はポジティブな曲であると考えている。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	ページは、レッド・ツェッペリンに加入する以前は商業音楽活動を行っていなかった。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	レッド・ツェッペリンの持つアンビエントなサウンドは、偶然の産物である。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
3	「レヴィー・ブレイク」のレコーディングは、スタジオではなく、一般の邸宅で行われた。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	ページは、レッド・ツェッペリンの源流はブルースにあると思っている。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	作家、ウィリアム・バロウズは、雑誌『クローダディ』の記事の中で初めて「ヘビーメタル」という用語を使った。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
6	「天国への階段」のイントロは、レコーディング時にページが即興で作曲したものである。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
7	「天国への階段」の詞の大半は、ボーカルのロバート・プラントがレコーディング時に即興で作詞したものである。	C	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	ページは、ギターショップで「天国への階段」を試奏したいと言ったことがある。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
9	「天国への階段」は、最初から最後まで同じテンポで演奏される。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
10	ページは、「天国への階段」はポジティブな曲であると考えている。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

語注

the Yardbirds

ザ・ヤードバーズ ★ (1963-68、'92-) イギリスのブルースロックバンド。

[▶本文に戻る](#)

before the whole Led Zeppelin thing happened

★「レッド・ツェッペリンにまつわることを全てが起きる前」の意。

[▶本文に戻る](#)

established

確立された、定評のある

[▶本文に戻る](#)

session player

セッション・プレイヤー ★ 特定のバンドに所属せず、さまざまなアーティストと共演したり、サポート役としてレコーディングに参加したりするプレイヤー。

[▶本文に戻る](#)

the Kinks

キンクス ★ (1964-96) イギリスのロックバンド。代表曲に「ユー・リアリー・ガット・ミー」('64) など。

[▶本文に戻る](#)

the Stones

★ザ・ローリング・ストーンズのこと。

[▶本文に戻る](#)

Donovan

ドノヴァン ★ (1946-) スコットランド・グラスゴー生まれのフォークロックシンガー。代表曲に「メロー・イエロー」('66) など。

[▶本文に戻る](#)

Burt Bacharach

バート・バカラック ★ (1928-) アメリカのポピュラー音楽の作曲家・ピアニスト。代表作に「雨にぬれても」('69) など。

[▶本文に戻る](#)

apprenticeship

見習い(期間)、訓練

[▶本文に戻る](#)

closed shop

★もともと労働組合に加入することが雇用条件となっているシステムのことだが、ここでは「排他的な世界、特権的な世界」の意で使っている。

[▶本文に戻る](#)

crème-de-la-crème

超一流の人々、最高の人々 ★フランス語で (the) cream of the cream の意。cream は「最上の部分」の意。

[▶本文に戻る](#)

source

元(の)、出典(の)

[▶本文に戻る](#)

come up with ~

~を思い付く、~を持ち出す

[▶本文に戻る](#)

all of a sudden

突然

[▶本文に戻る](#)

bring ~ in

~を引入れる、~を参加させる

[▶本文に戻る](#)

chord chart

コード譜 ★ギターのコードだけが書かれた譜面。

[▶本文に戻る](#)

ambient

アンビエントな、包み込むような、人を取り巻く空間を現出させるような ★ここでは音響用語で、臨場感を演出する残響を指す。
[▶ 本文に戻る](#)

go for ~

~を目指す
[▶ 本文に戻る](#)

certainly so that the drums could breathe.

★we were certainly going for a sound that way where the drums could breathe.ということ。breatheは「呼吸する、（風が）そよぐ」という意味だが、ここではbe heard clearlyといったニュアンスで用いられている。
[▶ 本文に戻る](#)

marvelous

素晴らしい
[▶ 本文に戻る](#)

John Bonham

ジョン・ボーナム ★(1948-80)。レッド・ツェッペリンのドラマー。
[▶ 本文に戻る](#)

I'll tell you what

(相手に注意を促して) いいですか、(後続の話を強めて) ここがポイントですが ★ = I'm telling you
[▶ 本文に戻る](#)

pretty

非常に、かなり
[▶ 本文に戻る](#)

the instrument

楽器 ★ここではドラムを指す。
[▶ 本文に戻る](#)

sing

音色を出す、心地よく響く
[▶ 本文に戻る](#)

astounding

驚くべき
[▶ 本文に戻る](#)

sort of ~

やや～、～みたいな
[▶ 本文に戻る](#)

holistic

全体論的な ★全体は単なる各部分の総和ではなく、各部分が有効に統合したものであるという考え方。
[▶ 本文に戻る](#)

as far as ~ goes

～に関して言えば
[▶ 本文に戻る](#)

ambience

★ = ambient sound。ここでは、ドラムの部屋鳴り、残響、エアー感といった意味。
[▶ 本文に戻る](#)

end

意図、狙い
[▶ 本文に戻る](#)

harmonic

倍音、ハーモニクス ★基音の上で同時に鳴る、基音の整数倍の振動数の音。
[▶ 本文に戻る](#)

"Levee Breaks"

「レヴィー・ブレイク」 ★レッド・ツェッペリンの4枚目のアルバム『レッド・ツェッペリンIV』に収録されている曲、"When the Levee Breaks"のこと。

[▶本文に戻る](#)

recording truck

録音車 ★コンサートの録音などに使われる、録音機材を備えた車両（モービル・スタジオ）のこと。

[▶本文に戻る](#)

duly

ふさわしく、正しく、適当に

[▶本文に戻る](#)

hallway

（玄関、入り口の）広間

[▶本文に戻る](#)

three-story

3階建ての ★storyは「階、層」。

[▶本文に戻る](#)

staircase

階段

[▶本文に戻る](#)

go

言う ★ = say

[▶本文に戻る](#)

gotta

★ = (have) got to

[▶本文に戻る](#)

curiously enough

奇妙なことに、不思議な話だが

[▶本文に戻る](#)

evolution

進化、展開
[▶ 本文に戻る](#)

tag

あだ名、レッテル
[▶ 本文に戻る](#)

there's no denying ~

~を否定することはできない ★ = it's impossible to deny ~
[▶ 本文に戻る](#)

definitely

確かに
[▶ 本文に戻る](#)

riff music

リフ・ミュージック ★リフは、曲の中で繰り返し使われる短いフレーズ。
[▶ 本文に戻る](#)

go back to ~

~にさかのぼる
[▶ 本文に戻る](#)

William Burroughs

ウィリアム・バロуз ★（1914-97）'50年代アメリカのビート・ジェネレーションを代表する作家。代表作に『裸のランチ』（'59）など。'61年に発表した『ソフト・マシーン』の中で、登場人物の1人をHeavy Metal Kidと形容した。
[▶ 本文に戻る](#)

term

~を...と名付ける、称する、呼ぶ
[▶ 本文に戻る](#)

Crawdaddy!

『クローダディ』 ★アメリカの音楽雑誌。同国初のロック専門誌。1966年創刊。
[▶ 本文に戻る](#)

honored

光栄に思っ
[▶ 本文に戻る](#)

trance music

トランス・ミュージック ★規則的なビートと、どこか宗教性を感じさせるサウンドで陶酔させるような音楽。
[▶ 本文に戻る](#)

good call

いい判断、いい考え
[▶ 本文に戻る](#)

"Stairway to Heaven"

「天国への階段」 ★レッド・ツェッペリンの代表曲。4枚目のアルバム『レッド・ツェッペリンIV』に収録されている。

[▶ 本文に戻る](#)

Headley Grange

ヘッドリー・グレインジ ★イングランド・ハンプシャー州にある古い屋敷。grangeは「邸宅、田舎屋敷」といった意味。当時は、こういった場所にモービル・スタジオを持ち込んでレコーディングを行うロックバンドも少なくなかった。

[▶ 本文に戻る](#)

piece

小曲、小品

[▶ 本文に戻る](#)

put together

まとめる

[▶ 本文に戻る](#)

present to ~

～に披露する

[▶ 本文に戻る](#)

come to terms with ~

～との折り合いを付ける

[▶ 本文に戻る](#)

acoustic

アコースティックの ★音を電氣的に増幅しないもの。

[▶ 本文に戻る](#)

run-through

通し稽古、リハーサル ★ = rehearsal、practice session

[▶ 本文に戻る](#)

jump over

跳び越える

[▶ 本文に戻る](#)

pick up ~

～を拾い上げる、～を手にする

[▶ 本文に戻る](#)

Robert (Plant)

ロバート（・プラント） ★レッド・ツェッペリンのボーカリスト。1948年、イングランド生まれ。ツェッペリン解散後はソロや、ページと組んだ「ページ&プラント」というユニットで活動。

[▶ 本文に戻る](#)

lean against ~

～に寄り掛かる

[▶ 本文に戻る](#)

routine

★ routine には名詞で act、perform などの意味があり、ここでは routine を動詞として使い、「（バンドのメンバーに対して）演じてみせる、披露してみせる、リハーサルしてみせる」といった意味で使っているものと思われる。

[▶ 本文に戻る](#)

saying

★storyにはtellingの方が普通。

[▶ 本文に戻る](#)

inspired

インスピレーションを受けて

[▶ 本文に戻る](#)

introduction

イントロダクション、導入部

[▶本文に戻る](#)

bit

小片、一節

[▶本文に戻る](#)

"Free Bird"

「フリー・バード」 ★アメリカのロックバンド、レーナード・スキナードの代表曲。

[▶本文に戻る](#)

aspiring

野心に燃える

[▶本文に戻る](#)

every guitar store ... trying out the instruments

★「ギターショップで試し弾きする人の多くがこの曲を弾くため、店員は聞き飽きているだろう」という意味のジョーク。アメリカのコメディ映画『ウェインズ・ワールド』では、楽器店の店員が、この曲を弾こうとした主人公にNO STAIRWAY TO HEAVEN（『天国への階段』禁止）という掲示を見るよう促すシーンがある。

[▶本文に戻る](#)

sign

掲示

[▶本文に戻る](#)

request

求める、頼む

[▶本文に戻る](#)

try out ~

～を試してみる

[▶本文に戻る](#)

permit A to do

Aに～することを許す

[▶本文に戻る](#)

lead-in

導入部、イントロ

[▶本文に戻る](#)

fiddle around

いじくり回す

[▶本文に戻る](#)

section

楽節、（曲の）一部分

[▶本文に戻る](#)

a number of ~

幾つかの～、たくさんの～

[▶本文に戻る](#)

join together

結合する、まとめる

[▶本文に戻る](#)

well and truly

完全に、すっかり

[▶本文に戻る](#)

John Paul Jones

ジョン・ポール・ジョーンズ ★本名John Baldwin。レッド・ツェッペリンのベーシスト。1946年、イングランド生まれ。ツェッペリン加入前はジョーンズもセッション・ミュージシャンだった。ツェッペリン解散後は主にアレンジャーとして活躍している。

[▶ 本文に戻る](#)

speed up

速度を上げる、テンポを上げる

[▶ 本文に戻る](#)

on the meter

(一定の) 拍子に合わせて、リズムに乗って ★ = with correct speed。meter は「拍子」。

[▶ 本文に戻る](#)

adrenaline

アドレナリン ★副腎髄質ホルモン。血圧を上げる作用を持つ。

[▶ 本文に戻る](#)

crescendo

(音量が) 次第に増すこと、クレッシェンド ★イタリア語の音楽用語。

[▶ 本文に戻る](#)

tricky

やりにくい、難しい

[▶ 本文に戻る](#)

get together

(考えなどを) まとめる

[▶ 本文に戻る](#)

order

順番

[▶ 本文に戻る](#)

go in ~

～に収まる、～にはまる

[▶ 本文に戻る](#)

gear shift

ギアチェンジ

[▶ 本文に戻る](#)

individual

個人の、個々の

[▶ 本文に戻る](#)

interpretation

解釈

[▶ 本文に戻る](#)

passage

経過

[▶ 本文に戻る](#)

all manner of ~

あらゆる種類の～、種々の～

[▶ 本文に戻る](#)

get A through B

A に B を切り抜けさせる

[▶ 本文に戻る](#)

tragic

悲劇的な、悲惨な

[▶ 本文に戻る](#)

circumstance

状況

[▶ 本文に戻る](#)

get married to ~

～に結び付く、～と密接な関係になる

[▶本文に戻る](#)

The Rolling Stones / Martin Scorsese

ミック・ジャガー：彼が世界最高だからさ。
(映画『ザ・ローリング・ストーンズシャイン・ア・ライト』(原題：Shine a Light)の監督になぜマーティン・スコセッシを選んだのか、というリポーターの質問に対して)

発音分析

ジャガーの声は、典型的なイングランド南部訛りだ。①[et]が「アイ」になる、②語末や語中の[t]が聞こえなくなるといった、ジミー・ペイジと同じ特徴がもつと濃縮された形で表れている。彼の英語は切れ切れに聞こえるが、これはイギリス英語らしい力強い発音と頻繁な②の影響。一方、スコセッシはかなり滑舌が良く、明瞭な発音だ。ニューヨーク訛りの代表的な特徴は、語中や語末の[r]が落ちることだ。ジャガーの発音では、例えばtogetherがそれ。

Interview Data	
収録日	2008年3月30日
収録地	ニューヨーク
スピード	速い
語彙・表現	普通

ザ・ローリング・ストーンズ／マーティン・スコセッシ
The Rolling Stones / Martin Scorsese

ザ・ローリング・ストーンズ
1962年に結成したイギリスのロックバンド。現在のメンバーは、ボーカルのミック・ジャガー（1943年生まれ、写真右）、ギターのキース・リチャーズ（'43年生まれ）、ロニー・ウッド（'47年生まれ、写真左）、ドラムのチャーリー・ワッツ（'41年生まれ）。ジャガーは2003年にナイトの叙勲を受けている。

マーティン・スコセッシ
映画監督。1942年、アメリカ・ニューヨーク生まれ。『ディパーテッド』（'06）でアカデミー監督賞。音楽好きで、『ボブ・ディラン ノー・ディレクション・ホーム』（'05）などの音楽ドキュメンタリーも手掛けている。

「生ける伝説」との呼び声も高いザ・ローリング・ストーンズが、アカデミー賞監督のマーティン・スコセッシを迎えて、2006年にニューヨークで行われたコンサートの舞台裏を映画化。撮影当時でメンバー平均年齢64歳、今も現役バリバリな彼らの、若者顔負けなパワーを見よ！

A Special Audience

DL Track13

語注

Mick Jagger: Good afternoon, everyone. Hello. Good afternoon, [New York](#)!

Moderator: First question, right here.

Reporter 1: Good afternoon to all of you.

The Rolling Stones and Martin Scorsese: Thank you. Thank you very much.

Reporter 1: Question for all five. Mr. Scorsese, could you explain why it was important for you to make [this film](#) in [a small venue](#) in your [native](#) Manhattan. To the members of the band, Mick [at one point](#) says, "You've been a great audience." I'm sure you've said that before, I'm sure you'll say it again. Was this audience special? And if so, why?

Scorsese: Um, the importance of making the film on, on a smaller venue, for me ... I [contemplated](#), we discussed doing it in a, a bigger [arena](#), and I [looked into](#) that. And actually, you know, when I, while I was doing it, while I was trying to prepare for that, I began to realize I'd rather--I think [I'm better suited to](#), uh, [try](#) to [capture](#) the group onstage in a smaller stage, more for the [intimacy](#) of the group and the way they play together; the way you see the band work together and work each song.

I found that to be interesting and, uh, more than interesting, it's just a [compulsion](#) of mine. I like to be able to see that and be able to [cut from one image to the other](#), movement, that sort of thing, but really about the intimacy of the group and how they work together.

Reporter 1: Mick?

Jagger: Well, I can't remember what you said now, but the, the audience was, the audience was a good audience, ['cause](#) I think they really [got into the spirit of](#) making the movie as well as enjoying the, you know, being an audience for the band. They were a great audience for the band, but I think they also were a great audience for the movie. 'Cause I thought they --

Ronnie Wood: [They were all cameramen.](#)

Jagger: They all realized they were in it, you know. Yeah.

Scorsese: [That's right, with all the cameras.](#)

Jagger: That was Ronnie's audience.

Scorsese: They enjoyed it. The cameramen liked it, yeah.

Reporter 1: K--Keith, anything special about [that night](#)?

Keith Richards: Uh, um, uh, [the Beacon Theatre](#) is, uh, like, special [for some reason](#) anyway. Especially if you can play there for more than one night, and the room sort of [wraps its arms around](#) you, you know, and every night gets, like, warmer. And, uh, it's a great-feeling room, you know, and, uh, also, hey, this band, you know, didn't [start off](#) in stadiums, you know.

Rock 'n' Roll Workout

DL Track14

語注

Reporter 2: I'd like to ask all the band members, but [perhaps](#) starting with you, Mick. We are all [impressed](#) and [have been](#), and this movie reminds us of the [boundless](#) energy you have, and what it takes to be [on tour](#). Uh, starting with, uh, Mr. Jagger, I'd love to know what [vitamins](#) you take and what's your [workout regimen](#), 'cause all of us would like to be able to do this.

Jagger: Oh, God. I don't think you do, you forget about that.

Richards: If he told you, you'd all [be on](#) it.

Jagger: No, I mean, you know ... [chuck it out, mate](#) ...

Richards: [E-plus](#)!

Jagger: So, uh, no [gym](#), no vitamins, I think that day. Just do it, just get out there and, you know. You, when you get very [pressurized](#) in, in these situations, though, the thing is, I always find when there's a movie [shoot](#), that you have to really, you know, [come up to the plate](#).

And we, fortunately, [we had two nights of this](#). When Keith was saying, you know, it's good to play there more than one night, and I agree with him. It's like, 'cause the first night we played was more like a rehearsal for us [in a way](#). And the, by the time the second night came [round](#), we got more [adjusted](#) to playing in a small theater, because we, you know, though we played lots of small theaters in the past, we hadn't done any on [this tour](#).

So this was, like, quite different suddenly to go into the small theater. So, by the second night, you know, we knew we had to sort of do it. This was [gonna](#) be the night with [all these people there and everything](#), so I felt really good about that particular night. So, you know, you just have to sometimes come and do it.

Richards: It was a [turn-on](#).

Jagger: Yeah.

Reporter 3: Gentlemen, I'd like to ask why you chose [Marty](#) as the director?

Jagger: 'Cause he's the best one [around](#).

Reporter 3: What, what does he bring, what does he bring to this film that other directors wouldn't?

Jagger: I can't answer that. I mean, you know, I think that I'm gonna [embarrass](#) him now. He's not part of the furniture, you know, 'cause he's actually sitting here. It's like, so it, it, he's, he's a [fantastic](#) director, and he [assembled](#) a wonderful [crew](#). I think that he would agree with that. He got fantastic, uh, [DPs](#), camera, lighting, all what, everyone working on it.

And then very [painstaking](#) on the [editing](#) to produce the movie that you see. It's not all in the shooting. It's [obviously](#), you know, in the editing, too.

Richards: It's also that, uh, we didn't choose Marty, Marty chose us.

Scorsese: Well, it was [mutual](#).

Setting a Set List

DL Track15

語注

Reporter 4: A lot of people have called the film, sort of, a [meditation](#) on [aging](#). And [I was just wondering, is](#) that the reason why you chose a lot of [bluesy numbers](#) and a lot of sort of slower songs? But then you sort of [amp it up](#) at the end. Anyway, I was just wondering why [you guys](#) chose the [set list](#) like that?

Jagger: Hm. I don't really know now. It's like 18 months ago. I don't, I mean, you know ...

Richards: Listen to me. [Michael](#), Michael, he [comes up with](#) the set list and, because he [s got to](#) sing them, you know. And unless I say suddenly, "Hey, Mick, you've got 10 songs in the same [key](#)," you know what I mean? I don't [interfere](#). And, uh, so we [make it up as long](#)-- and the man's got to sing 'em, you know?

Jagger: So, I don't think --, yeah, I, I think [it's that](#) you, you pick the one you think is best for the night, really. I, I didn't, wasn't thinking, "God, this is a [metaphor](#). It's gonna be ..."

Richards: Yeah, it might be a [sore throat](#). It could be anything, you know, what I mean? And ...

translation ▶

Nerve-wracking Fun

DL Track16

語注

Reporter 5: I'm just wondering, for the Stones, how much fun are you guys still having doing this all these years later?

Jagger: Well, I'm having a lot of fun. I mean, it took us two days to shoot the picture, we've spent about four days doing the [premieres](#) and [promotions](#). It's, like, taken twice as long doing that. But I think we had, we had a lot of fun.

You know, the, shooting this movie was, quite, uh, [nerve-wracking](#) in some ways. It, it was fantastically enjoyable, but in, in other ways, do you know, as I was saying before, it is very nerve-wracking for us, because we know we have to do something on the night.

And I'm sure Marty, you know, [got a lot of things going on](#). He's got to cover it if it happens. So, you know, it was a, quite a challenge. And, uh, and talking about, you know, having fun, yeah, it was great fun to do, but it's also a challenge for everyone sitting at this [platform](#), to come up with the [goods](#) both on the night and after it.

So, well, you know, you see this, [career-wise](#), you always see these things as great fun, but they're also challenges - to do these things that are slightly different from what you do normally.

translation ▶

Reporter 6: I would like to know who chose those [clips](#) from [the documentaries](#) that you showed. In one of those, you said that, when the journalist asked that, "Do you think you'll still perform when you're 60?" And you said, "Yes." Well, do you still, uh, perform when you're 70?

Jagger: Oh, I [dunno](#). I think, uh --

Richards: That's only five years away.

Scorsese: Yeah, it's pretty close, man. It's pretty close, not that far, not that far. [Whew!](#) Uh, who chose the clips? Uh, [David Tedeschi](#)'s the editor of the film and, uh, we worked together for, I dunno, almost nine, ten months, right, editing this thing. Uh, the music [came together](#) rather quickly, I think, in the [cutting](#). And that was very enjoyable. But, the hardest part was [putting together](#) the clips. I mean, I think David was, uh, over 400 hours of [footage](#), that, uh, that he sort of [culled](#), of the documentary sections of [archival](#) footage, and then he chose about 40 hours for me to see. And then we worked from that 40 hours.

And it was a matter of balancing saying something, but not saying too much and then [saying nothing with it](#). That was the key, uh, and balancing it so it wouldn't, it wouldn't [unbalance](#) the music in the [piece](#). Because to do a film with all archival footage, I think, uh, would be a four-, five-hour documentary. Yeah, that's another movie ... Do we ...?

Reporter 6: Did the boys have anything to say about the directing?

Jagger: Well, I, yeah, there were some moments when the archival footage, I felt, was going too long and it, you, I felt that we were losing, we were [going off into](#) another movie, uh, and that we're forgetting that we're in a concert. It, which is, 'cause it was very kind of [riveting](#) sometimes, that old movie.

But then, if it goes on, sometimes, too long you wanna come back to the concert stage. So that sometimes, that, David left them a little bit [on the long side](#). So, in the end, in the end, uh, we [ended up with](#) what we have, which is good.

特別な聴衆

 [DL](#)  [Track13](#)

ミック・ジャガー：こんにちは、皆さん。やあ。こんにちは、ニューヨーク！

司会者：最初の質問はこちらの方に。

リポーター1：皆さん、こんにちは。

ザ・ローリング・ストーンズ&マーティン・スコセッシ：ありがとう。どうもありがとう。

リポーター1：5人全員への質問です。スコセッシさん、なぜあなたにとって、生まれ育ったマンハッタンにある小さな会場でこの映画を製作することが重要だったのか、説明していただけますか？ ストーンズのメンバーの皆さん（にはこちらの質問です）。ミックが（映画の中の）ある箇所で、「君たちは素晴らしい聴衆だ」と言っています。きつとこれまでも言ったことのある言葉でしょうし、これからまた、そう言うことでしょう。今回の聴衆は特別でしたか？ もしそうであれば、どうしてでしょうか？

スコセッシ：この映画を、小さな会場で撮る重要性ですが、私にとって・・・私は熟考しました、私たちはもっと大きな舞台で撮影することを話し合い、私はそうすることを検討しました。ところが実際、そうしているうち、その準備をしようとしているうちに、わかり始めたのです、むしろ――より小さなステージで演奏中のストーンズを撮影し、彼らの親密さと一緒に演奏している様子をとらえようとする方が、自分には向いていると思うのです。ストーンズのメンバーたちが力を合わせて、1曲1曲を紡ぎ出す様子をね。

私にはそれが興味深く思えて、いや、興味深いどころか、それは単なる私の衝動ですね。それを目にすることができて、次々に映像や動きやそういったものをつなげていくことができるのは、楽しいことです。でも（大切なのは）、あくまで、ストーンズの親密さや、彼らがお互いにどう影響しあっているかなんです。

リポーター1：ミックはどうですか？

ジャガー：ええと、あなたが今何て言ったか思い出せないんだけど、あのときの聴衆はいい聴衆だったよ。何しろ、ストーンズの聴衆として（演奏を）楽しむことに加えて、映画作りを本当に楽しんでいたと思うからね。ストーンズにとっては素晴らしい聴衆だったけれど、この映画にとっても素晴らしい（エキストラとしての）聴衆だった。だって、思ったんだ、彼らは――

ロニー・ウッド：皆、（聴衆じゃなくて）カメラマンだった。

ジャガー：彼らは皆、映画に出演することをわかっていたからね。うん。


スコセッシ：そうだね、あれだけカメラがあればね。

ジャガー：あれはロニーの聴衆だったろ。

スコセッシ：彼ら（カメラマンたち）は、楽しんでいたね。カメラマンたちは喜んでいたよ、うん。

リポーター1：キース、あの夜に関して何か特別なことは？

キース・リチャーズ：ええと、ピーコン・シアターは、どのみち、どういう訳か特別なんだよ。あそこで2晩以上、演奏できるときには特に、あの空間が、何というか自分を包み込んでくれて、夜を迎えるたびにもっと温かくなっていくんだ。気分のいい空間だし、それに、ほら、このバンドだって、最初からスタジアムで演奏していたわけじゃないんだしね。

[【原文】](#) 

ロックンロール的トレーニング

DL **Track14**

リポーター2：ストーンズのメンバー全員にお尋ねしたいのですが、もしよろしければ最初にミックからお願いします。私たちは皆、感銘を受け、これまでも感銘を受け続けてきました。この映画から、皆さんの尽きることないエネルギーと、ツアーをやるために必要な資質というものにあらためて気付かされます。まずはジャガーさん、どんなビタミンを飲んでいて、どんな（体力作りの）トレーニング・メニューを組んでいるかを、ぜひ教えていただきたいのですが。私たちも皆、それができるようにになりたいので。

ジャガー：参ったな。できるようになりたくないと思うな、諦めなよ。

リチャーズ：教えてしまったら、皆が始めちゃうからね。

ジャガー：いや、その・・・そんなの捨てちゃえって・・・

リチャーズ：イー・プラスだよ！

ジャガー：だから、ジムもビタミンもなしだったと思うよ、あの日は。やるだけなんだよ、ステージに上がるだけさ。こういう状況では、ものすごくプレッシャーを受けるんだけどね。実際のところ、映画撮影のときはいつも、本気で挑まなきゃいけないという気持ちになるものなんだよ。

幸い、これには2晩かけることができたけどね。あそこは2晩以上にわたって演奏するのがいいってキースが言っていたけど、俺もそう思うよ。だって、1晩目の演奏は、俺たちにしてみれば、ある意味、リハーサルみたいな感じだったからね。で、2晩目が始まるころには、俺たちも小さい劇場での演奏にだいぶ慣れてきたんだ。昔は小さな劇場でよく演奏したけれど、今回のツアーではやってなかったからね。

だから、今回、突然あの小さい劇場に入るっていうのは、かなり感じが違ったんだ。それで、2晩目には、まあ、俺たちはとにかくやらなくちゃいけないとわかってた。それが、こうした（撮影関係の）人たちやら何やらが入る予定の日だったから、特にあの晩の俺はすごく気分が良かったよ。だから、まあ、時にはとにかく（その場に）やって来てやるしかないんだよ。

リチャーズ：（あの晩は）いい刺激になったよ。

ジャガー：そうだな。

リポーター3：皆さんにお伺いしたいのですが、なぜマーティーを監督に選んだのですか？

ジャガー：彼が世界最高だからさ。

リポーター3：彼は、他の監督ならやらないであろう何を、この映画に持ち込んでいますか？

ジャガー：それには答えられないね。だって、ほら、彼に今、気まずい思いをさせようとしてるじゃないか。彼は（この部屋の）備品の一部じゃないんだ、実際、ここに座っているんだから。何というか、彼はすごい監督だし、素晴らしいクルーを揃えてくれた。彼もそのことについては同意すると思う。彼には、すごい撮影監督や、カメラ（スタッフ）、照明（スタッフ）がいて、皆で取り組んでくれた。

それに、その後は、今のような形の映画を作り上げるための編集作業に、ものすごく骨を折ってくれた。映画というのは撮影が全てじゃないんだよ。当然だけど、編集にも重要な役目があるんだ。

リチャーズ：それに、俺たちがマーティーを選んだわけじゃない。マーティーが俺たちを選んでくれたんだ。

スコセッシ：ええと、それはお互いさまだよ。

【原文】[▶](#)

ふさわしい曲を選ぶ

DL **Track15**

リポーター4：たくさんの人々がこの映画を、何というか、年齢を重ねることへの考察、と呼んでいます。そこで私は気になったんですが、だからこそ、ブルース調の曲やテンポが遅めの曲を多く選んだのでしょうか？　とはいえ、最後には勢いを上げていますね。とにかく、皆さんはなぜ、ああいったセットリストを選ばれたのでしょうか？

ジャガー：うーん。今となってはよくわからないな。18カ月も前のことだし。別に、その・・・

リチャーズ：いいかい。マイケルだよ、マイケル、彼がセットリストを考えるんだ、歌うのは彼だからね。まあ、俺が急に「おい、ミック、同じキーの曲が10曲並んでるぞ」とでも言わない限りね。どういことかわかるだろう？　俺は干渉しないんだ。それで、歌える限り、俺たちはセットリストを組み立てるんだ。で、それをあいつは歌わなくちゃいけないんだ。

ジャガー：だから、違うんだ――うん、あの夜に一番ふさわしい曲を選んだだけのことだと思うね、実際。「よし、これは隠喩だ。あれはこうなる・・・」なんて考えていたわけじゃなかった。

リチャーズ：うん、のどの痛みのせいかもしれないし。どんな理由だとしてもおかしくないだろ？　それで・・・

【原文】[▶](#)

緊張もあり、楽しさもあり

 DL  Track16

リポーター5：ストーンズへの質問ですが、長年にわたってバンド活動をしていますが、こういうことをするのは今なおどれくらい楽しいものなんですか？

ジャガー：そうだな、すごく楽しんでるよ。まあ、映画撮影にかかったのが2日間で、プレミアとプロモーションに4日間かけている。撮影の2倍かかっているんだけど。でも、楽しかったよ。

まあ、この映画の撮影は、ある部分ではかなり緊張を強いられた。素晴らしく楽しかったんだけど、一方では、さっきも言ってたけど、俺たちにとってすごく神経をすり減らすものだよ。何しろ、あの夜に何かしらやっつてのけなくてはいけない、とわかっているんだからね。

マーティーの方でもいろいろ進めることがあったはずだ。何かあったら彼がカバーしなきゃいけないしね。だから、まあ、大変な挑戦だったよ。楽しさということについて言えば、ああ、素晴らしく楽しかったんだけど、同時に、このひな壇に座っている全員にとって挑戦でもあったんだ、当日の夜とその後の両方でいい結果を出すことはね。

だから、キャリアの面では、こうしたことはすごく楽しいと思えるけれど、挑戦でもあるんだ——いつもやることと少し違う、こういったことをするのはね。

【原文】[▶](#)

作品のバランスを取る

DL **Track17**

リポーター6：あなた方が（映画の中で私たちに）見せた、過去の記録映像からのクリップを選んだのはどなたなのか、教えてください。その中で、あるジャーナリストに「60歳になってもまだ演奏していると思いますか」と聞かれて、あなたは「イエス」と答えていました。では、70歳になってもまだ演奏を続けますか？

ジャガー：えっと、わからないよ。俺は――

リチャーズ：それって、ほんの5年先のことだよ。

スコセッシ：うん、もうじきだね。もうじきだよ、そんな遠い話じゃないんだ、遠くないね。やれやれ！ ええと、クリップを選んだのは誰か、ですね？ デビッド・テデスキが編集担当でして、私たちは一緒に、どうだったかな、ほぼ9カ月から10カ月だよ、この編集をしました。音楽（コンサート映像）の部分は、編集作業が、かなり早くまとまったと思います。しかも、とても楽しめました。しかし、一番大変だったのがこのクリップをつなぎ合わせることでした。つまり、確かデビッドは、400時間を超える映像を、このドキュメンタリー部分のために古い記録映像から選び出してきて、そこから私に見せるために約40時間分に絞り込んでくれたんです。それから、私たちはその40時間分を基に作業しました。

それは、何か言うけれども言い過ぎないということのバランスの問題だったんですね、そしてそれを使って主張をしないということでした。それが重要だったんです。そして、作品中の音楽部分と不釣り合いにならないよう、バランスを取ることがね。何しろ、記録映像だけで映画を作ったら、4時間か5時間のドキュメンタリーになるでしょうから。そう、そうなると別の映画ですからね・・・

リポーター6：ストーンズの皆さんは、演出について何か言いたいことはありましたか？

ジャガー：うん、（場所によっては）記録映像が長過ぎるように感じたところもあって、それでわからなくなって、別の映画に迷い込んでいるようで、コンサートをやっているのを忘れそうだったな。その部分が、何しろ、時々とても面白かったりしたからね、その古い映像がさ。

だけど、それが続くと、時々あまりに長く続くとね、コンサートのステージに戻りたくなる。時々デビッドは少し長めに（記録映像を）残していたけど。それでも最後には、あのような映画に仕上がったから、良かったよ。

【原文】[▶](#)

（訳：華市玲子）

Vocabulary List

A

- adjusted** 順応した
- aging** 加齢、高齢化
- archival** 古い記録の
- around** 現存して、世の中にあって
- assemble** 集める、招集する
- at one point** ある時点で、ある箇所で

B

- boundless** 無限の、尽きることのない

C

- career-wise** キャリアの面で ★**-wise**で「～の点で、～の面で」の意味。
- clip** クリップ、短い映像
- come together** まとまる、いい方向へ進む
- come up with ~** ～を思い付く、～を考え出す
- compulsion** 衝動
- contemplate** 熟考する、意図する
- cull** えり抜く、選び取る

E

- embarrass** （～を）困らせる、（～の）顔をつぶす
- end up with ~** ～で終わる、最後には～となる

F

- footage** 撮影場面、映像
- for some reason** 訳あって、何となく
- from one ~ to the other** ～から他のものへ

G

- get into the spirit of ~** ～に熱中する
- good** 価値、利益、望ましい結果

I

- impressed** 感銘を受けた、感動した
- interfere** 干渉する、遮る、邪魔する
- intimacy** 親密さ、親しさ

L

- look into ~** ～を検討する、～を検証する

M

- make ~ up** ～を組み立てる、～を編成する
- meditation** 深く思いを巡らすこと、瞑想、熟慮
- mutual** 相互の、共通の

N

- native** 生まれ育った、故郷の
- nerve-wracking** 神経をすり減らす、極度の緊張を強いるような

P

- painstaking** 骨の折れる、苦心した
- piece** 作品
- platform** 演壇
- premiere** プレミア、公開初日
- put together ~** ～を組み立てる、～をまとめ上げる

R

- regimen** 管理、訓練法、教育プログラム
- riveting** 目が離せない、心引かれる

S

- sore throat** のどの痛み
- start off** 出発する、活動を始める
- (be) suited to ~** ～に適している、～に向いている

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(* 質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	『ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト』の撮影は、ニューヨークの野球スタジアムで行われた。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	ミック・ジャガーは、撮影に入る前、厳しいダイエットとトレーニングを行った。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	『シャイン・ア・ライト』の撮影は、2日かけて行われた。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	『シャイン・ア・ライト』では、撮影だけでなく、編集にも大変な労力を要した。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	キース・リチャーズは、『シャイン・ア・ライト』の監督としてマーティン・スコセッシを指名した。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	撮影時に演奏した曲目（セットリスト）は、マーティン・スコセッシ監督が指定した。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	セットリストは、意図的に同じキー（調）の10曲で構成されている。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	デビッド・テデスキは、この映画のために、400時間分ものストーンズの記録映像を用意した。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	記録映像の中で、ミック・ジャガーは「60歳になっても、演奏を続けていると思う」と答えていた。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	ジャガーは、映画の中で使われた記録映像は、退屈で長過ぎると感じていた。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(* 質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	『ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト』の撮影は、ニューヨークの野球スタジアムで行われた。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	ミック・ジャガーは、撮影に入る前、厳しいダイエットとトレーニングを行った。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
3	『シャイン・ア・ライト』の撮影は、2日かけて行われた。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	『シャイン・ア・ライト』では、撮影だけでなく、編集にも大変な労力を要した。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	キース・リチャーズは、『シャイン・ア・ライト』の監督としてマーティン・スコセッシを指名した。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
6	撮影時に演奏した曲目（セットリスト）は、マーティン・スコセッシ監督が指定した。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
7	セットリストは、意図的に同じキー（調）の10曲で構成されている。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
8	デビッド・テデスキは、この映画のために、400時間分ものストーンズの記録映像を用意した。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	記録映像の中で、ミック・ジャガーは「60歳になっても、演奏を続けていると思う」と答えていた。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	ジャガーは、映画の中で使われた記録映像は、退屈で長過ぎると感じていた。	C	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

語注

New York

ニューヨーク ★この記者会見は、スコセッシ監督がザ・ローリング・ストーンズのライブに密着して撮影した映画『ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト』（2008）の、ニューヨークでの公開初日に行われたもの。

[▶本文に戻る](#)

this film

★『ザ・ローリング・ストーンズ シャイン・ア・ライト』のこと。監督マーティン・スコセッシ、製作総指揮・出演ザ・ローリング・ストーンズ。

[▶本文に戻る](#)

a small venue

★ブロードウェイにあるthe Beacon Theatreのこと。venueは「開催地、会場、場所」の意。

[▶本文に戻る](#)

native

生まれ育った、故郷の

[▶本文に戻る](#)

at one point

ある時点で、ある箇所で

[▶本文に戻る](#)

contemplate

熟考する、意図する

[▶本文に戻る](#)

arena

アリーナ、競技場、活躍の舞台 ★ザ・ローリング・ストーンズは通常、大スタジアムでライブ活動をしている。

[▶本文に戻る](#)

look into ~

~を検討する、~を検証する

[▶本文に戻る](#)

be suited to ~

~に適している、~に向いている

[▶本文に戻る](#)

try

★正しくはtrying。

[▶本文に戻る](#)

capture

（カメラなどで）とらえる、写し取る

[▶本文に戻る](#)

intimacy

親密さ、親しさ

[▶本文に戻る](#)

compulsion

衝動

[▶本文に戻る](#)

cut

映像を編集する

[▶本文に戻る](#)

from one ~ to the other

~から他のものへ

[▶本文に戻る](#)

'cause

★ = because

[▶ 本文に戻る](#)

get into the spirit of ~

～に熱中する

[▶ 本文に戻る](#)

They are ...

★ウッドの冗談。ジャガーの発言を茶化している。

[▶ 本文に戻る](#)

That's right, with all cameras.

★ウッドの「皆、（聴衆じゃなくて）カメラマンだった」という発言を受けての言葉。この直後ではジャガーも冗談で応じている。

[▶ 本文に戻る](#)

that night

★ビーコン・シアターでコンサートが行われた夜、また、撮影が行われた夜のことを指している。

[▶ 本文に戻る](#)

the Beacon Theatre

ビーコン・シアター ★1929年にブロードウェーにオープンした、映画やショーを上演する劇場。現在はライブコンサート会場として、多くのミュージシャンに愛されている。収容数2829人。

[▶ 本文に戻る](#)

for some reason

訳あって、何となく

[▶ 本文に戻る](#)

wrap one's arms around ~

～に腕を回す、～を抱きかかえる

[▶ 本文に戻る](#)

start off

出発する、活動を始める

[▶ 本文に戻る](#)

perhaps

もしできれば ★丁寧な依頼として使われる。

[▶ 本文に戻る](#)

impressed

感銘を受けた、感動した

[▶ 本文に戻る](#)

have been

★ここでは、have beenの後にimpressedが省略されている。

[▶ 本文に戻る](#)

boundless

無限の、尽きることのない

[▶ 本文に戻る](#)

on tour

ツアーに出て

[▶ 本文に戻る](#)

vitamin

ビタミン

[▶ 本文に戻る](#)

workout

運動、トレーニング

[▶ 本文に戻る](#)

regimen

管理、訓練法、教育プログラム

[▶ 本文に戻る](#)

be on ~

～に従事して

[▶ 本文に戻る](#)

chuck it out, mate

★chuckは「投げる」、mateはイギリス英語で「仲間、友達」の意。itはビタミン剤を指し、ここでは、ミックがリポーター個人に対してではなく、聴衆全般に向けてこう言っていると思われる。

[▶ 本文に戻る](#)

E-Plus

★リチャーズがビタミン剤の名前として冗談で述べたものと思われる。

[▶ 本文に戻る](#)

gym

(トレーニング) ジム

[▶ 本文に戻る](#)

pressurized

プレッシャーを受けた、追い込まれた ★この意味で用いるのはイギリス英語。

[▶ 本文に戻る](#)

shoot

撮影

[▶ 本文に戻る](#)

come up to the plate

(打つ気満々で) 打席に立つ、進んで物事に取り組む ★step up to the plate という言い方が一般的。plate は野球の「ホームプレート」の意。

[▶ 本文に戻る](#)

we had two nights of this

★ビーコン・シアターでのコンサートは2006年10月29日と11月1日の2回行われた。

[▶ 本文に戻る](#)

in a way

ある意味では
[▶ 本文に戻る](#)

round

★= around
[▶ 本文に戻る](#)

adjusted

順応した
[▶ 本文に戻る](#)

this tour

★このコンサートは2005-06年のワールドツアーの終盤に組み込まれた。
[▶ 本文に戻る](#)

gonna

★= going to
[▶ 本文に戻る](#)

all these people there and everything

★撮影クルー・機材などを指す。
[▶ 本文に戻る](#)

turn-on

興奮させるもの、刺激
[▶ 本文に戻る](#)

Marty

★マーティン・スコセッシのこと。
[▶ 本文に戻る](#)

around

現存して、世の中にあって
[▶ 本文に戻る](#)

embarrass

(～を) 困らせる、(～の) 顔をつぶす
[▶ 本文に戻る](#)

fantastic

現実とは思えない、素晴らしい、すごい
[▶ 本文に戻る](#)

assemble

集める、招集する
[▶ 本文に戻る](#)

crew

(共同の仕事に従事する) 一団、チーム、クルー ★ここでは撮影チームのことを指す。
[▶ 本文に戻る](#)

DP

撮影監督 ★= director of photography。カメラマンや照明スタッフを束ねる、映像面の責任者。
[▶ 本文に戻る](#)

painstaking

骨の折れる、苦心した
[▶ 本文に戻る](#)

editing

(撮影後の) 編集
[▶ 本文に戻る](#)

obviously

明らかに、もちろん

[▶本文に戻る](#)

mutual

相互の、共通の

[▶本文に戻る](#)

meditation

深く思いを巡らすこと、^{めいそう}瞑想、熟慮
[▶本文に戻る](#)

aging

加齢、高齢化
[▶本文に戻る](#)

I was just wondering, is

★what I was just wondering was のつもり。
[▶本文に戻る](#)

bluesy

ブルース調の
[▶本文に戻る](#)

number

曲目
[▶本文に戻る](#)

amp ~ up

～のテンションを上げる、～を盛り上げる
[▶本文に戻る](#)

you guys

あなたたち ★you が複数であることを明確にするための表現。
[▶本文に戻る](#)

set list

セットリスト、曲目リスト ★コンサートで演奏される曲目のリスト。
[▶本文に戻る](#)

Michael

★ミック・ジャガー（本名 Michael Philip Jagger）のこと。
[▶本文に戻る](#)

come up with ~

～を思い付く、～を考え出す
[▶本文に戻る](#)

have got to do

～しなければならない、～であるはずだ
[▶本文に戻る](#)

key

キー、（音楽の）調
[▶本文に戻る](#)

interfere

干渉する、遮る、邪魔する
[▶本文に戻る](#)

make ~ up

～を組み立てる、～を編成する
[▶本文に戻る](#)

as long

★as long as he can sing them などと言おうとしていたと思われる。
[▶本文に戻る](#)

it's that ...

.....という（だけの）ことだ
[▶本文に戻る](#)

metaphor

隠喩、象徴、メタファー

[▶ 本文に戻る](#)

sore throat

のどの痛み

[▶ 本文に戻る](#)

premiere

プレミア、公開初日

[▶本文に戻る](#)

promotion

プロモーション、宣伝

[▶本文に戻る](#)

nerve-wracking

神経をすり減らす、極度の緊張を強いるような

[▶本文に戻る](#)

got ~ going on

★正しくはhad ~ going on。

[▶本文に戻る](#)

platform

演壇 ★ここでは記者会見場の「ひな壇」を指す。

[▶本文に戻る](#)

good

価値、利益、望ましい結果

[▶本文に戻る](#)

career-wise

キャリアの面で ★-wiseで「～の点で、～の面で」の意味。

[▶本文に戻る](#)

clip

クリップ、短い映像

[▶ 本文に戻る](#)

the documentaries

★この映画は、ライブコンサートの映像に、過去の記録映像を織り交ぜて作られている。

[▶ 本文に戻る](#)

dunno

★ = don't know

[▶ 本文に戻る](#)

Whew

やれやれ、なんと ★驚き、疲労感などを表す。

[▶ 本文に戻る](#)

David Tedeschi

デビッド・テデスキ ★スコセッシ監督の音楽ドキュメンタリー『ボブ・ディラン ノー・ディレクション・ホーム』（2005）でも編集担当を務めている。

[▶ 本文に戻る](#)

come together

まとまる、いい方向へ進む

[▶ 本文に戻る](#)

cutting

（映画の）編集作業

[▶ 本文に戻る](#)

put together ~

～を組み立てる、～をまとめる

[▶ 本文に戻る](#)

footage

撮影場面、映像

[▶ 本文に戻る](#)

cull

えり抜く、選び取る

[▶ 本文に戻る](#)

archival

古い記録の

[▶ 本文に戻る](#)

saying nothing with it

★ここではnot using it to make a point（言い分を力説するためにそれを使わない）といったニュアンスで用いられている。

[▶ 本文に戻る](#)

unbalance

（～の）バランスを乱す、（～を）不釣り合いにする

[▶ 本文に戻る](#)

piece

作品

[▶ 本文に戻る](#)

go off into ~

～に陥る

[▶ 本文に戻る](#)

riveting

目が離せない、心引かれる

[▶ 本文に戻る](#)

on the ~ side

～気味で

[▶ 本文に戻る](#)

end up with ~

～で終わる、最後には～となる

[▶ 本文に戻る](#)

Noel Gallagher

アビーロード・スタジオから最後にいい作品が出たのはいつのことだい？ 思い出すのもずいぶん苦勞しそうじゃないか、そうだろ？

発音分析

滑舌はあまり良くなく、音がこもり気味。理路整然とわかりやすく話すというより、言い直しが多くて、下品な表現があちこちに。話題がサッカーとなると、テンションが上がる。そんな感情に任せた話しぶりは、まさにロック・ミュージシャンだ。なお、彼の出身はマンチェスターなので、北イングランド訛りがあちこちに聞かれる。その最大の特徴は、[ʌ]を「ウ」ないしは「オ」に近く発音することだ。例えば done、funは、それぞれ「ドン」「フォン」だ。

Interview Data	
収録日	2008年7月22日
収録地	ロンドン
スピード	やや速い
語彙・表現	普通

ノエル・ギャラガー
Noel Gallagher
1967年、イギリス・マンチェスター生まれ。’91年、弟のリアムが参加していたバンド、オアシスに加入。ギタリスト兼ボーカリストとしてバンドを牽引しながら、「ホワットエヴアー」「ドント・ルック・バック・イン・アンガー」など多数のヒット曲の作詞・作曲を手掛けた。奔放な行動や発言でも知られ、リアムとしばしば衝突。不仲が高じて2009年にオアシスを脱退した後、'11年にソロアルバム『ノエル・ギャラガーズ・ハイ・フライング・パース』を発表した。
2009年、弟リアムとの仲たがいがいから世界的ロックバンド・オアシスを突如脱退したノエル・ギャラガー。脱退1カ月前に収録された本インタビューでは、彼が、同バンドにおける事実上最後のアルバムとなってしまった『ディグ・アウト・ユア・ソウル』について縦横無尽に話す。

Back on Whose Track?

DL Track19

語注

Interviewer: I think a lot of people felt that the, uh, *Don't Believe the Truth* album was a kind of turning point for the band. It was your seventh [studio album](#), and it seemed like something new was happening.

Noel Gallagher: No, I think, um, I think *Standing on the Shoulders of Giants* was a turning point, because [Guigsy and Bonehead](#) left. I think *Don't Believe the Truth* was the best album we'd done in a few years. It certainly had the best songs on it. I guess in, yeah, in one, in one way, in one way it was.

Internally, in the band, I guess, *Standing on the Shoulder of Giants* was the end of, of, you know, Oasis, really, and the beginning of something else. We would have been [within our rights to change](#) our name, do you know what I mean? There's not many people from the original Oasis left, you know--only [Liam, as a matter of fact](#). I wasn't in the original Oasis, so, but you know, there we go. Um, but I think in terms of, uh, [public perception](#), *Don't Believe the Truth* was a, a turning point, but not that it, that [affects](#) anybody in the band. We [kinda](#) just [plow on](#), and ...

Interviewer: But it seemed like you were back on track with that one.

Gallagher: But what does that mean? You know, [back on somebody else's track](#). I never felt I was [off track](#). For me [personally](#) -- I don't know what any of, anybody else in the band thinks--but when I sit down and write a song, I don't think, "Well, is this as good as what I've done ...?" I just write them, you know, and I record them, and other people decide.

So, if other people decided that we were back, you know, after *Don't Believe the Truth*, then, great! Do you know what I mean? But I, it's not something that I would ever, I wouldn't [enter into](#) a [debate](#) about it. How can I, you know? I don't, I don't, I'm not a professional songwriter. Do you know what I mean? I kinda, it's what, I've been writing songs [for as long as I can remember](#), you know, for fun. It's just so, now, lots of people buy them. But [*if nobody bought the records tomorrow](#), I still wouldn't stop writing songs. But I'd write songs just to play to my [mates](#) on the, on the, on [acoustic guitar](#), you know? It's kind of what I do.

translation ►

Interviewer: [Lyrically](#), your latest album, *[Dig Out Your Soul](#)*, has moved **in a kind of* [psychedelic](#) direction. Are you going back to the [trips](#) of your youth here?

Gallagher: Well, I don't, it's, there's like, you know ... I mean, what, what do you write about when you're 41? I don't know. You know, being famous? Nobody wants to hear about that. Being in a band? That was kind of what *[Definitely Maybe](#)* was about. Women? Too boring. You know? Money? Nobody wants to hear about that. Politics? Boring. You know. Save the planet? Boring. Um, you know, I don't know. So, the most interesting thing was, like, well, I remember when I was 16 and you know taking [acid](#) it was like, yeah, there's stories to be told there, I think.

Interviewer: Do you still remember the acid trips that [vividly](#)?

Gallagher: No, they're not vivid, but, I, you know, you kind of, when you're [reminiscing](#) with friends, you know, when you're talking about stuff like that, you know, they kinda, it all [comes flooding back](#), you know. I can remember being [swallowed up](#), you know, by the ground and all that kind of thing; meeting God, you know? All right. Nice gentleman.

tanslation ▶

A Little Less Mental

DL Track21

語注

Interviewer: I understand that you recorded this at the [Abbey Road Studio](#), but I thought that you'd been [banned from](#) there. What happened?

Gallagher: We had to pay the money [up front](#), and so they said, "If, [if you have to leave](#) then you're gonna lose the [deposit](#)." Uh, and, well, it's different now, you know. [When we were in there in '97](#), it was, uh, everybody was in their 20s and [fucking whacked out](#) on drugs all the time. So, um, it's different now. Everybody's got kids, you know. Everybody's a little bit more, a little bit less [mental](#), you know? But we still [had a good time](#) though -- made a great record. That's, that's, to me [that's the main thing about](#) it, you know?

And it's good for Abbey Road that somebody's finally made a great record! You know, 'cause when was the last good record that [came out of](#) Abbey Road? You'd [struggle](#) really to think about it, wouldn't you?

tanslation ▶

Interviewer: [The rumor is that](#) during the recording of, uh, *Dig Out Your Soul*, the album got delayed because you wanted to [follow Euro 2008](#)? Is that really true?

Gallagher: Kind of. It's a bit of a joke, but, yeah. We were kind of, we're not, we never really do anything [round](#), around the European championships because we, we [figure](#) that, uh, everyone's gonna be watching the [football](#) anyway. And why, you know, so why not? But [I think it could have been out by now](#), yeah.

Interviewer: And who would have guessed the [outcome](#)!

Gallagher: Who would have guessed that Spain won! I know! [Fucking hell](#) ...

Interviewer: And they were [brilliant](#).

Gallagher: I thought, I think the whole thing was, uh, was amazing, and I think [it was better for England not being there](#). I think it was, but I, I watched [every single](#) game. I thought it was [incredible](#).

Interviewer: The Dutch were great too, weren't they?

Gallagher: There was only ... Greece were [shit](#); France were not very good. [Apart from](#) that, I thought every team in it was really fucking good, you know. It was really enjoyable to watch. But I've been to the, I, you know, I've been to the last couple of, I mean, [I went to](#) the Ger--, the World Cup in Germany. I went to the [final](#). I spent, like, a, a few days in Germany. I went to the semi-finals and the quarter-finals. I mean it's amazing. You know, it's amazing when England are not there 'cause the, the [atmosphere](#), well, the atmosphere is very, very ki--, when you're, w--when you're with England it's [completely](#) different, because [the police are expecting trouble](#). The England fans are, you know, always drinking and expecting trouble. So there's a, there's a really [tense](#) atmosphere round England games.

But when you go to these other games, like [*France versus Germany](#) in the quarter-final--or was it the semi-final? I think it was the semi-final--that was one of the best, [man](#), the, one of the best nights I've ever had at a football match. It was amazing, you know, and, if that was in England, and if England get [beat](#) in the semi-final, they would fucking [destroy](#) the whole country, you know? [Whereas](#), like, the Germans and the French, they, I mean, the Germans and the Italians, they all kind of went home and [that was it](#). It was great.

Neither Funny nor Sad

DL Track23

語注

Interviewer: Do you think Oasis has [calmed down](#) a little bit, now that you've got kids and you're getting older?

Gallagher: Well, uh, well, yeah. You, I mean, you have to think of, uh, you know, you can't [stay in](#) every night taking drugs like you used to, 'cause that's--, I mean, you can't do that in front of fucking children. You know what I mean? You'd be an [absolute idiot](#) to do that. And, um, I don't want my kids growing up like me, you know, so, um, yeah, we, we have, we have, we [have great nights out with less frequency](#). But we still have 'em. Do you know what I mean?

Interviewer: [Looking back on](#) the '90s, do you laugh about all that -- all the [brawls](#), the [scuffles](#), the [partying](#)?

Gallagher: It was [neither funny nor sad](#). [That's just the way that it was](#), do you know what I mean? I don't kind of look back on it with any [analysis](#) at all.

I'm not the kind of person that ever [sits around](#) and, you know, [gazes off into the distance](#), and [go](#), "Wow, remember those days?" You know. Sometimes when we've been drinking and I'm with kinda friends, we say, "Oh, I remember that time we were in ..." you know. But really the time to analyze Oasis is when it's finished. It's not finished yet.

tanslation ▶

Interviewer: So, will Noel Gallagher [run for](#) prime minister?

Gallagher: Eventually. Eventually. It'll have to come. By [public](#), the public will demand it.

Interviewer: Well, after [Gordon Brown](#) is [done](#)?

Gallagher: Or after [David Cameron](#)'s done, yeah. I'd [clean this country up](#). It'd take five years, easy.

Interviewer: And what will you do?

Gallagher: [Public transport](#). I'd [sort that out](#), immediately. And, uh, I would stop, I would stop this focus on London, you know. Everybody's [obsessed with](#) London. London's a fucking [dump](#), you know. There are other great cities in this country--think [Glasgow](#), [Manchester](#), [Liverpool](#), [Sheffield](#), [Leeds](#), you know. But, um, I would put more police officers on the street; I would make [jail sentences](#) tougher; I would possibly [bring back capital punishment](#).

Interviewer: You would?

Gallagher: Yeah. I think so. Yeah. Yeah, for [premeditated murder](#), yeah. No fucking questions asked -- you go onto the [chair](#). [End of](#). If you've been [convicted](#) twice on the same, by the same [trial](#), by a [jury](#) of your [peers](#), and it's [beyond reasonable doubt](#), there's no need for you in society any more.

translation [▶](#)

*Marcel Anders / The Interview People
Narrated by Michael Rhys*

軌道に戻るって、誰の軌道に？

DL **Track19**

インタビュー：アルバム『ドント・ビリーヴ・ザ・トゥルース』が、バンド（オアシス）にとって1つの転換点だと感じた人が多いと思います。これはあなたの7枚目のスタジオ・アルバムで、何か新しいことが起こりつつあったように見受けられましたが。

ノエル・ギャラガー：いや、俺としては、俺は『スタンディング・オン・ザ・ショルダー・オブ・ジャイアンツ』が転換点だったと思うよ、なにせ、ギグジーとボンヘッドが辞めちまったから。『ドント・ビリーヴ・ザ・トゥルース』は、あの数年で俺たちが作った最高のアルバムだったと思う。確かに最高の曲が収録されていたよ。まあね、うん、ある意味、ある意味ではそうだったな。

内部的には、バンド内では、たぶん、『スタンディング・オン・ザ・ショルダー・オブ・ジャイアンツ』が事実上、オアシスの終わりだったし、また、別の何かの始まりになった。バンド名を変えてもいいくらいだったんだ、わかるだろ？ もともとのオアシスのメンバーがろくに残っていないんだよ——リアムだけだな、厳密に言う。俺はもともとのオアシスにはいなかったんだ。でもまあ、こうやって続けてるけどね。でも、世間一般の認識としては『ドント・ビリーヴ・ザ・トゥルース』が転換点だったってことになるんだろうけど、だからといってそれは、バンドのメンバーの誰にも関係のないことなんだ。俺たちは、ただ黙々とやっていくだけで・・・

インタビュー：でも、あのアルバムで軌道に戻ったように思われましたが。

ギャラガー：だけど、それってのはどういうことだい？ 誰か別の人の軌道じゃないか。俺は軌道を外れたつもりなんか1度もない。俺自身は——バンドの他のメンバーがどう思っているかは知らないが——でも、俺は腰を据えて曲を書くときに「うーん、この曲は今まで俺が書いたのと同じくらい良いかな・・・？」なんてことは考えない。俺はただ、曲を書いて、レコーディングする。判断するのは他の人たちだ。

だから、もし他の人たちが『ドント・ビリーヴ・ザ・トゥルース』以降、オアシスが軌道に戻ったと判断したのなら、もちろんそれで結構だよ！ 俺の言いたいことはわかるかい？ だけど俺は、俺としてはそのことで討論する気はまったくないんだ。できるもんか、だろ？ 俺はプロのソングライターじゃないんだ。わかるかい？

俺はまあ、何だ、俺は、物心付いてからずっと、自分で楽しむために曲を書いてきたんだ。それがただ、今ではたくさんの人がそれを買ってくれてるだけのことで。だけど、もし明日になって誰も作品を買わなくなっても、それでも俺は曲を書くことをやめないだろう。友達に、アコースティック・ギターで歌って聞かせるための曲を書くだろうね。俺がやっているのはそういうことさ。

【原文】[▶](#)

神様とおしゃべり

 [DL](#)  [Track20](#)

インタビュー：歌詞を見ると、最新アルバム『ディグ・アウト・ユア・ソウル』は、何となくサイケデリックな方向に進んでいますね。この辺で若いころ経験したトリップに回帰しようということでしょうか？

ギャラガー：うーん、そうじゃないよ、その・・・つまり、**41**歳になって何をテーマに（曲を）書けばいい？ 思い付かないんだよ。つまり、有名になった心境？ そんなもの誰も聞いたがらない。バンドで活動すること？ その辺りは『オアシス』でテーマにした。女？ 退屈過ぎるしね。そうだろう？ 金？ 誰も聞いたがらないさ。政治？ 退屈。そうだろう。地球を救おう？ 退屈。ほら、思い付かないんだ。で、一番面白そうだったのが、その、**16**歳のときに**LSD**をやっていたのを覚えているけど、あれは、そう、あそこには語るべきものがあると思っ

インタビュー：今でも、その**LSD**でのトリップを、そんなにありありと覚えているものですか？

ギャラガー：いや、ありありとではないよ。だけど、ほら、友達と思い出話なんかしててそんな話になると、それがさ、どつとよみがえってくるんだ、わかるかい？ 思い出すんだよ、飲み込まれていく感じとかね、わかるかな、地面にだよ、そんないろんなことがね。神様に会ったりね。わかる？ そうさ。いいやつだったよ。

【原文】[▶](#)

少しはまともに

 [DL](#)  [Track21](#)

インタビュアー：このアルバムはアビーロード・スタジオで収録されたと同じですが、確かあそこは出入り禁止になっていたと思っていました。どうなったのですか？

ギャラガー：前金を払わなければならなかったんだ、で、「もし去らなければならなくなったとしても、預かり保証金は戻りません」って言われたよ。で、まあ、今は（以前とは）違うからね。'97年にあそこに行ったときは、皆20代で、いつもドラッグでとんでもなくイカレてた。だから今は違うんだよ。皆、子どもがいるしね。皆、少しはさ、少しはまともになったんだよ、わかる？　でも、まだ楽しめたよ——いい作品ができた。それが、それが、こういった状況にとっては大切なことなんだよ、な？

それに、アビーロードにとっても、誰かがやっといういい作品を出したのはいいことだよ！　だってさ、アビーロードから最後にいい作品が出たのはいつのことだい？　思い出すのもずいぶん苦労しそうじゃないか、そうだろう？

【原文】[▶](#)

ドイツでサッカー観戦

インタビュアー：うわさによると、『ディグ・アウト・ユア・ソウル』のレコーディングの際、あなたがユーロ2008を見たがったせいでアルバム制作が遅れた、とのことですが？　これは本当の話ですか？

ギャラガー：まあね。ちょっとした笑い話ではあるけど、そうなんだ。俺たちはあの年、というかあの年に限らず、欧州選手権の辺りは仕事らしい仕事はしないんだ、どうせ、皆サッカーを見るんだろうって思ってね。だから、いいじゃないかってね。でも、本当だったら、もう出てたかもしれないね。

インタビュアー：それに、あの結果は誰が想像していたでしょう！

ギャラガー：スペインが勝つとは誰が想像したもんか！　まったく！　こんちくしょう・・・

インタビュアー：しかも、彼ら（スペインのチーム）は素晴らしかったですね。

ギャラガー：思ったのは、大会全体が素晴らしかったと思うね。イングランドが出てなかったのが良かったんだね、そう思うよ。でも試合は1つ残らず見たよ。信じられないほど素晴らしかった。

インタビュアー：オランダチームも良かったですよ。

ギャラガー：唯一・・・ギリシャが下手くそだったな。フランスもあまり良くなかった。それ以外は、どのチームも本当にめっちゃめっちゃ良かったと思うよ。あれは見ていて本当に楽しかった。いや、行ったことがあってね、その、最後の何試合か、ワールドカップのドイツ大会に行ったんだ。決勝戦にね。ドイツに何日か滞在して、準決勝や準々決勝にも行ったんだ。俺が言いたいのはつまり、すごくいいんだ。ほら、イングランドがいないとすごくいいんだよ。というのも、雰囲気、その、雰囲気がすごく、イングランドがいると、全然違う。何しろトラブルが当然あるものと警察が待ち構えているからね。イングランドのファンは、ほら、飲みっぱなしで、トラブルが起こるのを今か今かと待っている。だから、イングランドの試合はかなりびりびりした雰囲気に包まれるんだ。

ところが、こういった他の試合に行くと、例えば、準々決勝のフランス対ドイツ―それとも準決勝だったっけ？　たぶん準決勝だったな―あれは最高の、まったく、サッカーの試合で経験した最高の夜の1つだったよ。あれは素晴らしかった。あれがもしイングランドで開催されていて、イングランドが準決勝で敗れたとしたら、国中がめっちゃめっちゃに破壊されていたことだろうな、そうだろう？　ところが、ドイツ人とフランス人は、彼らは、その、ドイツ人とイタリア人にしても、皆が家に帰ってそれで終わりだったんだ。あれは立派だったよ。

【原文】[▶](#)

おかしくも悲しくもない

 [DL](#)  [Track23](#)


インタビュアー：子どもも持って年齢も重ねた今、オアシスは多少落ち着いたと思いますか？

ギラガー：まあ、それは、そうだな。だって考えなくちゃいけないからな、ほら、昔みたいに毎晩家にこもってドラッグ漬けというわけにはいかない、何しろ——つまり、子どもたちの前でそんなことできないからな。わかるだろ？ そんなことしたら完全な大バカ者だ。それに、俺は、子どもたちには俺みたいに育ってほしくないんだよ、だから、そう、外で派手に夜遊びする回数を減らしてる。今も相変わらず遊んではいるんだけどね。わかるだろ？

インタビュアー：'90年代を振り返ってみると、あのころの——けんか騒ぎや乱闘やどんちゃん騒ぎのことを、ばかばかしくて笑ってしまいますか？

ギラガー：あれはおかしくも悲しくもなかった。あのころはああだったというだけのことでね、わかるかい？ あれを振り返って分析したりはしないんだ。

俺は、ぼんやり座って遠くを見つめながら「いやあ、懐かしいなあ、あのころが」なんて言うタイプの人間じゃないんだ。そりゃ、たまに、皆で飲んでいて、友達と一緒にだったりしたら、「ああ、覚えているよ、あのときは・・・」なんて話をすることもあるけどね。だけど実際、オアシスを分析するときっていうのはバンドが終わったときだ。まだ終わってはいないんだよ。

[【原文】](#) 

首相候補ノエル

 DL  Track24

インタビュアー：さて、ノエル・ギャラガーは将来、首相に立候補するのでしょうか？

ギャラガー：いずれね。いずれ。その時期が来るはずだ。国民が、国民がそれを求めるだろうから。

インタビュアー：その、ゴードン・ブラウンが去った後に？

ギャラガー：あるいは、デビッド・キャメロンが去った後にね、うん。俺がこの国を掃除してやるよ。5年はかかるだろうが簡単なことだ。

インタビュアー：何をするつもりですか？

ギャラガー：公共交通機関だな。即座にそれを整理するよ。それから、このロンドンへの一極集中をやめさせるね。皆、ロンドンにとらわれ過ぎだ。ロンドンなんて、とんでもないゴミだめだつてのに。他にもいい都市があるだろ、この国には――グラスゴーや、マンチェスター、リバプール、シェフィールド、リーズなんかを考えてみるといい。でも、町中に配置する警察官は増やすよ。懲役刑も厳しくする。もしかしたら死刑を復活させるかもしれないな。

インタビュアー：そうなんですか？

ギャラガー：うん。そのつもりだ。そう。そうだ、計画的殺人についてはね、うん。問答無用で――電気椅子行きだ。以上。同じ裁判で同輩（一般市民）からなる陪審員団から2度有罪を申し渡されて、そこに合理的な疑いの余地がなかったら、もう社会から必要とされていないってことさ。

【原文】[▶](#)

（訳：挙市玲子）

Vocabulary List

A

- A versus B** A 対 B
- absolute** 完全な、まったくの
- affect** (～に) 影響を与える
- analysis** 分析
- apart from** ～ は別にして、～を除けば
- as a matter of fact** 実のところ
- atmosphere** (場の) 空気、雰囲気

B

- brawl** 乱闘、けんか騒ぎ
- brilliant** 優秀な、卓越した
- bring back** ～ (制度など) を復活させる

C

- calm down** 落ち着く、冷静になる
- capital punishment** 極刑、死刑
- clean ～ up** ～を一掃する、～を浄化する
- come out of** ～ から出てくる、～から生まれる
- completely** すっかり、まったく
- convict** (～に) 有罪宣告する

D

- debate** 討論、論争
- destroy** 破壊する、打ち壊す
- done** 終わって、用済みになって

E

- enter into** ～ を始める
- every single** ～ どの～も、1 つ残らず

F

- figure** 予想する、思う
- follow** (～の) 最新の動きを追う、(～を) 見守る

J

- jail sentence** (懲役・禁錮など) 刑務所に収監される刑罰
- jury** 陪審、陪審員団

O

- (be) obsessed with** ～に取り付かれて、～で頭がいっぱいになって
- off track** 脱線して、正しい軌道から離れて
- outcome** 結果

P

- peer** 同じ立場の人、仲間、同輩
- plow on** こつこつと続ける、苦勞して進む
- public** 大衆、国民

R

- reminisce** 回想する、思い出を語る
- run for** ～に立候補する、～に出馬する

S

- scuffle** つかみ合い、乱闘
- sit around** ぼんやり座る、何もせずぶらぶらして過ごす
- sort ～ out** ～を整理する、～(問題など)を解決する
- stay in** 外出しないで家にいる
- struggle** 奮闘する、苦勞する
- swallow ～ up** ～を飲み込む、～を包み込む

T

- tense** 緊張した、張り詰めた
- that is it** それで終わりだ、それだけだ
- that's the way (that) it is** それはそういうものだ、それはそれとして仕方がない

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	ギャラガーは、アルバム『ドント・ビリーヴ・ザ・トゥルース』が、オアシスの唯一の転換点だったと考えている。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	『スタンディング・オン・ザ・ショルダー・オブ・ジャイアンツ』は、オアシスの結成メンバーで作った最後のアルバムである。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	アルバム『ディグ・アウト・ユア・ソウル』は、LSDでのトリップ体験をテーマにしている。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	出入り禁止となっていたアビーロード・スタジオを再び使用するために、オアシスは前金を払った。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	オアシスは、サッカー欧州選手権が開催されている時期は、あまり精力的に活動しない。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	ギャラガーは、サッカーの国際大会では、常にイングランドチームの活躍を願っている。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	ギャラガーは、子どもが生まれて以来、夜遊びは一切しなくなった。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	ギャラガーは、1990年代をオアシスの全盛期と考えている。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	ギャラガーは、イギリスの文化や経済がロンドンに一極集中していることを苦々しく思っている。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	ギャラガーは、死刑制度廃止論者である。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	ギャラガーは、アルバム『ドント・ビリーヴ・ザ・トゥルース』が、オアシスの唯一の転換点だったと考えている。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	『スタンディング・オン・ザ・ショルダー・オブ・ジャイアンツ』は、オアシスの結成メンバーで作った最後のアルバムである。	C	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
3	アルバム『ディグ・アウト・ユア・ソウル』は、LSDでのトリップ体験をテーマにしている。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	出入り禁止となっていたアビーロード・スタジオを再び使用するために、オアシスは前金を払った。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	オアシスは、サッカー欧州選手権が開催されている時期は、あまり精力的に活動しない。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	ギャラガーは、サッカーの国際大会では、常にイングランドチームの活躍を願っている。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
7	ギャラガーは、子どもが生まれて以来、夜遊びは一切しなくなった。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
8	ギャラガーは、1990年代をオアシスの全盛期と考えている。	C	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
9	ギャラガーは、イギリスの文化や経済がロンドンに一極集中していることを苦々しく思っている。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	ギャラガーは、死刑制度廃止論者である。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

語注

Don't Believe the Truth

『ドント・ビリーヴ・ザ・トゥルース』 ★2005年5月に発売されたアルバム。

[▶本文に戻る](#)

studio album

スタジオ・アルバム ★スタジオで録音した曲によるアルバム。ライブ・アルバムなどと区別するための用語。

[▶本文に戻る](#)

Standing on the Shoulders of Giants

『スタンディング・オン・ザ・ショルダー・オブ・ジャイアンツ』 ★2000年2月に発売された4枚目のスタジオ・アルバム。本来、Shouldersのsは不要。

[▶本文に戻る](#)

Guigsy and Bonehead

ギグジーとボーンヘッド ★オアシスの初期メンバー。ポール・マッギーガン（1971-）とポール・アーサーズ（1965-）のニックネーム。

[▶本文に戻る](#)

within one's rights to do

（人）に～する権利があつて、（人）が～して当然で

[▶本文に戻る](#)

Liam (Gallagher)

リアム（・ギャラガー） ★（1972-）。ノエルの弟で、オアシス結成時からボーカルを担当。

[▶本文に戻る](#)

as a matter of fact

実のところ

[▶本文に戻る](#)

public perception

世間一般の認識

[▶本文に戻る](#)

affect

（～に）影響を与える

[▶本文に戻る](#)

kinda

★= kind of

[▶本文に戻る](#)

plow on

こつこつと続ける、苦勞して進む

[▶本文に戻る](#)

back on someone else's track

★ここでは文脈上trackに名詞の所有格が付いているが、通常はback on track（元の路線に戻って、軌道を回復して）の形で用いられる。

[▶本文に戻る](#)

off track

脱線して、正しい軌道から離れて

[▶本文に戻る](#)

personally

個人的に

[▶本文に戻る](#)

enter into ~

～を始める

[▶本文に戻る](#)

debate

討論、論争

[▶本文に戻る](#)

for as long as one can remember

覚えている限り昔から、物心付いてからずっと

[▶本文に戻る](#)

if nobody bought the records tomorrow

★現実にはあり得ないような仮定をしているので、仮定法過去が使われている。

[▶本文に戻る](#)

record

(CDなどに記録された) 音楽作品

[▶本文に戻る](#)

mate

仲間、友達 ★イギリス英語。

[▶本文に戻る](#)

acoustic guitar

アコースティック・ギター

[▶本文に戻る](#)

lyrically

歌詞の面では ★「歌詞」のことをlyricsと言う。

[▶本文に戻る](#)

Dig Out Your Soul

『ディグ・アウト・ユア・ソウル』 ★2008年10月に発売されたアルバム。

[▶本文に戻る](#)

in a ~ direction

～の方向に

[▶本文に戻る](#)

psychedelic

サイケデリックな、幻覚的な、幻覚剤の

[▶本文に戻る](#)

trip

(ドラッグによる)トリップ、幻覚体験

[▶本文に戻る](#)

Definitely Maybe

『オアシス』 ★1994年8月に発売されたファーストアルバム。全英1位の大ヒットとなった。

[▶本文に戻る](#)

acid

(俗語で) LSD ★幻覚を引き起こす薬物。

[▶本文に戻る](#)

vividly

生き生きと、鮮明に

[▶本文に戻る](#)

reminisce

回想する、思い出を語る

[▶本文に戻る](#)

come flooding back

にわかによみがえる、あふれ出すように思い出される ★floodは「(洪水のように)どっとあふれる」の意。

[▶本文に戻る](#)

swallow ~ up

～を飲み込む、～を包み込む

[▶本文に戻る](#)

Abbey Road Studio

アビーロード・スタジオ ★ロンドンにある老舗レコーディング・スタジオ。正式にはAbbey Road Studios。

[▶本文に戻る](#)

ban A from B

AをBから締め出す、AをBから追放する

[▶本文に戻る](#)

up front

前払いで、前金で

[▶本文に戻る](#)

if you have to leave ...

★if you behave badly and have to leave ...という含み。

[▶本文に戻る](#)

deposit

預かり保証金

[▶本文に戻る](#)

When we were in there in '97

★3枚目のアルバム『ビィ・ヒア・ナウ』の収録当時を指す。

[▶本文に戻る](#)

fucking

ひどく、とんでもなく ★強調表現。卑語。

[▶本文に戻る](#)

whacked out

(酒・ドラッグで) めいいい 酩酊した、正気を失った

[▶本文に戻る](#)

mental

気が変になった、いかれた ★俗語。

[▶本文に戻る](#)

have a good time

楽しむ

[▶本文に戻る](#)

that's the thing about ~

それが~の問題だ、それが~にとって重要なことだ

[▶本文に戻る](#)

come out of ~

~から出てくる、~から生まれる

[▶本文に戻る](#)

struggle

奮闘する、苦勞する

[▶本文に戻る](#)

the rumor is that ...

うわさでは.....らしい

[▶ 本文に戻る](#)

follow

(～の) 最新の動きを追う、(～を) 見守る

[▶ 本文に戻る](#)

Euro 2008

UEFA欧州選手権2008、ユーロ2008 ★= UEFA European Football Championship。ワールドカップの中間年にヨーロッパで開催されるサッカーの大会。ここでは、2008年にスイスとオーストリアで共催された大会が話題になっている。

[▶ 本文に戻る](#)

round

★ = around

[▶ 本文に戻る](#)

figure

予想する、思う

[▶ 本文に戻る](#)

football

サッカー ★イギリス英語。アメリカ英語ではsoccer。

[▶ 本文に戻る](#)

I think it could have been out by now ...

★このインタビューは2008年7月22日に収録されたもの。同アルバムは、それからさらに2カ月余りたった10月6日に発売された。outは「世に出て、発売されて」の意。

[▶ 本文に戻る](#)

outcome

結果

[▶ 本文に戻る](#)

Fucking hell.

こんちくしょう。 ★強い感情を表す。

[▶ 本文に戻る](#)

brilliant

優秀な、卓越した

[▶ 本文に戻る](#)

it was better for England not being there

★この年、イングランドはユーロ2008の本大会出場を逃した。

[▶ 本文に戻る](#)

every single ~

どの～も、1つ残らず

[▶ 本文に戻る](#)

incredible

信じられないほど素晴らしい

[▶ 本文に戻る](#)

shit

クソ、最低のもの

[▶ 本文に戻る](#)

apart from ~

～は別にして、～を除けば

[▶ 本文に戻る](#)

I went to ...

★話がユーロ2008からFIFAワールドカップ・ドイツ大会（2006年開催）に切り替わっていることに注意。

[▶ 本文に戻る](#)

final

決勝戦 ★semi-final は「準決勝」、quarter-final は「準々決勝」。
[▶ 本文に戻る](#)

atmosphere

(場の) 空気、雰囲気
[▶ 本文に戻る](#)

completely

すっかり、まったく
[▶ 本文に戻る](#)

the police are expecting trouble

★イングランドのサッカーの試合にはhooliganと呼ばれる熱狂的なサポーターがつきもので、しばしば警察沙汰を起こすことで有名。
[▶ 本文に戻る](#)

tense

緊張した、張り詰めた
[▶ 本文に戻る](#)

France versus Germany ...

★ギャラガーの記憶違いと思われる。このワールドカップでは、フランスは準優勝、ドイツは3位に終わったが(優勝はイタリア)、大会を通じてフランス・ドイツ戦は行われていない。
[▶ 本文に戻る](#)

A versus B

A 対 B
[▶ 本文に戻る](#)

man

★感嘆を表す間投詞。
[▶ 本文に戻る](#)

beat

★正しくはbeaten。
[▶ 本文に戻る](#)

destroy

破壊する、打ち壊す
[▶ 本文に戻る](#)

whereas ...

.....である一方で
[▶ 本文に戻る](#)

that is it

それで終わりだ、それだけだ
[▶ 本文に戻る](#)

calm down

落ち着く、冷静になる

[▶本文に戻る](#)

stay in

(外出しないで) 家にいる

[▶本文に戻る](#)

absolute

完全な、まったくの

[▶本文に戻る](#)

idiot

愚か者、ばか者

[▶本文に戻る](#)

have a night out

外で夜遊びする

[▶本文に戻る](#)

with less frequency

頻度を減らして ★frequencyは「頻度」の意。

[▶本文に戻る](#)

look back on ~

～を振り返る

[▶本文に戻る](#)

brawl

乱闘、けんか騒ぎ

[▶本文に戻る](#)

scuffle

つかみ合い、乱闘

[▶本文に戻る](#)

party

どんちゃん騒ぎをする、(酒やドラッグで) 盛り上がる

[▶本文に戻る](#)

neither A nor B

A でも B でもない

[▶本文に戻る](#)

that's the way (that) it is

それはそういうものだ、それはそれとして仕方がない

[▶本文に戻る](#)

analysis

分析 ★analyzeは動詞形で、「分析する」の意。

[▶本文に戻る](#)

sit around

ぼんやり座る、何もせずぶらぶらして過ごす

[▶本文に戻る](#)

gaze off into the distance

遠くを見やる

[▶本文に戻る](#)

go

言う

[▶本文に戻る](#)

run for ~

～に立候補する、～に出馬する

[▶本文に戻る](#)

public

大衆、国民

[▶本文に戻る](#)

Gordon Brown

ゴードン・ブラウン ★（1951-）。第74代イギリス首相で、第19代労働党党首（2007-10）。

[▶本文に戻る](#)

done

終わって、用済みになって

[▶本文に戻る](#)

David Cameron

デビッド・キャメロン ★（1966-）。第75代イギリス首相（2010-）、第26代保守党党首（'05-）。ブラウン労働党政権の不人気を受けて、'10年に首相就任。

[▶本文に戻る](#)

clean ~ up

～を一掃する、～を浄化する

[▶本文に戻る](#)

public transport

公共交通機関

[▶本文に戻る](#)

sort ~ out

～を整理する、～（問題など）を解決する

[▶本文に戻る](#)

be obsessed with ~

～に取り付かれて、～で頭がいつぱいになって

[▶本文に戻る](#)

dump

ゴミだめ、ひどい場所

[▶本文に戻る](#)

Glasgow

グラスゴー ★スコットランド最大の都市。

[▶本文に戻る](#)

Manchester, Liverpool, Sheffield, Leeds

マンチェスター、リバプール、シェフィールド、リーズ ★いずれもイングランド北部の大都市。

[▶本文に戻る](#)

jail sentence

（懲役・禁錮など）刑務所に収監される刑罰 ★jailは「刑務所（に入ること）」、sentence は「判決、刑罰」。

[▶本文に戻る](#)

bring back ~

～（制度など）を復活させる

[▶本文に戻る](#)

capital punishment

極刑、死刑

[▶本文に戻る](#)

premeditated murder

計画的殺人、謀殺 ★premeditate は「前もって考慮する、あらかじめ計画する」の意。

[▶本文に戻る](#)

chair

（俗語で）電気椅子

[▶本文に戻る](#)

end of

（この件は）以上、終わり ★相手に文句を言わずに話を切り上げるときの決まり文句。end of storyを略して、しばしば単にend ofと言う。

[▶本文に戻る](#)

convict

（～に）有罪宣告する

[▶本文に戻る](#)

trial

裁判

[▶本文に戻る](#)

jury

陪審、陪審員団

[▶本文に戻る](#)

peer

同じ立場の人、仲間、同輩

[▶本文に戻る](#)

beyond reasonable doubt

合理的な疑いの余地なく、理屈で考えて疑わしい部分を残さず

[▶本文に戻る](#)

Sting

私がイエスと言ったことで皆、驚きましたが、私にとっても驚きでした。
(長年拒んできたボリスの再結成に自らが踏み切ったことについて)

発音分析

出身地ニューカッスル辺りは、ジョーディ (Geordie) という濃厚な方言が使われている。だが、英語教師という経歴のためか、彼の英語はほぼ標準的だ。話しぶりも落ち着いていて、聞きやすい。とはいえcreatorの-torが「ダ」となる、ghostの母音が[əu]ではなく「オー」である、20をtwennyと発音しているなどは訛りの一端と言えよう。

Interview Data	
収録日	2009年7月24日
収録地	ロンドン
スピード	やや遅い
語彙・表現	やや難しい

スティング
Sting
1951年、イギリス・ニューカッスル生まれ。'77年にボリスを結成し、'78年にアルバム『アウトランドス・ダムール』を発表。'84年にボリスの活動を停止してからはソロに転向し、シューベルトなどの楽曲をカバーした『ウィンターズ・ナイト』（2009）を発表するなど、ジャンルの壁を越えた音楽活動を展開している。2007年にはデビュー30周年を記念してボリスを再結成し、ワールドツアーを行った。熱心な環境保護活動家、人権保護運動家としても知られている。
1980年代を代表するグループ「ボリス」の中心メンバーとして名声をほしいままにし、昨今はソロ活動を精力的に行っているスティング。ここでは彼が、イギリスの伝統歌をテーマにした自らのアルバム、世界の経済危機、2007年に期限付きで再結成されたボリスについて語った。

Renaissance Man

DL Track26

語注

Interviewer: First you made [an album of 400-year-old songs composed](#) by [John Dowland](#) and now you are presenting [*a collection of classic winter songs](#). Are you the modern [Renaissance man](#)?

Sting: I'm 600 years too late, aren't I really? Uh, no, I would not call myself a Re--Renaissance man. I'm a curious man. I'm curious about, uh, the future of music, and a--also I, I'm curious about the history of music. And I, [I'll sometimes like](#) to, uh, [immerse myself in](#) the creative process of another person or another era, uh, because I, I, I feel I can learn something. I feel, uh, that's where I seek inspiration now.

And, um, I hope that, you know, by interpreting these old songs that somehow, that [feeds](#) my own creative process, and so I will take this information, and it will become something different in the future. I have no guarantee that will happen, but that is my interest, and has been for a number of years, to, uh, become an interpreter as well as a, a creator -- to try and do both.

Interviewer: And if we look at these songs, I mean, their [warmth](#) and depth is beautiful. If you listen to them on headphones, it [gives you the chills](#).

Sting: I'm, I'm, I'm grateful that you s--, you said that. I loved doing this project, uh, although it began as something slightly different. They, they said to me, "Will you do a Christmas album?" Then I kind of [threw up](#) on the carpet and said, "I don't like Christmas that much. But I'll tell you what I do like: I like winter." Winter is the season that I really look forward to, even though it's cold.

Uh, I like to sit in front of a fire, I like to wrap the blanket around me, I like to, uh, imagine stories. And Christmas for me, or the winter anyway is a s--, is the season of the imagination. It's the season where the long dark nights somehow [inspire](#) stories, ghost stories, or I think religion was born in, in, in the winter, you know, [ancient pagan](#) religions, maybe.

translation ▶

Interviewer: I get the impression that you're not a religious person. However, you seem fascinated by the [imagery](#) used by religions. Why is that?

Sting: I, I'm essentially [agnostic](#). At the same time, I'm aware that, um, religion -- like literature, like art, like music -- is, is, a product of the imagination, the human imagination. So I would, I would not [throw the baby out with the bath water](#). I think, you know, religion is important. Do I accept a lot of things as [articles of faith](#)? No. No, I don't.

But the, the power of the stories is, uh, very important. And so, uh, they're magical stories, you know, and magical birth is a [commonplace](#) in the history of religion. All gods were born magically, they weren't born normally. [Mithras](#), uh, [Shiva](#), uh, [Dionysus](#), all, [Buddha](#), were all born in a strange way. So it's not, it's not unusual. But, um, they're magical stories. Just as, you know, [Brothers Grimm fairy tale](#). Doesn't make them, uh, doesn't make them silly, they're powerful.

Interviewer: So do you consider any of your songs to be agnostic winter songs?

Sting: Agnostic winter songs? Oh, I mean they're all agnostic winter songs. You know, agnostic means "I don't know." It doesn't mean "I don't believe," it means "I [haven't a clue](#)." [It's the Greek](#). I really don't know. I have an [open mind](#), um, I like the human imagination. I think it's probably the most, the greatest gift we have as a [species](#).

Interviewer: Has the global economic crisis had any effect on you?

Sting: I think everybody, everybody has, you know, had to [recalibrate](#) their, their lives in terms of, you know, how much you spend, yeah. It's tough for everybody. I mean, it's not tough for me. No, I'm, I'm very wealthy, but certainly you, you see the, the effects of economic [downturn](#), you know.

I think we have to, uh, create a new model, a new infrastructure. This current one doesn't really work. And I don't know what that is. I'm not an economist but, uh, there's something, something [fundamentally](#) wrong.

Interviewer: Well, it's all [ego based](#), isn't it?

Sting: Ego based?

Interviewer: You know, if you make enough money, what do you need more for? Why can't you just be [modest](#) and enjoy what you've got?

Sting: It's true. How many millions do you need? Uh, but that's a, that's a [pathology](#), you know. I, I try and [get out of](#) that. I don't like to see this ["Fortune 500"](#) list of the richest people in the world, you know, the richest entertainers. And you start to get [competitive](#): "[Hang on](#), he's making more than me." It's like, "Well, how many millions do you need to die with?" Can you take it with you? No, you can't.

But, you know, I think, uh, we use, we spend our money well. I mean, [we put it back into the land](#). We put it back into good stuff. I think that there are, there are ways of using money, that just [having it sit](#) in the bank with interest, it doesn't interest me. Or, or [stocks and shares](#) don't interest me either. I like to put money back into the land, because you can, you can see it grow in a, in a, in a real way. And, uh, we've done that.

The Police Reunion

DL Track29

語注

Interviewer: Since you'd refused to consider a [reunion](#) of [the Police](#) for so long, many were surprised that it did [eventually](#) happen. How did you enjoy it?

Sting: Um, no, I, I've, I refused to do that for over 20, 25 years, I think. Um, it, it's, it was a surprise that I would say yes, and a surprise to myself. But, uh, again it was an interesting experiment to go back and [re-create](#) something that had been so successful then.

I think we did that, I think we [played to](#) 2.7 million people. No one asked for their money back. So we [put on](#) a good show. But, uh, f-- now I feel it's [complete](#). I feel that we've, we have done that. I don't have any desire or plans to repeat the [exercise](#).

Interviewer: [Never ever](#)?

Sting: I'll never say never ever, but I don't think so, I don't think so. I think we, we finished it well. We, we made a good end, end of a [chapter](#).

Interviewer: So [the three of you](#) are different from one another?

Sting: We're totally different. We've always been totally different.

Interviewer: And that hasn't changed over the years?

Sting: No, no, I, I also think the songs still sound, uh, modern. They, they still sound [contemporary](#). They, they don't sound like they're [dated](#) in the 70s or early 80s. So, no, I'm very proud of that, uh, chapter of my life. But it's a chapter. Everything must end--this is my [philosophy](#) for the day.

tanslation ▶

Marcel Anders / The Interview People
Narrated by Brian Peck

ルネサンス・マン

 **DL**  **Track26**

インタビュアー：まず、あなたはジョン・ダウランドが作曲した**400**年前の歌曲のアルバムを作りました。そして今度は、冬の名曲集を出そうとしています。あなたは現代のルネサンス的教養人ですか？

スティング：本当に、私は（生まれるのが）**600**年遅過ぎましたね。いや、私は自分をルネサンス的教養人とは言いません。私は好奇心が強いだけです。音楽の未来に興味があり、そして音楽の歴史にも興味があります。それに、私は時々、他の人や他の時代の創造のプロセスに自分の身を浸したくなるんです。というのも、何か学べそうな気がして。今は、そこがインスピレーションを求める場所だという気がしています。

それとその、こうした古い歌を解釈することによってですね、それが何らかの形で、私自身の創造プロセスの糧になることを期待しているのです。つまり私とその情報を取り込み、それが将来違うものになって出てくるということです。そうなる保証はありませんけれど、でもそれが私の関心なんです。もう何年も前からの関心なんですよ。創造する人間であると同時に解釈する人間でもあること——その両方をしようということがね。

インタビュアー：これらの収録曲を見ると、何というか、温かさと深みが素晴らしいですね。ヘッドホンで聴いたらゾクゾクします。

スティング：そう言ってもらえて、ありがたいですね。このプロジェクトをやるのが本当に好きでした。ただ、最初は少し違う話だったんです。「クリスマス・アルバムを作らないか？」と言われたんです。そのとき、私はカーペットにウエツと吐くような感じで、言いました、「クリスマスはそんなに好きじゃなくてね。その代わり、何が本当に好きか教えよう。私は冬が好きなんだ」と。冬は、私が本当に到来を待ち望む季節なんです、たとえ寒くてもね。

私は、火の前に座るのが好きで、毛布にくるまるのが好きで、物語を想像するのが好きなんです。ですから、私にとってクリスマスは、というか、少なくとも冬はとにかく、想像の季節です。その季節、長くて暗い夜がどういいうわけか物語を思い付かせてくれるのです、幽霊話とか。それに宗教も、冬に生まれたんだと思いますよ、ほら、古代の異教は、もしかするとね。

【原文】[▶](#)

想像が生み出したもの

 [DL](#)  [Track27](#)

インタビュアー：あなたは信仰心のあつい方ではないという印象を受けます。それでいて、宗教に用いられているイメージには魅了されているようです。それはどうしてですか？

スティング：私は根本的に不可知論者です。と同時に、私は宗教が――文学や美術や音楽と同様に――想像の産物、人間の想像の産物であるということを認識しています。ですから、何もかも全てを否定するつもりはありません。私は、宗教は重要だと思っていますよ。いろいろなことを信仰箇条として受け入れるかということ、それはノーです。受け入れません。

しかし、物語の持つ力はとても重要です。ですから――超自然的な物語ですし、超自然的な誕生の仕方が宗教の歴史にはよく見受けられます。あらゆる神々は、超自然的な形で生まれてきました。普通の生まれ方ではありませんでした。ミトラも、シヴァも、ディオニュソスも皆、^{ぶつ} 仏陀 も、皆、奇妙な生まれ方でした。ですから、珍しいことではありません。でもそれは、超自然的な物語です。ちょうどグリム兄弟の童話と同じような。だからといってばかばかしいということではありません、強い力を持っているのです。

インタビュアー：では、あなたの歌の中には、不可知論的なウィンターソングと考えていらっしゃるものがありますか？

スティング：不可知論的ウィンターソング？ ああ、それなら全部が不可知論的ウィンターソングということになります。ほら、agnostic（不可知論の）というのは「わからない」という意味ですから。「信じない」という意味ではなく、「さっぱりわからない」という意味です。ギリシャ語でね。私には本当にわからないんです。私は、何事も決め付けたくはないんです。私は人間の想像力が好きなんです。それは、人間が種として持って生まれた、恐らく最高の、最大の才能だと思いますよ。

[【原文】](#) [▶](#)

利己主義経済

 [DL](#)  [Track28](#)

インタビュアー：世界的な経済危機が、あなたに何か影響したでしょうか？

スティング：思うに、誰もが皆、出費という点から生活を見直さなければならなくなりましたね、ええ。誰にとつても厳しいです。とはいえ、私にとっては厳しくはありません。いえ、私は、とても裕福ですから。でももちろん、不況の影響は見えますよね。

新しいモデル、新しい基盤を創り出す必要があると思います。この、現在のものはあまりうまく機能していないわけですから。でも、それが何なのかはわかりません。私は経済学者ではありませんから。でも、何かが、何かが根本的なところで間違っています。

インタビュアー：そうですね、全てエゴに基づいているからではありませんか？

スティング：エゴに基づいている？

インタビュアー：つまり、もし十分なお金を稼いでいるのなら、何のためにもっとたくさんいるのでしょうか？　なぜ、欲張るのをやめて、持っているもので満足できないのでしょうか？

スティング：確かに。何百万ポンドあればいいのやら。でも、それは病的状態ですよ。私はそんな状態から脱したいと思っています。私は、例の「フォーチュン500」の、世界の富豪とか最もリッチなエンターテイナーたちのリストなんて見たくありません。競争心が芽生えてしまいますから。「ちょっと待ってくれよ、あいつが俺より稼いでいるぞ」ってね。言ってみれば、「さて、死ぬときに何百万ポンド必要なのか？」ということですね。（あの世に）持っていけるでしょうか？　いいえ、持っていけませんよね。

でもね、私は、自分たちが上手にお金を使っていると思っています。私たちはお金を大地に還元しているんです。良いものに還元しています。お金には使い方があると思うんですよ。ただ銀行に寝かせておいて利子を稼ぐなんて、そういうこと（銀行預金）には興味がわきません。あるいは、債券や株式にも興味はわきません。私は、お金を大地に還元したいと思います。現実 to 育っていくのを目にすることができるようからです。ですから、私たちは実際にそうしてきました。

【原文】 [▶](#)

ボリス再結成

  29

インタビュー：あなたはとても長い間、ボリス再結成を検討することを拒んできたので、とうとうそれが実現したとき、多くの人が驚きました。再結成はいかがでしたか？

ステイング：ああ、いや、**20年、25年以上**断ってきたと思います。私がイエスと言ったことで皆、驚きましたが、私自身にとっても驚きでした。でも、昔に戻って、当時大きく成功したものを再現するというのも、また面白い実験でした。

ちゃんとできたと思います、（合わせて）**270万人**の前で演奏しました。誰にも、金を返せとは言われませんでした。ですから、私たちはいいコンサートをしたということです。でも今は、やり切った、という気持ちです。やり終えた、と感じています。あの活動を繰り返したい気持ちも、予定ありません。

インタビュー：何があろうと絶対に？

ステイング：決して、何があろうと絶対に、とは言いませんが、まあないでしょうね。ないと思います。良い形で終わった、と思っていますから。われわれは、1つの章をうまく締めくくりました。

インタビュー：ということは、3人（の個性）はそれぞれ異なっているわけですか？

ステイング：私たちはまったく異なっていますよ。ずっと、まったく異なっていましたね。

インタビュー：そして、それは何年経っても変わっていないのですね？

ステイング：ええ、変わりませんよ。それに、（ボリス時代の）歌も、今なお現代的な響きを保っていると思います。今聞いてもなお現代的です。いかにも'**70年代**や'**80年代**初めのもの、という感じではありません。ですから、ええ、人生のあの時期のことは、とても誇りに思っていますよ。でも、あれは1つの章でしかありません。何事にも終わりがある——それが私の人生哲学です。

【原文】[▶](#)

（訳：拳市玲子）

Vocabulary List

A

□**ancient** 古代の

C

□**chapter** 章、区切り

□**commonplace** ありふれたこと、よくあること

□**competitive** 競争心の強い、対抗意識を燃やした

□**complete** 完結した、完了した

□**compose** （曲を）作る、作曲する

□**contemporary** 同時代の、現代の

D

□**date** （～の）年代を示す

□**downturn** 下降、悪化、（特に）景気後退

E

□**eventually** 最終的に、とうとう

□**exercise** 行為、活動

F

□**fairy tale** おとぎ話、童話

□**feed** （～に）食物を与える、（～に）精神的な糧を与える、（～に）原料・燃料・情報などを送り込む

□**fundamentally** 根本的に、抜本的に

G

□**get out of**～ ～から抜け出す、～を脱する

H

□**hang on** （命令形で）ちょっと待って ★**Hold on!**、**Wait!**も同意。

□**have**～**sit** ～を（使わずに）置いておく

I

□**imagery** （集合的に）イメージ、比喩表現

□**immerse oneself in**～ ～に浸る、～に没頭する

□**inspire** ～に靈感を与える、～を思い付かせる

M

□**modest** 多くを望まない、控えめな

N

□**never ever** もう二度と、何があろうと絶対に ★**ever**で**never**をさらに強調した形。

O

□**open mind** 広い心、偏見のない心

P

□**pagan** 異教の、（特に）多神教の

□**pathology** 病理、病状

□**philosophy** 哲学、考え方、信条

□**play to**～ ～の前で演奏する

□**put on**～ ～を催す、～を上演する

R

□**recalibrate** 再調整する、修正する

□**re-create** 再現する、再創造する

□**reunion** 再結成

S

□**species** （生物の）種 ★単複同形。

T

□**throw up** 吐く

W

□**warmth** 温かさ、ぬくもり

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(* 質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	スティングは、ルネサンス時代の詩人に影響を受けて作詞をしている。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	スティングは、クリスマスソングを集めたアルバムを制作しようと考えていた。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	スティングは、冬という季節を、「再生」の季節であるにとらえている。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	スティングは、無神論者である。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	スティングは、宗教は人間の想像の産物であると考えている。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	スティングは、世界的な経済危機により、金銭的に大きな打撃を受けた。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	スティングは、自らのお金を音楽界に還元したいと思っている。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	スティングは、ボリスの再結成とコンサートに満足している。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	ボリスの3人のメンバーは、性格が似通っている。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	スティングが、今後、ボリスとして活動する予定はない。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	スティングは、ルネサンス時代の詩人に影響を受けて作詞をしている。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	スティングは、クリスマスソングを集めたアルバムを制作しようと考えていた。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
3	スティングは、冬という季節を、「再生」の季節であるにとらえている。	C	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
4	スティングは、無神論者である。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
5	スティングは、宗教は人間の想像の産物であると考えている。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	スティングは、世界的な経済危機により、金銭的に大きな打撃を受けた。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
7	スティングは、自らのお金を音楽界に還元したいと思っている。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
8	スティングは、ボリスの再結成とコンサートに満足している。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	ボリスの3人のメンバーは、性格が似通っている。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
10	スティングが、今後、ボリスとして活動する予定はない。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

語注

an album of 400-year-old songs

★2006年発売のアルバム *Songs from the Labyrinth* (邦題『ラビリンス』) を指す。
[▶本文に戻る](#)

compose

(曲を) 作る、作曲する
[▶本文に戻る](#)

John Dowland

ジョン・ダウランド ★(1563-1626)。イギリスの作曲家、リュート奏者。ヨーロッパ各地で活動し、デンマークとイギリスでは宮廷音楽家を務めた。
[▶本文に戻る](#)

a collection of classic winter songs

★2009年発売のアルバム *If On a Winter's Night* (邦題『ウィンターズ・ナイト』) を指す。
[▶本文に戻る](#)

classic

典型的な、最高級の
[▶本文に戻る](#)

Renaissance man

ルネサンス的教養人 ★博識で、広い分野の才能を持つ人。
[▶本文に戻る](#)

I'll sometimes like ...

★このwillは未来ではなく、「～するものである、～する傾向がある」という現在の習性を表す。
[▶本文に戻る](#)

immerse oneself in ~

～に浸る、～に没頭する
[▶本文に戻る](#)

feed

(～に) 食物を与える、(～に) 精神的な糧を与える、(～に) 原料・燃料・情報などを送り込む
[▶本文に戻る](#)

warmth

温かさ、ぬくもり
[▶本文に戻る](#)

gives ~ the chills

～をゾクゾクさせる ★chillの原義は「冷え、寒け」。
[▶本文に戻る](#)

throw up

吐く ★throw up on the carpet (カーペットに吐く) で、嫌悪・拒否を大げさに表している。
[▶本文に戻る](#)

inspire

～に靈感を与える、～を思い付かせる
[▶本文に戻る](#)

ancient

古代の
[▶本文に戻る](#)

pagan

異教の、(特に) 多神教の
[▶本文に戻る](#)

imagery

(集合的に) イメージ、比喩的表現

[▶本文に戻る](#)

agnostic

不可知論(者)の ★神の存在を立証も否定もできないとする立場のこと。

[▶本文に戻る](#)

throw the baby out with the bath water

★「風呂の水と一緒に赤ん坊を捨てる」ということから、「無用なものと大切なものの区別が付かず一緒に捨ててしまう」という意味のイディオム。

[▶本文に戻る](#)

article of faith

信仰箇条 ★キリスト教会の公認する正統的信仰の要旨を箇条書きにしたもの。

[▶本文に戻る](#)

commonplace

ありふれたこと、よくあること

[▶本文に戻る](#)

Mithras

ミトラ ★紀元前1世紀から5世紀にかけてローマ帝国で広く信仰されていたミトラ教の主神で、太陽神。岩から生まれたとされる。

[▶本文に戻る](#)

Shiva

シヴァ ★ヒンズー教の3大神の1つで、破壊神。創造神ブラフマーの額から生まれたとされる。

[▶本文に戻る](#)

Dionysus

ディオニュソス ★ギリシャ神話に登場する豊穡と酒の神。胎児のうちに最高神ゼウスの太ももに埋め込まれ、臨月までそこで育ったとされる。

[▶本文に戻る](#)

Buddha

仏陀、釈迦 しゃか ★母を出産で苦しめないよう、母が花を摘もうと手を上げたときに、脇の下から生まれ出たという伝説がある。

[▶本文に戻る](#)

Brothers Grimm

グリム兄弟 ★18～19世紀ドイツの、ヤーコブ・ルートヴィヒ・カール・グリムとヴィルヘルム・カール・グリムの兄弟。童話集『グリム童話』を編集した。

[▶本文に戻る](#)

fairy tale

おとぎ話、童話 ★ここは、正しくはfairy tales。

[▶本文に戻る](#)

haven't a clue

★clueは「手掛かり」の意の名詞。haven't (= don't have) はイギリス英語。haven't a clueで「まったくわからない」の意。

[▶本文に戻る](#)

It's the Greek.

★agnostic は、ギリシャ語の agnostos (わからない、知ることができない) に由来する。it's all Greek to ~ (～にとってちんぷんかんぷんである) もついでに覚えておきたい。

[▶本文に戻る](#)

open mind

広い心、偏見のない心

[▶本文に戻る](#)

species

(生物の) 種 ★単複同形。

[▶本文に戻る](#)

recalibrate

再調整する、修正する

[▶本文に戻る](#)

downturn

下降、悪化、（特に）景気後退

[▶本文に戻る](#)

fundamentally

根本的に、抜本的に

[▶本文に戻る](#)

ego based

★egoは「自我、自己」の意。ここではego basedで「エゴに基づいた、エゴ・ベースの」と、egoism（利己主義）のニュアンスで使っている。

[▶本文に戻る](#)

modest

多くを望まない、控えめな

[▶本文に戻る](#)

pathology

病理、病状

[▶本文に戻る](#)

get out of ~

～から抜け出す、～を脱する

[▶本文に戻る](#)

"Fortune 500"

「フォーチュン500」 ★アメリカの経済誌『フォーチュン』は、企業番付や長者番付などを発表している。Fortune 500は通常、企業ランキングのことだが、ここでは「長者番付」の意味で使われている。

[▶本文に戻る](#)

competitive

競争心の強い、対抗意識を燃やした

[▶本文に戻る](#)

hang on

（命令形で）ちょっと待つて ★Hold on!、Wait! も同意。

[▶本文に戻る](#)

we put it back into the land

★スティングは、イギリスとイタリアに農場を保有し、有機作物やワインなどを作っている。この部分は、音楽で得た利益をこれらの農場につぎ込んでいることを指すと思われる。

[▶本文に戻る](#)

have ~ sit

～を（使わずに）置いておく

[▶本文に戻る](#)

stocks and shares

★stockはイギリス英語で「国債、公債」、shareは「株式、株」の意。

[▶本文に戻る](#)

reunion

再結成

[▶本文に戻る](#)

the Police

ポリス ★1977年に結成、'78年にデビューした3人組のロックバンド。「ロクサーヌ」「孤独のメッセージ」「見つめていたい」などのヒット曲がある。スティングはボーカルとベースを担当し、ほとんどの楽曲の作詞作曲を手掛けた。

[▶本文に戻る](#)

eventually

最終的に、とうとう

[▶本文に戻る](#)

re-create

再現する、再創造する

[▶本文に戻る](#)

play to ~

～の前で演奏する

[▶本文に戻る](#)

put on ~

～を催す、～を上演する

[▶本文に戻る](#)

complete

完結した、完了した

[▶本文に戻る](#)

exercise

行為、活動

[▶本文に戻る](#)

never ever

もう二度と、何があろうと絶対に ★everでneverをさらに強調した形。

[▶本文に戻る](#)

chapter

章、区切り

[▶本文に戻る](#)

the three of you

★ポリスのメンバーのスティング、スチュワート・コーブランド、アンディ・サマーズのこと。

[▶本文に戻る](#)

contemporary

同時代の、現代の

[▶本文に戻る](#)

date

(～の) 年代を示す

[▶本文に戻る](#)

philosophy

哲学、考え方、信条 ★philosophy for the day は「今日の格言」ぐらいの意味だが、ここでは、「座右の銘、人生哲学」に近い意味で使われている。

[▶本文に戻る](#)

Carlos Santana

「カルロス、歌を聞いた途端、泣くと同時に、うれしさのあまり飛び上がったわ」。
(故ジョージ・ハリスンが作詞・作曲したビートルズの「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス」をサントナがカバーしたことに対し、ハリスンの妻はこう述べた)

発音分析

メキシコ出身とはいえ、15歳からアメリカに住んでいるため、ほぼアメリカ人同様の英語だ。とはいえ、若干のスペイン語訛りがある。

presented、musicなどの下線部は[s]になっている。実は、スペイン語を母語とする人々は、[z]や[dʒ]などの有声音が得意ではなく、無声音[s]

や[tʃ]を代わりに使ってしまうことがある。また、visualの-sが[ʒ]ではなく、[ʃ]となっている。これも、その延長線上の現象と思われる。

Interview Data	
収録日	2011年8月23日
収録地	ニューヨーク
スピード	やや遅い
語彙・表現	やや難しい

カルロス・サントナ

Carlos Santana

1947年、メキシコ・ハリスコ州生まれ。'62年にアメリカに移住し、ブルースやラテンロックに傾倒。'66年に「サントナ・ブルース・バンド」（'69年に「サントナ」と改称）を結成、セカンドアルバムの『天の守護神』（'70）で全米1位を獲得した。'99年にはアルバム『スーパーナチュラル』でグラミー賞受賞（9部門）。バンド活動の傍ら個人名義でもコンスタントに作品を発表しており、アルバム『サルバドールにブルースを』（'87）のタイトル曲でグラミー賞を獲得している。
グラミー賞を通算10回獲得という驚異的な記録を誇るラテン系ギタリスト、カルロス・サントナ。一流ボーカリストたちとコラボしてロックギターの名曲群をカバーした『ギター・ヘヴン』の制作裏話、愛する女性に行ったサントナ流仰天アプロポーズ.....聞き逃せない！

A Song Menu

DL Track31

語注

Interviewer: Some people have said your latest album, [Guitar Heaven](#), sounds like the next one in your [Supernatural](#) series, but what made you choose these [particular](#) songs?

Carlos Santana: Well, thank you for asking that. [Clive Davis](#) selected seven, and I selected seven. I selected the songs that for me [resonate](#) more from the point of like, uh, when I used to take [LSD](#) or acid or [mescaline](#) or [peyote](#).

Uh, ["Riders On The Storm"](#) was a very, very [trippy](#) song. ["Sunshine of Your Love."](#) of course, ["Whole Lotta Love"](#) of course, you know. Uh, ["Guitar Gently Weeps"](#) -- pfft! -- of course. So I, I chose the songs that for me even a [blind](#) man, or actually especially a blind man would see it. You know, uh, because all of the songs are very, very visual.

I think that the ones that Clive selects are more songs, uh, that [have to do with](#) the [aesthetics](#) of radio, which I don't know much about, but I learned to trust, trust him with it, you know. Uh, obviously, we've been doing this together since '68, him and I. And, uh, he, he is the [architect](#) of, uh, *Supernatural*. He, that was his idea to [collaborate, uh, with](#) the greatest writers and singers and, you know, the new people who are in right now.

Uh, and all I had to do was, uh, [honor](#) the menus. Menus [were presented to](#) me, you know. Uh, no one tells me what to do or how to do it, they're just like, "Here's the menu. What would you like to eat?" And I [says](#), "I think I'm gonna [eat that one up](#)," you know.

translation ▶

Interviewer: [Speaking of George Harrison's](#) "While My Guitar Gently Weeps," would you agree that it's the [masterpiece](#) on this album?

Santana: For me it is, because, uh, out of all the, the elements in, um, *Guitar Heaven*, it's the [Champs Elysees](#) in Paris, where all the streets connect. You got [Yo-Yo Ma](#), who's Asian and plays cello in, in [acoustic](#), in, I mean, in, in a [symphonic](#) setting. You have [India Arie](#), you have [the Beatles](#), or George Harrison, then you have Santana. And somehow it's one [breath](#).

You know, uh, I [specifically](#) asked [Matt Serletic](#), "We need to get Yo-Yo Ma and put an intro in there like what [Wes Montgomery](#) did when he played the Beatles songs," like [chamber music](#) (*sings the intro*). Then you go, "Yesterday ..."
So they have a little, little, like they have a, like a little [interlude](#) in front of the song, like chamber music. That's where I got the idea -- from Wes Montgomery. Um, if you listen to Wes Montgomery, to five or six songs, [interpreting](#) the Beatles songs, it's very [elegant](#).

tanslation ▶

Interviewer: So then you sent that version to George's wife, Olivia, for [approval](#)?

Santana: No, you know, uh, uh, we sent, we sent it to Olivia after we did it. And she responded really, really quick. She says, you know, "Carlos, uh, as soon as I'm, I heard the song, I cried and jumped with joy at the same time. And I want you to know that George Harrison really [admired](#) and he was really [encouraged](#)." And then she said, "How could he not? Because you have a [passion](#) for [compassion](#), and you [utilize](#) music to help people."

So we do this, so we can do that. 'Cause when I grew up in San Francisco it was [Mother Teresa](#), [Cesar Chavez](#), [Dolores Huerta](#), [Martin Luther King](#), [the Black Panthers](#), all of that. And then there was like [Tito Puente](#), [B.B. King](#), [Miles Davis](#), [the Grateful Dead](#), [Jimi](#), you know. So I just went like this, "We, we do this." George Harrison was doing the same thing. [Stevie Wonder](#), [Prince](#), they do the same thing. We do the same thing. We utilize music to help people get money. If you [graduate from](#) high school and you don't have money to go to college, "Here's some money for you, man," you know.

It feels really good, you can't take it with you. You can only have, how many houses do you need? How many cars or b--, you know? It's like, just, so just [invest in](#) schools. Invest in education so that, so, so that there will be less violence. [When you give up](#), uh, people [a sense of self-worth](#) ... If you look at the Beatles -- "Imagine," "All You Need Is Love," and then the songs that George Harrison wrote -- they're not cute and [candy](#). Those, those are seriously forever songs. They're, they're forever young, like [Bob Dylan](#), and [eternally relevant](#). So, they're [hymns](#), you know what I mean?

And that's what I noticed from music, that all music that I listen to -- ["Bridge Over Troubled Water,"](#) which is something that I would like to do in the future -- they're songs that [transcend](#), uh, [generations](#). And the Beatles definitely found many, many, many, many songs to, to do that.

Interviewer: So, I'm told that you have [fallen in love with](#) a [fellow](#) musician.

Santana: Exactly. I just totally fell in love, uh, with, uh, actually someone who can actually really, really, really play. I mean, she's, she's, uh, uh, she's probably in the top three in the world who can play with [Herbie Hancock](#) or [Wayne Shorter](#). I mean, she, she's, she's a [hardcore](#) jazz musician, so [she's not just two or four](#). I mean, just 'cause she played with [Lenny Kravitz](#) that doesn't mean that she can't play. She can play. You know, he, he had her [handcuffed](#) and [on a cage](#). And, and it's like, "Well, why would you do that to someone who can really play? Why don't you just get a [goddamn rhythm machine](#)," you know? I mean, [Cindy](#) can play.

And, uh, and she's, obviously she's [very passionate about](#) learning from people like [Tony Williams and](#), uh, Jack DeJohnette and Elvin Jones and others, Art Blakey. So to her it's a very [profound](#) gift. And yes, falling in love with Cindy has allowed me to be, uh, when I go [onstage](#) it just feels like the 7--like the [7Up](#) has more bubbles. You know, I f--, I feel, uh, I have a [tremendous sense of purpose](#).

Interviewer: And what made you propose to her onstage, in front of all these people?

Santana: [Spontaneous](#). I saw her play and, uh, there is something about her, her spirit, uh, that, that [excites](#) me to believe that I could wake up with her every morning. Uh, we can talk for hours about Miles Davis and Tony Williams and Wayne Shorter. And then we can talk about children, and we can talk about flowers, and, or we can not talk at all, and just drink from each other's eyes.

Uh, I know that in the future we will write an album together, because we're that kind of artists and musicians. The best way to describe Cindy is: she's an angel sent from heaven to me to learn about [cleaning my inner act](#). My outer act [has put it together](#), but cleaning my inner act is something that I need. I'll see what she needs, but I know that we both need something, and this is why people come together, to, uh, everything, you know, [yourself with your own](#), man. Everybody's a teacher and a student to [one another](#).

Open It Up

DL Track35

語注

Interviewer: And when you play these latest songs live, how will you play them? More [improvisation](#)?

Santana: Uh-huh, more improvisation and, and maybe create more of a, uh, [congas](#) and [timbales](#) element, like (*taps on his legs and sings a rhythm*). So even if we don't put that, uh, uh, the, the what is known as the chorus, you know, uh, I just wanna take a little bit more [liberties](#) to open more windows, you know.

We did that with "Sunshine Of Your Love." If you notice, it goes like, (*sings guitar riff*) and then we'd [open it up](#) (*repeats guitar riff*). And then you sing, sing, conga, conga, conga, sing--it's not [wall to wall](#) the same riff. And by opening it up, it breathes. If you really listen to it again -- the way we did it -- I purposely opened it up.

tanslation ▶

Marcel Anders / The Interview People
Narrated by Greg Dale

歌のメニュー

 **DL**  **Track31**

インタビュー：最新アルバム『ギター・ヘヴン〜グレイテスト・ロック・クラシックス〜』は、ご自身の『スーパーナチュラル』の流れを受け継ぐ1作のような音だと言われているようですが、選曲の決め手となったのは何ですか？

カルロス・サンタナ：それを聞いてくれて、ありがとう。クライブ・デイビスが7曲選び、僕も7曲選びました。僕が選んだ曲は、自分にとって、より心に響いた曲、という観点から選んでいるんです、特に昔**LSD**、アシッド、メスカリンやペヨーテをやっていたようなころにね。

えっと、「ライダーズ・オン・ザ・ストーム」は、とても、とてもトリップシーな曲でした。「サンシャイン・オブ・ユア・ラブ」、もちろん、「ホール・ロット・ラブ」、当たり前、つてね。えっと、「（ホワイル・マイ・）ギター・ジェントリー・ウィープス」——当然！　だから、僕が選んだのは、僕に言わせると、盲目の人でさえ、あるいはむしろ盲目の人こそ実体として見えるであろう曲ばかりです。なぜかというと、全部、非常に視覚的な曲ばかりだから。

クライブが選んだ曲は、全部どちらかというと、ラジオ的な美意識と関係があつたんじゃないかな、僕にはよくわからない部分だけど。でも、それについては彼を信用することを学びましたからね。何しろ、**1968**年から一緒にやってきていますから、彼と僕とは。それに、彼は『スーパーナチュラル』の立案者ですからね。彼のアイデアだったんですよ、あのような形で、最高のソングライターたち、歌手たち、そう、今一番時流に乗っている新世代の人たちと協力するというのは。

そして、僕はただ、出されたメニューを尊重しさえすれば良かった。メニューが僕に提示された形でした。誰も、何を、どうすればいいかなんて指示してこなくて、ただ、「こちらがメニューです。何を召し上がりますか」という感じでした。そして僕は、「そいつを平らげることにしようかな」という具合だったんです。

【原文】[▶](#)

シャンゼリゼ

 [DL](#)  [Track32](#)

インタビュアー：ジョージ・ハリスンの「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス」の話をしますと、この曲が、このアルバムの最高傑作だという意見に、賛同されますか？

サンタナ：僕にとっては、その通りです。なぜなら、『ギター・ヘヴン』にある、全ての要素の中で、この曲は、全ての道がここにつながっている、という意味で、パリのシャンゼリゼみたいなものだからです。まず、ヨーヨー・マがいます。彼はアジア人で、アコースティック、つまり交響的な環境で、チェロを弾く人です。インディア・アリーがいて、ザ・ビートルズ、というかジョージ・ハリスンがいる、そしてサンタナがいる。それらが、不思議と1つの呼吸になっているのです。

そう、マット・セレティックに、特に頼んだことがあって、「ヨーヨー・マを呼んで、ウェス・モンゴメリーがビートルズをカバーしたときやつたみたいに、イントロを入れよう」と言ったんです、まるで室内楽のようなね（イントロを歌う）。それから、「イエスタデー・・・」と入るんですよ。つまり、歌に入る前に、ちょっとした間奏曲があるんですよ、室内楽のような。そこから得たアイデアだったんですよ——ウェス・モンゴメリーから。ウェス・モンゴメリーによるビートルズのカバー曲を5、6曲聴くとわかりますが、とても優雅ですよ。

【原文】[▶](#)

持っていくことはできない

 **DL**  **Track33**

インタビュー：そうして、その演奏を、ジョージの妻であるオリヴィアに許可を得るために送ったのですか？

サンタナ：いや、そう、録り終えてから、オリヴィアに送りました。そして、とても素早く反応してくれました。彼女はこう言いました。「カルロス、歌を聞いた途端、泣くと同時に、うれしさのあまり飛び上がったわ。そして、ジョージ・ハリスンは本当に（あなたのことを）尊敬し、（あなたの活動に）励まされたってことを、知ってほしいの」。さらに、こう言ってくれました。「だって当然でしょう？　だって、あなたは慈愛というものに、情熱を抱いていて、人を助けるために、音楽を活用するのだから」。

　僕らがこれ（音楽活動）をするのは、それ（人助け）をするためです。だって、僕がサンフランシスコで幼少期を過ごしていたころには、マザー・テレサ、シーザー・チャベス、ドロレス・ウエルタ、マーティン・ルーサー・キング、ブラックパンサーといった人々がいましたからね。さらには、ティト・ブエンテ、**B.B.**キング、マイルス・デイビス、グレイトフル・デッド、ジミのような人々がいましたから。だから、僕はこう答えました。「こうするものですよ」。ジョージ・ハリスンも同じことをしていました。スティーヴィー・ワンダー、プリンス、彼らも同じことをしています。みんな同じようにしています。僕たちはみんな、人々がお金を得る手助けをするために、音楽を活用しているんです。高校を卒業して、大学に行くお金がなかったら、「ほら、君のためのお金が幾ばくかここにあるぞ」と言います。

　気分がいいですよ、何しろ（あの世へ）お金を持っていくことはできないんですからね。人は、だって、家は何軒必要か、って話ですよ。車は何台必要か、でしょ？　だから、ただ、とにかく学校に投資しよう。教育に投資しよう、暴力を減らすために。自尊心を人に与えられたら・・・例えば、ビートルズ——「イマジン」「愛こそはすべて」、それにジョージ・ハリスンが書いた曲——これらは、かわいくて甘い曲じゃない。これらは本当に、永遠の曲ですよ。こうした曲は、永遠に若々しい、まるでボブ・ディランのようにね、そして永遠に意味を持ち続ける。だから、賛美歌なんですよ、わかりますか？

　そして、それこそ、僕が音楽について気付いたことなんです。僕が聴く音楽は全て——「明日に架ける橋」、これも将来的に手掛けたい歌なんですけど——これらは、世代を超越する歌なのです。そして、ビートルズは間違いなく、それを成し遂げる歌を、たくさん、たくさん、たくさん、たくさん探し当てたのです。

【原文】[▶](#)

泡が増えた

 [DL](#)  [Track34](#)

インタビュアー：仲間のミュージシャンと恋に落ちたと聞きましたが。


サンタナ：まさしく。完璧に恋に落ちてしまったんです、実際に、本当に、本当に、本当に演奏がうまい人と。彼女は、ハービー・ハンコックやウェイン・ショーターなんかと演奏できるくらい、世界でも3本指に入る（ドラマーだ）と思いますよ。何しろ、彼女は筋金入りのジャズ・ミュージシャンですからね、2ビート、4ビートだけじゃない。レニー・クラヴィッツと演奏していたからと言って、彼女がドラムが下手なわけじゃない。うまいとも。クラヴィッツは彼女に手錠^{おり}をして、しかも檻に入れたようなものだよ。そりゃ、「おい、本当にドラムがうまい人間に、何だってそんなことするんだ？　　だったらいまいまいリズムマシンでも置いたらどうなんだ」という感じですよ。何しろ、シンディーは演奏できるんだから。

それに、彼女は、明らかに、トニー・ウィリアムズ、ジャック・ディジョネット、エルビン・ジョーンズや、アート・ブレイキーなどから学ぶことに、とても意欲的ですからね。だから、彼女にとって、それ（ドラム）はとても重要な、才能なんだ。そして、そう、シンディーと恋に落ちたことによって、舞台に立つと、例えばセブアップの泡が増えたような気持ちです。とてつもない、目的意識を抱えているような気がします。

インタビュアー：それで、舞台上で、多くの人の前で、プロポーズをなさったのは、なぜですか？

サンタナ：自然の流れです。彼女が演奏するのを見ていて、彼女には、彼女の精神には、何か、彼女となら毎朝目覚めを共にできると信じることに対し、僕の感情を高ぶらせるものがあるのです。僕らは、何時間もマイルス・デビスやトニー・ウィリアムズ、そしてウェイン・ショーターの話ができます。それから子どもたちのこと、花のこと、それに、逆に一言も話をしないで、ただ互いの瞳からくみ取ることだってできる。

将来的に、僕らは一緒にアルバムを作ることになるでしょう、なぜなら、僕らは、そのようなタイプのアーティストであり、ミュージシャンですから。シンディーを表す最適な表現はこうです。彼女は、内面を浄化することを僕に学ばせるため、天から送られてきた天使です。外側は、今は落ち着いていますよ、ちゃんとしています。だけど、僕には、内面を浄化することが必要なんです。彼女が必要としていることにも目を向けるつもりですけど、僕は、僕らが互いに何かを必要としているということがわかっています。だからこそ人は一緒にいるんですよ、それが全てなんです、人それぞれ、自分自身に必要としているものがあるんですよ。誰もがお互いに対して、先生であり、生徒なんです。

[【原文】](#) 

開放する

 [DL](#)  [Track35](#)

インタビュアー：では、これら最新の曲をライブでやるとき、どのように演奏するおつもりですか？ 即興のアレンジをもっと加えますか？

サンタナ：そうですね、もって即興を加えて、ひょつとしたらもってコンガやティンパレスの要素を増やすかもしれません、こんな風に（**ひさをたたきながらリズムを口ずさむ**）。だから、たとえそれを、いわゆるコーラスを入れなかったとしても、より多くの窓を開けるよう、もう少し自由を手にしたいと思っています。

「サンシャイン・オブ・ユア・ラブ」ではそうしました。お気付きかもしれませんが、（ギターは）こういう感じなんですが（**ギターのリフを口ずさむ**）、僕らはこれを開け放つわけです（**ギターリフを繰り返す**）。ここに歌、歌、コンガ、コンガ、コンガ、歌ってね——ずっと同じリフというわけじゃないんですよ。そして、開け放つことによって、呼吸するようになるんです。もう1度真剣に聞いていただくとわかりますが——僕らが演奏したやり方をね——僕は意図的に曲を開け放っているんですよ。

【原文】[▶](#)

（訳：春日聡子）

Vocabulary List

A

- admire** 感心する、敬服する
- aesthetics** 美学、美的感覚
- approval** 承認
- architect** 立案者、発案者

C

- chamber music** 室内楽
- collaborate with ~** ~と合作する
- compassion** 思いやり

E

- eat ~ up** ~をべろりと平らげる
- elegant** 優雅な、優美な
- encourage** 励ます、勇気付ける
- eternally** 永遠に
- excite** (～を)興奮させる、(～の)血を騒がせる

F

- fall in love with ~** ~と恋に落ちる
- fellow** 仲間

G

- generation** 世代
- graduate from ~** ~を卒業する

H

- handcuff** (～に)手錠をかける
- hardcore** 筋金入りの、素晴らしい
- have to do with ~** ~と関係がある
- honor** (～に)敬意を表す
- hymn** 賛美歌

I

- improvisation** 即興
- intention** 意思
- interlude** 間奏曲
- invest in ~** ~に投資する

M

- masterpiece** 最高傑作

O

- one another** お互い
- onstage** 舞台上に

P

- particular** 特定の
- passion** 情熱
- (be) passionate about ~** ~に夢中である
- (be) presented to ~** ~に提示される
- profound** 深い

R

- relevant** (社会的な)意味のある
- resonate** 共鳴する、心に響く
- riff** リフ、反復楽句

S

- sense of purpose** 目的意識
- speaking of ~** ~と言えば
- specifically** とりわけ、明確に
- spontaneous** 自発的な、自然に起きる
- symphonic** 交響的な

T

- ▢**transcend** 超越する
- ▢**tremendous** とても大きい、重要な

U

- ▢**utilize** 役立たせる、活用する

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	アルバム『ギター・ヘヴン〜グレイテスト・ロック・クラシックス〜』に収録されている曲は、室内楽的な美意識と関係がある。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	『ギター・ヘヴン』の収録曲は、サンタナが1人で選んだ。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	サンタナとプロデューサーのクライブ・デイビスは、1960年代から共に仕事をしている。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	サンタナは、「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス」で、チェリストと共演している。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	サンタナは、「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス」のアレンジを、ウェス・モンゴメリーに依頼した。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	ジョージ・ハリスン夫人のオリヴィアは、サンタナがハリスンの曲をカバーしたことを歓迎した。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	サンタナの現夫人であるシンディー・ブラックマンは、レニー・クラヴィッツのバンドのドラマーだった。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	サンタナは、ブラックマンを筋金入りのロック・ミュージシャンであると評している。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	サンタナは、舞台の上でブラックマンにプロポーズをした。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	サンタナは、『ギター・ヘヴン』収録曲をライブで演奏するとき、さらにアレンジを加えるつもりである。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	アルバム『ギター・ヘヴン〜グレイテスト・ロック・クラシックス〜』に収録されている曲は、室内楽的な美意識と関係がある。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	『ギター・ヘヴン』の収録曲は、サンタナが1人で選んだ。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
3	サンタナとプロデューサーのクライブ・デイビスは、1960年代から共に仕事をしている。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	サンタナは、「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス」で、チェリストと共演している。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	サンタナは、「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス」のアレンジを、ウェス・モンゴメリーに依頼した。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
6	ジョージ・ハリスン夫人のオリヴィアは、サンタナがハリスンの曲をカバーしたことを歓迎した。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	サンタナの現夫人であるシンディー・ブラックマンは、レニー・クラヴィッツのバンドのドラマーだった。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	サンタナは、ブラックマンを筋金入りのロック・ミュージシャンであると評している。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
9	サンタナは、舞台の上でブラックマンにプロポーズをした。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	サンタナは、『ギター・ヘヴン』収録曲をライブで演奏するとき、さらにアレンジを加えるつもりである。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

語注

Guitar Heaven

『ギター・ヘヴン〜グレイテスト・ロック・クラシックス〜』 ★（2010）ロックの名曲のカバー・アルバム。

[▶本文に戻る](#)

Supernatural

『スーパーナチュラル』 ★（1999）収録曲「スムーズ」が大ヒットとなった他、アルバム自体も音楽賞を総なめにした。

[▶本文に戻る](#)

particular

特定の

[▶本文に戻る](#)

Clive Davis

クライブ・デイビス ★（1932-）アメリカのレコード・プロデューサー。故ホイットニー・ヒューストンの育ての親としても知られる。

[▶本文に戻る](#)

resonate

共鳴する、心に響く

[▶本文に戻る](#)

LSD

★合成麻薬の一種。直後のacidはLSDの俗語。

[▶本文に戻る](#)

mescaline

メスカリン ★幻覚剤。

[▶本文に戻る](#)

peyote

ペヨーテ ★メスカリンを含有するサボテンの一種。

[▶本文に戻る](#)

"Riders On The Storm"

「ライダーズ・オン・ザ・ストーム」 ★（1971）アメリカのロックバンド、ドアーズの曲。

[▶本文に戻る](#)

trippy

トリッピーな、（薬物による）幻覚体験を思わせる

[▶本文に戻る](#)

"Sunshine of Your Love"

「サンシャイン・オブ・ユア・ラブ」 ★（1967）イギリスのロックバンド、クリーム of the 曲。

[▶本文に戻る](#)

"Whole Lotta Love"

「ホール・ロット・ラブ」 ★（1969）イギリスのロックバンド、レッド・ツェッペリンの曲。

[▶本文に戻る](#)

" (While My) Guitar Gently Weeps"

「（ホワイル・マイ・）ギター・ジェントリー・ウィープス」 ★（1968）イギリスのロックバンド、ビートルズの曲。ジョージ・ハリスン作詞作曲。

[▶本文に戻る](#)

blind

盲目の

[▶本文に戻る](#)

have to do with ~

～と関係がある

[▶本文に戻る](#)

aesthetics

美学、美的感覚

[▶ 本文に戻る](#)

architect

立案者、発案者

[▶ 本文に戻る](#)

collaborate with ~

～と合作する

[▶ 本文に戻る](#)

honor

(～に) 敬意を表す

[▶ 本文に戻る](#)

be presented to ~

～に提示される

[▶ 本文に戻る](#)

says

★正しくはsay。

[▶ 本文に戻る](#)

eat ~ up

～をべろりと平らげる

[▶ 本文に戻る](#)

speaking of ~

～と言えば
[▶本文に戻る](#)

George Harrison

ジョージ・ハリスン ★（1943-2001）イギリスのミュージシャン。ザ・ビートルズのギタリスト。ビートルズ時代はジョン・レノン、ポール・マッカートニーの影に隠れがちだったが、徐々にソングライターとしての才能を開花させ、「サムシング」（1969）を含む、多くの名曲を残した。

[▶本文に戻る](#)

masterpiece

最高傑作
[▶本文に戻る](#)

Champs Elysees

シャンゼリゼ ★フランス、パリにある大通り。

[▶本文に戻る](#)

Yo-Yo Ma

ヨーヨー・マ ★（1955-）アメリカの世界的チェリスト。中国系アメリカ人。

[▶本文に戻る](#)

acoustic

アコースティックの
[▶本文に戻る](#)

symphonic

交響的な
[▶本文に戻る](#)

India Arie

インディア・アリー ★（1975-）アメリカのシンガー・ソングライター、音楽プロデューサー。

[▶本文に戻る](#)

the Beatles

ザ・ビートルズ ★（1960-70）イギリスのロックバンド。

[▶本文に戻る](#)

breath

呼吸 ★発音は[bréθ]。動詞形はbreathe [bri:ð]。

[▶本文に戻る](#)

specifically

とりわけ、明確に
[▶本文に戻る](#)

Matt Serletic

マット・セレティック ★レコード・プロデューサー。

[▶本文に戻る](#)

Wes Montgomery

ウェス・モンゴメリー ★（1923-68）アメリカのジャズ・ギタリスト。

[▶本文に戻る](#)

chamber music

室内楽
[▶本文に戻る](#)

interlude

間奏曲
[▶本文に戻る](#)

interpret

（自己の解釈で）演奏する
[▶本文に戻る](#)

elegant

優雅な、優美な

[▶本文に戻る](#)

approval

承認
[▶本文に戻る](#)

admire

感心する、敬服する
[▶本文に戻る](#)

encourage

励ます、勇気付ける
[▶本文に戻る](#)

passion

情熱
[▶本文に戻る](#)

compassion

思いやり
[▶本文に戻る](#)

utilize

役立たせる、活用する
[▶本文に戻る](#)

Mother Teresa

マザー・テレサ ★（1910-97）カトリック教会の修道女。'79年にノーベル平和賞受賞。
[▶本文に戻る](#)

Cesar Chavez, Dolores Huerta

★共に全米農業労働者連合の設立者。
[▶本文に戻る](#)

Martin Luther King (Jr.)

マーティン・ルーサー・キング（・ジュニア） ★（1929-68）公民権運動の指導者。'64年、ノーベル平和賞受賞。
[▶本文に戻る](#)

the Black Panthers

ブラックパンサー党 ★（1966-82）アメリカで活動した政治組織。
[▶本文に戻る](#)

Tito Puente

ティト・プエンテ ★（1923-2000）アメリカのミュージシャン。「ラテンの王様」と呼ばれる。
[▶本文に戻る](#)

B.B. King

B.B.キング ★（1925- ）アメリカのブルースギタリスト、ミュージシャン。
[▶本文に戻る](#)

Miles Davis

マイルス・デイビス ★（1926-91）アメリカのジャズトランペット奏者。
[▶本文に戻る](#)

the Grateful Dead

グレイトフル・デッド ★アメリカのロックバンド。ヒッピー文化を体現するバンドとして活躍した。
[▶本文に戻る](#)

Jimi (Hendrix)

ジミ（・ヘンドリックス） ★（1942-70）アメリカの天才ギタリスト。
[▶本文に戻る](#)

Stevie Wonder, Prince

★共に1950年代生まれのアメリカのミュージシャン。
[▶本文に戻る](#)

graduate from ~

～を卒業する

[▶ 本文に戻る](#)

invest in ~

～に投資する

[▶ 本文に戻る](#)

When you give up ...

★正しくはWhen you give ... 。

[▶ 本文に戻る](#)

a sense of self-worth

自尊心

[▶ 本文に戻る](#)

candy

キャンディー ★ここでは「甘い」という意味で使われているものと思われる。

[▶ 本文に戻る](#)

Bob Dylan

ボブ・ディラン ★（1941- ）アメリカのミュージシャン。

[▶ 本文に戻る](#)

eternally

永遠に

[▶ 本文に戻る](#)

relevant

（社会的な）意味のある

[▶ 本文に戻る](#)

hymn

賛美歌

[▶ 本文に戻る](#)

"Bridge Over Troubled Water"

「明日に架ける橋」 ★（1970）サイモン＆ガーファングルの歌。

[▶ 本文に戻る](#)

transcend

超越する

[▶ 本文に戻る](#)

generation

世代

[▶ 本文に戻る](#)

fall in love with ~

～と恋に落ちる ★サンタナは、2010年7月9日、共にツアーに出ていたCindy Blackmanに、コンサートの舞台上でプロポーズした。
[▶ 本文に戻る](#)

fellow

仲間
[▶ 本文に戻る](#)

Herbie Hancock

ハービー・ハンコック ★(1940-) アメリカのジャズ・ピアニスト、プロデューサー。
[▶ 本文に戻る](#)

Wayne Shorter

ウェイ・ショーター ★(1933-) アメリカのジャズ・サクソ奏者。
[▶ 本文に戻る](#)

hardcore

筋金入りの、素晴らしい
[▶ 本文に戻る](#)

she's not just two or four

2ビート、4ビートだけじゃない ★ジャズの基本は4拍子とされるので、「(基本だけではなく、即興などのアレンジ力も備えた)筋金入りのミュージシャン」という意味で言っていると思われる。
[▶ 本文に戻る](#)

Lenny Kravitz

レニー・クラヴィッツ ★(1964-) アメリカのミュージシャン。
[▶ 本文に戻る](#)

handcuff

(～に)手錠をかける
[▶ 本文に戻る](#)

on a cage

★正しくはin a cage。cageは「檻」の意。
[▶ 本文に戻る](#)

goddamn

いまましい
[▶ 本文に戻る](#)

rhythm machine

リズムマシン、ドラムマシン
[▶ 本文に戻る](#)

Cindy (Blackman-Santana)

シンディー(・ブラックマン-サンタナ) ★(1959-) アメリカのジャズ・ロック・ドラマー。1993年から2004年まで、クラヴィッツのバンドで演奏。クラヴィッツのヒット曲"Are You Gonna Go My Way"(邦題「自由への疾走」)のPVにも出演している。
[▶ 本文に戻る](#)

be passionate about ~

～に夢中である
[▶ 本文に戻る](#)

Tony Williams and ...

★ここで述べられている4人はすべてアメリカのジャズ・ミュージシャン。
[▶ 本文に戻る](#)

profound

深い
[▶ 本文に戻る](#)

onstage

舞台上に
[▶ 本文に戻る](#)

7Up

セブンアップ ★ソーダ飲料。

[▶ 本文に戻る](#)

tremendous

とても大きい、重要な

[▶ 本文に戻る](#)

sense of purpose

目的意識

[▶ 本文に戻る](#)

spontaneous

自発的な、自然に起きる

[▶ 本文に戻る](#)

excite

(～を) 興奮させる、(～の) 血を騒がせる

[▶ 本文に戻る](#)

clean inner act

★clean up one's actはイディオムで「行いを改める、悪習をやめる」の意（cleanにはupを付けるのが普通）。ここでは、innerを付けることで「内面」を強調している。

[▶ 本文に戻る](#)

has put it together, ...

★has pulled itself together、has it togetherなどと言おうとしてそれらが混ざってしまったものと思われる。

[▶ 本文に戻る](#)

yourself with one's own

★you have your own needsといったニュアンスで言っていると思われる。with one's ownは「自分自身で」の意。

[▶ 本文に戻る](#)

one another

お互い

[▶ 本文に戻る](#)

improvisation

即興

[▶ 本文に戻る](#)

conga

コンガ ★キューバの打楽器。

[▶ 本文に戻る](#)

timbale

ティンバレス ★キューバの打楽器。

[▶ 本文に戻る](#)

liberty

自由

[▶ 本文に戻る](#)

riff

リフ、反復楽句

[▶ 本文に戻る](#)

open ~ up

～を開放する ★新しいパートを入れるスペースを曲中に作る、という意味。

[▶ 本文に戻る](#)

wall to wall

一面の、端から端までずっと

[▶ 本文に戻る](#)

Brian May

フレディーがこう言ったのを、覚えていますよ、「アメリカがまた俺たちを求めるようになるには、たぶん俺がくたばるしかないんだろうな」ってね。

発音分析

高めの声が、年齢を感じさせない。また、物静かで淀^{よど}みない話し方は、一流大学インペリアル・カレッジ・ロンドンを卒業し、教師経験もあり、後に天体物理学博士の称号を得る、という経歴からもうなずける。とはいえ、[ei]が「アイ」になる、南イングランド訛りが時折聞かれる。basically、wayなどがそうだ。ただその母音は、はっきりとした「アイ」ではなく、聞きようによつては「エイ」にも聞こえる。インテリらしい控えめな訛りなのだ。

Interview Data	
収録日	2011年3月14日
収録地	ロンドン
スピード	やや速い
語彙・表現	普通

ブライアン・メイ

Brian May

1947年、イギリス・ミドルセックス州生まれ。'70年代からロックバンド、クイーンのギタリストを務め、代表曲である「ウィ・ウィル・ロック・ユー」などを作曲。'91年にリードボーカルのフレディー・マーキュリーが死去した後も、ドラムのロジャー・テイラーとともにクイーンを継承する音楽活動が続けており、2004年から'09年までは、ポール・ロジャースと組んで「クイーン+ポール・ロジャース」として活動した。2007年には天体物理学の研究で博士号を取得している。1991年のフレディー・マーキュリーの死去後も、今もなお人々の心をつかんで離さない伝説のバンド、クイーン。ギタリストのブライアン・メイが、ブレイクする前の数年間や、アメリカで経験した栄光と挫折、また、メディアには明かさなかった盟友フレディーの素顔について語る。

A Few Heroes

DL Track37

語注

Interviewer : When you [set out](#), what kind of band were you trying to be back in [1971](#)?

Brian May: It was a [vision](#) in our head, really. I think we would've described it at the time as very heavy [underneath](#), but very [melodic](#) and very [harmonic on top](#). And there wasn't really a model, you know.

We had heroes. Obviously, [Jimi Hendrix](#) was a huge hero, um, and [Zeppelin](#) were sort of almost [contemporary](#), but they were our heroes [as well](#). You know, they [managed to do](#) what, some of what we wanted to do. But they didn't have this other side to them. Uh, we [were very fond of Yes](#) at the time, you know, who had an [element](#). They had this very [complex](#) sort of harmonic element, which is an [inspiration](#). Um, but our heroes also went much further back into time. So you, there's people like [George Formby](#) and the big bands and the [Temperance Seven](#), all sorts of strange [eclectic](#) influences on us [coalesced](#) and became what we were. So I think we were like a sponge, and we [absorbed](#) all this wonderful music that was around us. It was a very [particular](#) time in history.

It couldn't really happen now, I don't think. But we grew up with all these sounds in our heads, and we knew what we want. The lucky thing was that [Freddie](#) and [Roger](#) and I had a very similar vision in our heads. So when we came together, it was easy to, to know which decisions to make to try and make this happen.

translation ▶

Interviewer: On [the second album](#) you can hear the harmonies [in full bloom](#). Was that you developing your own style?

May: Definitely, yeah. Well, you have to realize [the first album](#), uh, which was made within these walls, was made in [downtime](#). People, the owners of the studio, in a sense, owned us, they were our managers. But they didn't wanna spend any money, so basically, if someone was in here like [David Bowie](#) and he finished a session at 3 o'clock, we would get a phone call. And they say, and they would say, "Come in boys," you know, "We've got some downtime. Come in and do some work."

So that's how that album w--was made. So we, although we had great technology around us, we didn't really have much freedom to use it. It was really [grabbing](#) little bits of time. And we were regarded as, sort of, the new boys who didn't really know anything, and nobody really wanted to listen to the way we wanted to do things. So it was a [struggle](#) to [assert](#) our creative, uh, control.

And it really happened on the second album. You know, the second album we said, "Look, we need [proper](#) time. We need enough money and time to make a, an album which, which [reflects](#) the way we feel."

Interviewer: Do you find it [ironic](#) that today you are [hailed as](#) rock legends when, in fact, your early albums were not so [commercially](#) successful at the time?

May: Yeah, well the first album wasn't very successful, you know, commercially. No, but that's, that's, that very often happens. You know, you have to be, you have to work at things for a while for people to understand what's going on. I sometimes think the rock business [is all about persistence](#). You know, because you do something and people [go](#), "What? What is that?"

And then you do it again and they go, "Oh, that's not bad." And then you do it again and, and people think, "Ah, they're really serious. And you, you know what? I really like that!" You know, so we just kind of [plowed on, our furrow](#). We, we [plugged on](#), believing what we believed in, and [gradually](#) the snowball started to build.

The Birth of Freddie Mercury

DL Track39

語注

Interviewer: Tell us about Freddie. People know him as this amazing [showman](#), but was he like that even in the early days?

May: Yeah, he was always a rock star. He really was. That's the funny thing. He was a very shy boy, very shy, very [insecure](#), I would say. You know, and came from a, a very [strict public school upbringing](#), uh, very kind of [repressed, in a sense](#). And so his reaction to that was to [go completely the other way](#), to be completely [outrageous](#) and, and build a character around himself, which he [inhabited](#). And it came to its climax when he actually changed his name as well and became Freddie Mercury instead of [Bulsara](#).

I regard Freddie as a completely [self-made](#) man. He had his vision, he had his dream, and he [constructed](#) everything about his life to make this dream happen. And we were part of, of this whole, kind of, journey.

Interviewer: Was he [disciplined](#) in the studio?

May: [Incredibly](#) disciplined, yeah. He was very undisciplined when we met him as a performer. He would [run around](#) and [scream](#) and, and generally be quite shocking. But as soon as he heard himself in, in the studio--and it's quite interesting that we're sitting here, because [I remember sitting here](#) and Freddie listening to himself back and being very [critical](#) and very unhappy about the way he sounded. And he worked and worked and worked, night and day, to [fashion](#) his voice and the way he controlled it, into the way he wanted it to be.

tanslation ▶

Interviewer: But do you think his [flamboyancy was less acceptable to](#) American [audiences](#)? I mean, you didn't play stadium-sized shows there as you did [in the rest of](#) the world.

May: Well it's a very, uh, that's a very long story, really. Because really America is the place we grew up. We sort of [owned](#) America at a certain point, you know, when we, we had "[We Will Rock You](#)" and "[We Are The Champions,](#)" which were bigger hits there than they were here, um, and "[Another One Bites the Dust](#)" was an [enormous](#), enormous hit.

And I think there was a moment where we were not only the biggest group in America, but probably the biggest group in the world. A lot of people have that moment, but we had that moment at, [at a certain time](#). But to cut a very long story short, we sort of [diverged](#) and, um, I think three things [contributed to](#) us losing America.

tanslation ▶

Scandalous Stuff

DL Track41

語注

May: One of them was the video for "[I Want to Break Free](#)," which was regarded as something completely impossible. And something that rock stars do not do--to [dress up in](#) women's clothes. You know, over here people [got](#) the joke, because we were [spoofing "Coronation Street"](#) they didn't get that in America.

And I remember being out on promotion and people being so shocked. I remember presenters [going white](#) and not wanting to be a part of that. You know, "How could rock stars do this?" So that was one thing.

Um, second thing was, uh, we [unwittingly got involved in](#) all sorts of scandalous stuff which was going on between record companies and radio stations. This whole thing of [independent promotion came to a head](#), and the record companies were [investigated](#) by a government department to see w--basically [bribery](#), you're talking about bribery. And our record company, which we'd just signed to, [Capitol Records](#), [made a big stand against](#) the whole system and refused to pay anybody to promote anything. And so nothing got promoted, they got a huge [backlash](#) from these people who thought they owned the world, you know, the gangsters.

And so, I remember the moment. It was "[Radio Ga Ga](#)," which was rising -- I think it went from about 60 to 30 in the [Billboard](#) charts -- and the next week it disappeared. You know, nobody would play Queen records because of this whole kind of thing going on.

tanslation ▶

America Wasn't Calling

DL Track42

語注

May: The third thing that happened, in my opinion, [is down to](#) one man. We had this guy who [looked after](#) Freddie who was called [Paul Prenter](#). And, um, he [got a little too big for his boots](#), I think. You know, and, and the reflected [glory](#) of Freddie gave him a lot of power.

And we'd worked very hard over the years to have a very good relationship with all the media in the States. And Roger and I [worked our asses off](#), you know. Every time we played, we would go and do every radio station in town, because we [cared](#). We wanted to make that contact with the people. This guy, um, [in the course of](#) one tour, told every radio station to [fuck off](#). You know, and, but not just "Fuck off," but "Freddie says fuck off." "Freddie says, 'He doesn't care about you.'" And so we sort of lost our relationship with the media [at a stroke](#). And, um, it's a very sad thing, you know.

And, and suddenly the rest of the world was calling us. We, suddenly the, we, we went out and did stadiums, like you say, you know, in South America, in Europe, in Australia, in Japan. But, America was not calling us, and so you tend to go where you're called. And I remember Freddie saying, "You know, I'll probably have to [fucking](#) die before America wants us back again."

tanslation ▶

Interviewer: [Given](#) the way the recording industry has changed, do you think there could ever be another band like Queen again? That kind of huge singles band won't be able to [exist](#) anymore, will it?

May: It doesn't seem to, no. It seems to be very hard to build careers in the record business now, because everybody thinks incredibly [short term](#). We were a bit unusual in those days, because we were fundamentally an albums band. But we did [put out](#) singles. Um, you know, but we worked and created and wrote as an albums band, trying to create, uh, uh, things which made sense as an album, you know.

But at the same time there would be tracks which would be chosen after the event to be singles. So we're sort of [midway](#) between a pop group and something like Led Zeppelin, which would [never put out a single](#).

Could it happen now? I think it could happen now. But it would be in a [slightly](#) different way. Um, you know, I think you have a band like [Muse](#), who [conduct themselves](#) in a very similar way. You know, they're very serious, they're very [analytical](#), they're very, um -- what's the word--they put a great deal of creativity and [polish](#) into what they do, but, they, they, they maintain a certain, um, [spontaneity](#). And they make [complex](#) music, but they still write [tunes](#). So, [occasionally](#), they'll put out a, a single and it will be a hit.

So I think that there are still bands, you know, it can still happen. The [Foo Fighters](#), you could say, have a similar kind of [ethos](#), I think.

translation ▶

Marcel Anders / The Interview People
Narrated by Greg Dale

ヒーローたち

 [DL](#)  [Track37](#)

インタビュアー：活動を開始された当初、1971年ごろには、どのようなバンドを目指していたのですか？

ブライアン・メイ：私たちの頭の中に、あるビジョンがあったんですよ。あの当時にそれを言葉にしていたとすれば、根底では非常に重く、でも、上部では旋律がとても美しく、とても豊かなハーモニーが乗っている音、と言っていたと思います。そして、それのお手本なんて1つもなかったんです。

ヒーローはいましたよ。当然、ジミ・ヘンドリックスは、絶大なるヒーローでしたし、ツェッペリンはほぼ同世代でしたが、私たちのヒーローでもありました。彼らは、私たちがやりたかったことの一部を成し遂げていましたし。でも、もう1つの面は持ち合わせていなかった。当時の私たちは、イエスも非常に好きでしたね。その、彼らもある要素を備えていましたから。彼らの音楽には、とても複雑なハーモニーの要素があつて、それには影響を受けました。でも、さらにさかのぼった時代にも私たちのヒーローはいました。ビッグバンドを従えたジョージ・フォーンビーや、テンペランス・セブンなど、ありとあらゆる、変わった、多種多様の影響が融合し、私たちを形成しました。だから、私たちはさながらスポンジのように、周りに存在した素晴らしい音楽を吸収したんだと思います。歴史上で、極めて特殊な時代でしたからね。

現代において、同じようなことは起こり得ないのではないかと思います。ですが私たちは、頭の中にこうした、ありとあらゆる音楽が入った状態で育ち、何をしたいか、わかっていた。運のいいことに、フレディーとロジャーと私は、とても似たビジョンを思い描いていたんですね。だから一緒になったとき、これを実現させるためには、どのような決断をしていけばいいのかが、簡単にわかりました。

【原文】[▶](#)

粘り勝ち

 **DL**  **Track38**

インタビュー：2枚目のアルバムでは、ハーモニーが全開で聞こえます。あれは、自分たちの様式を、まさに発展させている最中だったのでしょうか？

メイ：確実にそうですね。まあ、最初のアルバムが、壁に囲まれた状態で、いわば休憩時間に作られたものでしたからね。スタジオのオーナーたちは、ある意味、われわれを支配していて、われわれのマネジャーでもあった。でも、われわれにまったく金を使いたくはなかったので、基本的に、誰か、例えばデビッド・ボウイのような人がここにいる、3時でセッションを終えたら、われわれに電話がかかってくる、という具合でした。そしてスタジオのオーナーが「君たち、来いよ」とか、「今、時間が空いたよ。仕事しに来いよ」と言ってくるわけです。

だから、そんな風にしてあのアルバムはできたんです。最新の技術に囲まれていたにもかかわらず、それを使う自由は実のところあまりなかった。本当に、細切れの時間をつかむような感じでした。そして、われわれは、いわば何も知らない新人として扱われていて、われわれがどのように作業をしたいか、誰も本気で聞こうとはしなかったんです。ですから、自分たちが制作面の主導権を主張するのには苦労しました。

それが実際にできるようになったのが、2枚目のアルバムでした。2枚目のアルバムでは、こう言いました。「聞いてください、まとまった時間が必要です。われわれの思っていることを反映するアルバムを作るためには、十分な資金と時間が必要なんです」と。

インタビュー：今や伝説のロックアーティストとして称賛されていらっしゃいますが、実は初期のアルバムが発売当時、あまり商業的に成功しなかったというのは、皮肉なものだと思いますか？

メイ：そうですね、まあ、1枚目のアルバムはあまり成功しませんでした。そう、商業的にはね。ええ、でも、それは非常によくあることです。何が起きているのか、人々に理解してもらうためには、しばらく時間をかけて物事に取り組む必要がありますから。ロック業界というのは、粘り強さが全てなんじゃないかと思うことがあります。だって、何かをやると、人々は、「何？ あれは何だ？」となりますからね。

それからもう1度やると、「ああ、これは悪くない」となります。そしてまた繰り返しやると、人々は、「ああ、彼らは本気なんだな。それに、いいかい？ 僕はかなり気に入ってるのさ！」となるんですよ。だから僕らは、ただひたすら、独自の道を切り開いてきたのです。自分たちが信じるものを信じ続けながら、こつこつ努力を続けた結果、徐々に雪だるま式に転がり始めたのです。

【原文】 [▶](#)

フレディー・マーキュリーの誕生

 [DL](#)  [Track39](#)

インタビュアー：フレディーについて、教えてください。一般には、偉大なるショーマンとして知られていますが、初期のころですら彼はそうだったんですか？

メイ：そうですね、彼は最初からロックスターでした。本当にそうだった。それが面白いところなんですよ。彼は、とてもシャイな少年だった、とても内気で、自信がなかった、と思います。そして、非常に厳格な、パブリックスクール式教育を受けた、そう、ある意味、かなり抑圧された教育をね。そして、それに対して彼は、完全に逆の方向に行くという、完全に突拍子もない存在になって、自分の周りに1つのキャラクターを作り上げ、それになりきる、という方法で反応したのです。そして、ついに名前まで変えてしまい、バルサラではなく、フレディー・マーキュリーになったとき、それは最高潮に達しました。

私が思うに、フレディーは徹頭徹尾、たたき上げの男でした。自分なりの理想像があり、自分なりの夢があり、そしてこの夢を実現させるために、自分の人生にまつわる全てを築き上げたのです。そして私たちは皆、その一部だったんです、その旅のようなもの全体のね。

インタビュアー：彼は、スタジオでは、自分に厳しかったのですか？

メイ：とてつもなく厳しかったですね、ええ。出会ったころ、パフォーマーとしての彼は、まったく自己抑制ができていなかった。走り回ったり叫んだりして、大体いつもあつけに取られるようなことをしていましたよ。でも、スタジオ内で、自分の歌声を聞いた途端——そして、今私たちがここに座っているのはかなり興味深いのですが、というのも私はまさにここに座っていて、フレディーは自分の歌声を聴き直していたのを覚えているんです。彼は非常に批判的で、自分の歌声に、まったく満足していなかった。それで、彼は働き、働き、働いたんです、昼夜を問わずね、自分の声、そしてそれを操る方法を、自分の望む形に作り上げるために。

【原文】[▶](#)

アメリカを手中に収める

 [DL](#)  [Track40](#)

インタビュアー：ですが、彼のきらびやかさは、アメリカの観客にとって、より受け入れがたいものだったと思われますか？　つまり、世界中でやったようなスタジアム級のショーを、アメリカではなさっていないですよね。

メイ：まあ、これは、話せば本当に長くなるんですけどね。なぜなら、実際には、アメリカこそ、私たちが成長した場所だったからです。ある時点では、アメリカをいわば掌握していたんです。そう、「ウィ・ウィル・ロック・ユー」や「伝説のチャンピオン」を出したとき、ここ（イギリス）以上に、向こうでヒットしましたからね、それに「地獄へ道づれ」もまた、とてつもない、大ヒット曲でした。

そして、ある時点で、私たちはアメリカで一番人気のあるグループ、というだけではなく、世界で一番人気のあるグループだったと思います。その瞬間を手に入れたことのある人は大勢いますが、私たちもまた、ある時期、それを手に入れていました。ですが、とても長い話を短くすると、私たちは、横道にそれてしまったのです、そう、私たちがアメリカを手放すことになってしまったのには、3つの要因があったと思っています。

【原文】[▶](#)

スキャンダル

DL **Track41**

メイ：1つは、「自由への旅立ち」のビデオが、まったく受け入れられないものと見なされてしまったことです。何より、ロックスターが絶対にやらないことだつて——女装するなんて。そう、ここ（イギリス）では、みんな冗談だつてわかっていた、何しろ『コロネーション・ストリート』のパロディーでしたから、でも、アメリカでは、それが理解されなかった。

宣伝活動に行ったとき、人々が非常にショックを受けていたのを、覚えています。司会者が顔面 そう はく 蒼白 になって、一切関わりたくないと思っている様子でした。そう、「ロックスターがなぜこんなことができるんだ？」という感じでした。ですから、それが1つありました。

ええと、2つ目は、レコード会社とラジオ局の間で起こっていた、さまざまな醜聞に、図らずも巻き込まれてしまったことです。一連の、インディペンデント・プロモーションの問題が顕在化し、レコード会社が、政府の機関によって取り調べを受けました、基本的に贈収賄行為を突き止めるためのものです。要するに賄賂のことです。そして、私たちのレコード会社、ちょうど契約したところだったキャピトル・レコードは、このシステム自体に、大々的に抵抗をし、宣伝のために、誰にも、何も支払わないと決めたのです。そういうわけで何も宣伝されなくなり、同社は、自分たちこそ世界を支配していると思っていた連中、つまりギャングから大きなしっぺ返しをくらいました。

そういうわけで、その瞬間を覚えていますよ。あれは、「レディオ・ガ・ガ」でしたね、上がっていたんです——確か『ビルボード』誌のチャートで、**60位**から**30位**ぐらいまで行つたと思います——そして翌週、こつぜんと消えました。そのとき起こっていたあらゆる事柄のせいで、誰もクイーンのレコードをかけなかったのです。

【原文】[▶](#)

呼ばれなかったアメリカ

DL **Track42**

メイ：3つ目に起こったことというのは、私の意見ですけどね、ひとえに、1人の男によるものでした。フレディーの世話をする男がいて、ポール・ブレンターという名前でした。そして、まあ、ちょっと ごうまん 傲慢 になっちゃったんでしょうね。それに、フレディーの栄光が反映されて（それが）彼に多大な力を与えてしまったのです。

私たちは長年にわたり、アメリカのメディアと良好な関係を築くため、懸命に努力してきました。ロジャーと私は、必死にやっただです。コンサートで訪れると必ず、町中のラジオ局に出演したりしましたよ、大切に思っていましたから。人々と、そうしたつながりを持ちたかったんです。この男が、1回のツアーの間に、全ラジオ局に、うせろ、と言ったのです。そう、そして、ただ「うせろ」というのではなく、「フレディーがうせろと言ってる」ってね。「フレディーがお前らのことなんかどうでもいいって言っている」と。それで、メディアとの関係を、一気に無くしてしまったのです。実に悲しいことです。

そして、突然アメリカ以外の世界中から、呼ばれるようになりました。私たちは全員で赴き、あなたが言うように、スタジアムでコンサートをやりました。南米、ヨーロッパ、オーストラリアや日本で。でも、アメリカは私たちを呼んでいなかった、そして人は呼ばれた所に行くものですからね。フレディーがこう言ったのを覚えていますよ、「アメリカがまた俺たちを求めるようになるには、たぶん俺がくたばるしかないんだろうな」ってね。

【原文】[▶](#)

アルバム型バンド

DL **Track43**

インタビュアー：レコード業界の変化を考えると、果たしてクイーンのようなバンドが、再び出てくる可能性はあると思いますか？ シングル曲が、大ヒットするようなタイプのバンドは、もはや存在できないんじゃないでしょうか？

メイ：そうは思えませんね、ええ。レコード業界でキャリアを築くのが、今はとても難しくなっているように見えますが、その理由は、みんな信じられないぐらい短期でものを考えるからです。私たちは当時少し変わっていましたが、それは基本的にアルバム型のバンドだったからです。シングルも発売しましたが。それでも、仕事の仕方、制作や曲の書き方は、アルバムを中心としたものでした——アルバムとして成立するようなものを、制作しようとしていましたから。

それと同時に、後からシングルとして売り出すことになった曲もあった。だから、私たちは、ポップグループと、レッド・ツェッペリンのような、決してシングルは出さないバンドとの、中間にいると思います。

今そのようなことができるか？ 今でもできるんじゃないかと思いますよ。少し違った形になるとは思いますが。そう、ミューズのようなバンドもありますしね、彼らは、かなり私たちに似た形で活動していると思います。彼らは極めて真面目で、分析的で、非常に——何て言ったらいいかな——自分たちの作品に、大いに創造性をつぎ込み磨きをかけますが、同時に、おおらかさも持ち合わせています。そして、複雑な音楽を創造する一方で、（キャッチーな）メロディーも書いています。ですから、たまにシングルを出すと、ヒットとなるのです。

だから、まだそういうバンドがいると思いますし、（同じような形で売れるバンドが）また現れる可能性はあると思います。フー・ファイターズも、同じような精神を持っていると言えるんじゃないでしょうか。

【原文】[▶](#)

（訳：春日聡子）

Vocabulary List

A

- analytical** 分析的な
- assert** （権利を）行使する、主張する
- at a stroke** 一気に

B

- backlash** 反発、抵抗
- bribery** 贈賄〔収賄〕行為

C

- coalesce** 融合する
- come to a head** 山場に達する、顕在化する
- conduct oneself** 行動する、振る舞う
- construct** 建設する、組み立てる
- contemporary** 同世代の
- contribute to** ～ への一因となる

D

- disciplined** 規律正しい
- diverge** それる、外れる
- downtime** 休憩時間
- dress up in** ～ ～を着る

E

- eclectic** さまざまな要素を含んだ
- enormous** 巨大な
- ethos** 精神

F

- fashion** 形作る、作り出す
- flamboyancy** きらびやかさ、華麗さ
- (be) fond of** ～ ～が好きである

G

- Given ...**を考えると
- glory** 栄光
- gradually** 徐々に

I

- in full bloom** 満開で
- in the course of** ～ ～しているうちに、～の途上で
- in the rest of** ～ その他の～において
- incredibly** 信じられないほど
- inhabit** 存在する、宿る
- insecure** 精神的に不安定な
- investigate** 取り調べる
- ironic** 皮肉

O

- occasionally** 時々
- outrageous** 著しく常軌を逸した、突飛な

P

- particular** 特別な、特殊な
- persistence** 粘り強さ、貫き通すこと
- polish** 磨くこと、洗練
- proper** まともな

R

- reflect** 反映する
- repress** 抑圧する

S

- set out** （仕事を）始める
- spontaneity** 自発的、おおらかさ

□spoof もじる、からかう、茶化す

U

□underneath 根底は、（表面はともあれ）実は

□unwittingly 図らずも、知らずに

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(* 質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	クイーンは結成当初、レッド・ツェッペリンやイエスの音楽を手本としていた。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	メイとフレディーとロジャーは、一緒になったとき、とても似たビジョンを思い描いていた。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	クイーンのデビューアルバムのレコーディングは、スタジオの空き時間に行われた。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	クイーンのデビューアルバムは、発売してすぐミリオンセラーとなった。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	メイの見方では、フレディー・マーキュリーの突拍子もないキャラクターは、抑圧された教育の反動として作られたものである。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	「ブレイク・フリー」のPVは、ドラマ『コロネーション・ストリート』のパロディーであった。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	「レディオ・ガ・ガ」は発売後すぐ、『ビルボード』誌のチャートで1位を獲得した。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	クイーンは、南米、ヨーロッパ、日本などでもコンサートを行った。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	メイは、現在の音楽業界では、大ヒットシングルを連発するようなタイプのバンドは現れにくいと考えている。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	メイは、ミューズやフー・ファイターズといったバンドに、クイーン的な要素を見出している。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	クイーンは結成当初、レッド・ツェッペリンやイエスの音楽を手本としていた。	C	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
2	メイとフレディーとロジャーは、一緒になったとき、とても似たビジョンを思い描いていた。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	クイーンのデビューアルバムのレコーディングは、スタジオの空き時間に行われた。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	クイーンのデビューアルバムは、発売してすぐミリオンセラーとなった。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
5	メイの見方では、フレディー・マーキュリーの突拍子もないキャラクターは、抑圧された教育の反動として作られたものである。	C	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	「ブレイク・フリー」のPVは、ドラマ『コロネーション・ストリート』のパロディーであった。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	「レディオ・ガ・ガ」は発売後すぐ、『ビルボード』誌のチャートで1位を獲得した。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
8	クイーンは、南米、ヨーロッパ、日本などでもコンサートを行った。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	メイは、現在の音楽業界では、大ヒットシングルを連発するようなタイプのバンドは現れにくいと考えている。	C	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	メイは、ミューズやフー・ファイターズといったバンドに、クイーン的な要素を見出している。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

語注

set out

(仕事を) 始める
[▶ 本文に戻る](#)

1971

★クイーン結成の年。ベーシストのジョン・ディーコン (1951-) が4人目のメンバーとして正式加入した年をもって、結成の年としている。
[▶ 本文に戻る](#)

vision

構想・展望
[▶ 本文に戻る](#)

underneath

根底は、(表面はともあれ) 実は
[▶ 本文に戻る](#)

melodic

旋律の美しい
[▶ 本文に戻る](#)

harmonic

(音が) 調和した、調和的な
[▶ 本文に戻る](#)

on top

上部は
[▶ 本文に戻る](#)

Jimi Hendrix

ジミ・ヘンドリックス ★(1942-70) アメリカの天才ギタリスト。
[▶ 本文に戻る](#)

(Led) Zeppelin

(レッド・) ツェッペリン ★1970年代を代表するイギリスのロックバンド。
[▶ 本文に戻る](#)

contemporary

同世代の
[▶ 本文に戻る](#)

as well

その上
[▶ 本文に戻る](#)

manage to do

何とか〜する
[▶ 本文に戻る](#)

be fond of ~

〜が好きである
[▶ 本文に戻る](#)

Yes

イエス ★(1968-81, '83-) イギリスのロックバンド。
[▶ 本文に戻る](#)

element

要素
[▶ 本文に戻る](#)

complex

複雑な
[▶ 本文に戻る](#)

inspiration

刺激、鼓舞
[▶ 本文に戻る](#)

George Formby

ジョージ・フォーンビー ★（1904-61）イギリスの歌手、ウクレレ奏者。
[▶ 本文に戻る](#)

Temperance Seven

テンペランス・セブン ★（1957- ）イギリスのジャズバンド。
[▶ 本文に戻る](#)

eclectic

さまざまな要素を含んだ
[▶ 本文に戻る](#)

coalesce

融合する
[▶ 本文に戻る](#)

absorb

吸収する
[▶ 本文に戻る](#)

particular

特別な、特殊な
[▶ 本文に戻る](#)

Freddie (Mercury)

フレディ（・マーキュリー） ★（1946-91）クイーンのメンバーにして、不世出のボーカリスト。
[▶ 本文に戻る](#)

Roger (Taylor)

ロジャー（・テイラー） ★（1949- ）クイーンのドラマー。
[▶ 本文に戻る](#)

the second album

2枚目のアルバム ★*QUEEN II*（1974、邦題『クイーンⅡ』）。全英チャートで最高5位を記録。
[▶本文に戻る](#)

in full bloom

満開で
[▶本文に戻る](#)

the first album

最初のアルバム ★*Queen*（1973、邦題『戦慄^{せんりつ}の王女』）。このデビューアルバムは酷評され、最高順位も全英チャートで24位だった。
[▶本文に戻る](#)

downtime

休憩時間
[▶本文に戻る](#)

David Bowie

デビッド・ボウイ ★（1947-）イギリスのミュージシャン。クイーンと共作したシングル曲「アンダー・プレッシャー」（1981）は、全英チャートで1位を獲得するヒットとなった。
[▶本文に戻る](#)

grab

つかむ
[▶本文に戻る](#)

struggle

奮闘、苦心
[▶本文に戻る](#)

assert

（権利を）行使する、主張する
[▶本文に戻る](#)

proper

まともな
[▶本文に戻る](#)

reflect

反映する
[▶本文に戻る](#)

ironic

皮肉
[▶本文に戻る](#)

hail A as B

AをBだと称賛する
[▶本文に戻る](#)

commercially

商業的に
[▶本文に戻る](#)

be all about ~

～が全てだ
[▶本文に戻る](#)

persistence

粘り強さ、貫き通すこと
[▶本文に戻る](#)

go

言う
[▶本文に戻る](#)

plow on, our furrow

★誤ってonと言ってしまうているが、plow one's own furrow（独自の道を行く、独りで働く）が正しい表現。plowは「すきで耕す」、furrowは「あぜ道」。
[▶本文に戻る](#)

plug on

（～に）こつこつ取り組み続ける
[▶本文に戻る](#)

gradually

徐々に
[▶本文に戻る](#)

showman

ショーマン、表現のうまい人

[▶ 本文に戻る](#)

insecure

精神的に不安定な

[▶ 本文に戻る](#)

strict public school upbringing

★両親がベルシャ系インド人だったマーキュリーは、8歳のときから、インドのムンバイ郊外にある、イギリス系全寮制男子校で教育を受けた。public schoolは、イギリスでは「中高一貫の私立学校」を指す。

[▶ 本文に戻る](#)

repress

抑圧する

[▶ 本文に戻る](#)

in a sense

ある意味

[▶ 本文に戻る](#)

go the other way

別の方向に行く

[▶ 本文に戻る](#)

outrageous

著しく常軌を逸した、突飛^{とつび}な

[▶ 本文に戻る](#)

inhabit

存在する、宿る

[▶ 本文に戻る](#)

Bulsara

バルサラ ★マーキュリーに改名する前の名字。本名はFarrokh Bulsara（ファルーク・バルサラ）だった。

[▶ 本文に戻る](#)

self-made

自分で努力して成功を収めた、たたき上げの

[▶ 本文に戻る](#)

construct

建設する、組み立てる

[▶ 本文に戻る](#)

disciplined

規律正しい

[▶ 本文に戻る](#)

incredibly

信じられないほど

[▶ 本文に戻る](#)

run around

走り回る

[▶ 本文に戻る](#)

scream

叫ぶ

[▶ 本文に戻る](#)

I remember sitting here ...

★このインタビューは、ロンドンにあるトライデント・スタジオで収録された。

[▶ 本文に戻る](#)

critical

批判的な

[▶ 本文に戻る](#)

fashion

形作る、作り出す

[▶ 本文に戻る](#)

flamboyancy

きらびやかさ、華麗さ

[▶本文に戻る](#)

be acceptable to ~

~にとって受け入れられる

[▶本文に戻る](#)

audience

観客、観衆

[▶本文に戻る](#)

in the rest of ~

その他の~において

[▶本文に戻る](#)

own

掌握する、手中に収める

[▶本文に戻る](#)

"We Will Rock You"

「ウィ・ウィル・ロック・ユー」 ★アルバム*News Of The World*（1977、邦題『世界に捧ぐ^{ささ}』）収録曲。

[▶本文に戻る](#)

"We Are The Champions"

「伝説のチャンピオン」 ★アルバム*News Of The World*収録曲。「ウィ・ウィル・ロック・ユー」とのカップリングでシングルとして発売され、全英チャートで最高2位、全米では最高4位を記録した。

[▶本文に戻る](#)

"Another One Bites the Dust"

「地獄へ道づれ」 ★アルバム*The Game*（1980、邦題『ザ・ゲーム』）収録曲。全米チャートで1位を獲得。アメリカにおける最大のヒット曲となった。

[▶本文に戻る](#)

enormous

巨大な

[▶本文に戻る](#)

at a certain time

ある時点で

[▶本文に戻る](#)

diverge

それる、外れる

[▶本文に戻る](#)

contribute to ~

~の一因となる

[▶本文に戻る](#)

"I Want to Break Free"

「ブレイク・フリー（自由への旅立ち）」 ★アルバム *The Works*（1984、邦題『ザ・ワークス』）収録曲。メンバーが女装したPVが話題となり、アメリカのケーブルテレビ・チャンネルMTVで放送禁止になった。一方、全英チャートでは3位を記録するなどヒット曲となった。
[▶ 本文に戻る](#)

dress up in ~

～を着る
[▶ 本文に戻る](#)

get

理解する
[▶ 本文に戻る](#)

spoof

もじる、からかう、茶化す
[▶ 本文に戻る](#)

"Coronation Street"

『コロネーション・ストリート』 ★（1960- ）イギリスで50年以上にわたって放送されている連続テレビドラマ。
[▶ 本文に戻る](#)

go white

真っ青になる、顔面 そうはく 蒼白 になる
[▶ 本文に戻る](#)

unwittingly

図らずも、知らずに
[▶ 本文に戻る](#)

get involved in ~

～に巻き込まれる、～に引き込まれる
[▶ 本文に戻る](#)

independent promotion

インディペンデント・プロモーション ★レコード会社が、ラジオ局のDJに直接賄賂を払うことは禁止されているため、第三者である独立したレコードプロモーターを介在させる仕組みのこと。政府はこれを違法として、繰り返しレコード会社を相手取った訴訟を起こしている。
[▶ 本文に戻る](#)

come to a head

山場に達する、顕在化する
[▶ 本文に戻る](#)

investigate

取り調べる
[▶ 本文に戻る](#)

bribery

贈賄〔収賄〕行為
[▶ 本文に戻る](#)

Capitol Records

キャピトル・レコード ★（1942- ）アメリカの大手レコード・レーベル。
[▶ 本文に戻る](#)

make a stand against ~

～に抵抗する
[▶ 本文に戻る](#)

backlash

反発、抵抗
[▶ 本文に戻る](#)

Radio Ga Ga

「レディオ・ガ・ガ」 ★（1984）シングルリリース曲。アメリカの歌手レディー・ガガの名前の由来ともなった。

Billboard

『ビルボード』誌 ★アメリカの週刊音楽専門誌。この雑誌が発表するヒット曲のランキングは、音楽業界で重要な指標とされている。

be down to ~

～の肩にかかっている

[▶本文に戻る](#)

look after ~

～の世話をする、～の面倒を見る

[▶本文に戻る](#)

Paul Prenter

ポール・ブレンター ★1980年ごろから'84年まで、フレディーの個人マネジャーを務めた人物。

[▶本文に戻る](#)

get too big for one's boots

うぬぼれる、でしゃばる

[▶本文に戻る](#)

glory

栄光

[▶本文に戻る](#)

work one's ass off

必死になって働く ★卑語。

[▶本文に戻る](#)

care

大事だと思う

[▶本文に戻る](#)

in the course of ~

～しているうちに、～の途上で

[▶本文に戻る](#)

fuck off

立ち去る、くたばる

[▶本文に戻る](#)

at a stroke

一気に

[▶本文に戻る](#)

fucking

★強意語。

[▶本文に戻る](#)

Given ...

.....を考えると
[▶ 本文に戻る](#)

exist

存在する
[▶ 本文に戻る](#)

short term

短期間
[▶ 本文に戻る](#)

put out ~

~を発売する
[▶ 本文に戻る](#)

midway

中ほどに
[▶ 本文に戻る](#)

never put out a single

★実際にはレッド・ツェッペリンも、アメリカや日本などではシングルを発売している。
[▶ 本文に戻る](#)

slightly

少し
[▶ 本文に戻る](#)

Muse

ミューズ ★（1994- ）イギリスのロックバンド。
[▶ 本文に戻る](#)

conduct oneself

行動する、振る舞う
[▶ 本文に戻る](#)

analytical

分析的な
[▶ 本文に戻る](#)

polish

磨くこと、洗練
[▶ 本文に戻る](#)

spontaneity

自発的、おおらかさ
[▶ 本文に戻る](#)

complex

複雑な
[▶ 本文に戻る](#)

tune

旋律、メロディー
[▶ 本文に戻る](#)

occasionally

時々
[▶ 本文に戻る](#)

Foo Fighters

フー・ファイターズ ★（1995-）アメリカのロックバンド。
[▶ 本文に戻る](#)

Brian Johnson

AC/DCのクルーがアフリカの小国を統治したとしたら、**1**年で成果を出すと思うよ。

発音分析

同じニューカッスル出身のスティングや、同じ年で同じ「ブライアン」のメイ博士らとはあまりに対照的。豪快な笑い声、しわがれた声、訛った言葉、いかにも労働者階級のおっちゃんだ。ジョーディ訛りの例は山ほどある。**bus**は見事な「ブス」。**[eɪ]**は「エー」（正確には口が広がっていく**[eɛ]**。例：**Stadium**）。また**time**の上昇イントネーションは、ジョーディなど北の訛りの典型。ちなみに、**about a**は「アブーダ」だ。

Interview Data	
収録日	2011年5月10日
収録地	ロンドン
スピード	普通
語彙・表現	やや難しい

ブライアン・ジョンソン

Brian Johnson

1947年、イギリス・ニューカッスル近郊生まれ。'70年代はグラムロック・バンド、ジョーディのメンバーとして活動。'80年、急死したボーカリスト、ボン・スコットの後任として**AC/DC**に加入し、直後に発表されたアルバム『バック・イン・ブラック』（'80）、『悪魔の招待状』（'81）の大ヒットにより、人気を不動のものとする。パワフルなボーカルは**60**代を迎えても健在で、アルバム『悪魔の氷（**BLACK ICE**）／ブラック・アイス』（2008）は29カ国で**1**位を記録した。アルバムの世界総売上はなんと**2**億枚以上**(!)**、カルト的人気を誇るオーストラリアのバンド**AC/DC**。ボーカルのブライアン・ジョンソンが、バンドのツアーの様子、思い出のステージ、あのフレディー・マーキュリーとの**1**度きりの出会いなどについて、オヤジトークを炸裂させる！

Interviewer: How do you [deal with](#) the lifestyle of being in a touring band? Does it get boring?

Brian Johnson: You start to getting this hotel thing where you go, "I just don't want any more room service," you know. And it's like when in Germany, in Berlin, when, f--f--st--stay at the [Four Seasons](#) and it's very [posh and like](#). And, ah, first thing I always say to [Gunter](#), is, "Gunter, take me to a [regular](#) German bar. 'Cause I want them [bratwursts](#) and a [sauerkraut](#)," and all of this. And he, he, and he usually takes [we](#) to these great, you know, and I get a nice glass of [Pilsner](#). And you're just sitting there with all the guys, the regular [folk](#), and it's fantastic. You know, you feel like you're in the town rather than in this big posh place, you know. It's, it's, it, it help, really helps. Yeah, you know.

Interviewer: And how does the band [manage to cope with](#) being together like that for months [on end](#)?

Johnson: We're [getting on well](#). Uh, j--, the, from the [crew](#), uh, the crew are good [lads](#). They're probably all [hand-picked](#) by [Opie](#), the head lad, and Tim and, you, you know. It just works, sort of.

It's, I've often said if, if the crew of AC/DC [ran](#) a small African country, they could [turn it round](#) in a year. I mean, they'd have the roads working, the [hospitals'd](#) be open, the [sewage'd](#) be [on](#). [I'm telling you](#), I'm not kidding.

Interviewer: Do you [rent them out](#) when you're not touring?

Johnson: Well, [unfortunately](#) as soon as we finish, the, the boys are, you know, are needed by other big bands. You know, they're pretty much the best in the world, you know. So they're, I think, half of ours went [straight off](#) with [Ozzy](#), you know. And so, you know, uh, they're, they're the best in the world, and, you know, they're good. We [appreciate](#) everything they do for we, you know.

Gigs Remembered

DL Track46

語注

Interviewer: What would you consider your dream [gig](#) to be?

Johnson: I mean, you know, you gotta think of some gigs, uh, [in a different light](#).

Uh, I mean, I still think and I still remember [with great fondness](#), the [Circus Krone](#), uh, because it was [in the middle of](#) a huge tour [and all that](#), and we went to play in the Circus Krone. And it was exciting, and it was [packed](#), and then they opened the doors because there was lots and lots of kids who'd come and they couldn't [get in](#). And they just opened all the [exit doors](#) so everybody could hear. That's, that's special, you know. It was really special and, uh, the sound was great. I, I mean, you could [touch](#), the people were right here.

And, uh, so and, and, you know, in a different kind of way, uh, [Wembley Stadium](#), you know, to play there for the first time was magic. And, you know, uh, it's just, you know, there's just, you, you remember lots of 'em. So there are already big ones there, you know. I'd, I think, we'd be pretty [greedy](#) to want any more than them that we've had, you know. We've, we've done pretty good, you know. But, uh, ah, I think I've already had my dream gigs, you know.

tanslation [▶](#)

Bittersweet Endings

DL Track47

語注

Interviewer: And then when a tour is [over](#), how do [make the transition from all the excitement of touring back to regular life](#)?

Johnson: It's hard, [mate](#). You know, I've, I remember, uh, we, we were finished and we've said bye-bye, uh, at, at, at the airport, you know. And everybody got into their different cars, flying to different places and all of that. And, uh, it was, uh, suddenly the tour was finished. And it was, and it just seemed to have just [flashed past](#) like it never happened. It was the strangest feeling, you know. Nothing to do the next day that [had anything to do with organization](#) or meeting people or, or, or, or saying "hi" or f--, talking about the different things we had to do.

And, and then I was on a plane and, and I was home and, and I didn't know what to do for, I'd say for two weeks. I was [wandering around](#), like, and just going, "What, what do I do next?" It, it's just hard to get back to living a normal life, uh, well, for me, 'cause I'm usually [energetic](#) and I like to do things and all, you know. So, it was, uh, it was strange but, uh, you know, but I think [bittersweet](#) was the feeling I had when it was finished. I just went, "[Gosh darn it](#), I wouldn't mind another, maybe just [another leg](#)."

Interviewer: And what happens to all the [stage props](#)? Will you keep [the train](#)?

Johnson: Yeah, I'd hate to see the end of that train. I love that fucking train. I mean I really, it, it, uh, I never [got tired of](#) it -- keep just turning round and looking at it sitting there. It was a [cracking piece of work](#) that, that -- the guys who built that was just absolutely fantastic. And I think it's so unique. I haven't seen anything like it, me, you know. Uh, it was, it's brilliant, it really is. And it had something to do with the show. It wasn't just there [for the sake of it](#), you know.

translation ►

Interviewer: [On a similar note](#), the [biography](#) you published is packed full of car [references](#). What's that all about?

Johnson: Cars and rock 'n' roll, you know. I'll tell you, [from the very start](#), cars started looking great when rock 'n' roll [came round](#), you know what I mean? When, when, uh, uh, ["Rocket 88" came out](#) and all that, and, and then and [Elvis](#) come out, and, and all these fantastic, you know, [Cadillacs](#), and [fins and chrome](#). And I always think, I always think of rock 'n' roll whenever I see one.

You think of Elvis or [Little Richard](#). Rock 'n' roll -- and, you know, and [Chuck Berry](#) -- started s--, you know, ["Riding along in my automobile, do, do, do, do, do, do."](#) And then you got [the Beach Boys](#). But, you know, but w--when, when they wrote about a thing, it, what was it? Uh, uh, ["I got a little flat Ford with a ..."](#) It, it was more like a fucking [workshop](#) manual than a [actual](#) fucking song. It was, you know? It was [nae](#) rock 'n' roll in that, you know.

tanslation ▶

A Hell of an Opera Singer

DL Track49

語注

Interviewer: Well, talking of rock legends, did you ever meet [Freddie Mercury](#)? I'm amazed it's already been 20 years since he died.

Johnson: I met, I just met him once, mate, when I was in [Geordie](#) in 1973. We're at [Hilversum Studios](#) and we're doing a television show. And I knew they were gonna be [massive](#), 'cause we [got picked up](#) by a bus, and they all had a [Porsche](#) each. We were taken there by the secretary of the record company 'cause she [had the day off](#).

It was all, uh, and, and I just remember when we [came off](#) and, and he was just, come [flaunting](#) into the, the [dressing room](#). And he was just [pissed off](#). He's [going](#), "They hate us. They hate us [out there](#)." And I went, "Ah, never mind." That, but that's all I really saw of the lad, but, oh, his [track record speaks for itself](#), you know. He was a, he was [a hell of an](#) opera singer. He really was, you know. And, uh, and certainly a great performer.

tanslation ▶

Marcel Anders / The Interview People
Narrated by Greg Dale

一般の人々

 [DL](#)  [Track45](#)

インタビュアー：ツアーを頻繁に行うバンドの一員としての生活は、どんなものなんですか？ 飽きてしまうこともあるんですか？

ブライアン・ジョンソン：ホテル暮らしならではの、ある心境に陥り始めて、突然、「もうルームサービスはごめんだ」と思うんだ。例えば、ドイツでは、ベルリンだとフォーシーズンズに泊まるんだけど、すごくお上品なわけ。それで、毎回ガンターにまず言うのが、「おい、ガンター、普通のドイツのバーに連れていってくれ。例のブラートヴルストやらザワークラウトやらを食べたいからね」、そんなことを言うんだ。すると彼が、大体俺たちをいい感じの所に連れていってくれて、俺も1杯のうまいビルスナービールを手に入れる。そうして、いろんな人たち、一般の人々に囲まれて座っていると、もう最高だよ。大きなしゃれた建物の中じゃなくて、街を訪れている、という気になれるから。気持ちが楽になるんだよ。わかるよね。

インタビュアー：そしてバンドの皆さんは、何カ月もの間あやって一緒にいることに、どう折り合いを付けるものなのですか？

ジョンソン：俺たちはうまくいってる。そうだな、クルー、スタッフが、実にいい連中なんだ。確か、全員、責任者のオビーがじかに選んだ連中で、ティムも、そう。とにかくうまくいってるよ、なんとかね。

前からよく言ってることなんだけど、**AC/DC**のクルーがアフリカの小国を統治したとしたら、1年で成果を出すと思うよ。連中なら、道路を整備して、病院も立ち上げ、下水（道）も機能させるだろうな。いいかい、本気でそう思ってるんだぜ。

インタビュアー：ツアーに出ていないときは、クルーをどこかに貸し出したりするんですか？

ジョンソン：まあ、残念ながら、終わったと同時に、みんな、そう、他の有名バンドに必要とされるからね。世界一と言ってもいいと思う。だから、確かうちのクルーの半分は、ツアーが終わったと同時に、オジーとまた出たんじゃないかな。だから、そう、本当に世界最高のクルーなんだよね。いいクルーでね、彼らが俺たちのためにやってくれている全てのことに、本当に感謝しているよ。

【原文】[▶](#)

思い出のギグ

 [DL](#)  [Track46](#)

インタビュー：あなたにとって、夢のギグとは、どのようなものですか？

ジョンソン：そうだなあ、他とは一線を画するようなギグも幾つかあるんだよね。

 というのも、今でもよく頭に浮かぶし、いまだにとても懐かしく思い出すが、サーカス・クローネでやったギグなんだ。大々的なツアーの最中で、サーカス・クローネに公演しに行ったんだよ。それですごく盛り上がって、満席だったものだから、なんと（劇場側が）扉を開け放ったんだ。大勢の若者たちが詰め掛けてくれたのに、（チケットを持ってなくて）中に入れなかったから。それで、出口の扉が全て開け放たれて、みんなに聞こえるようにしたんだ。そういうのは、特別だよな。本当に特別で、音も最高だった。何しろ、触れられるぐらい、みんなすぐそこにいるんだから。

 そして、そうだな、別の意味で、ウェンブリー・スタジアムも、そう、あそこで初めて演奏したときは、魔法のようだったね。そして、ただ、そうだなあ、いろいろ覚えているものだけど、特別なのは、すでに幾つかあるよね。今までにやったもの以上のものを求めるのは、かなり欲張りなんじゃないかな。これまでも、結構よくやってきたからね。でも、そうだな、夢のギグは、すでに実現してきたんだと思うよ。

【原文】[▶](#)

ほろ苦い終わり

DL **Track47**

インタビュアー：1つのツアーが終わりを迎えたとき、興奮に満ちたツアーの日々から、日常生活へと、どうやって戻っていくものですか？

ジョンソン：結構大変なものだよ。そう、覚えてるのが、終わって、みんなさよならを言ったんだ、飛行場でさ。みんな別々の車に乗り込んで、別々の場所に飛んでいった。そして、突然、ツアーが終わってしまったんだ。なんだか、まるで何事もなかったかのように、目の前を過ぎ去ってしまったような感じだった。何よりもまか摩訶 不思議な感覚だったね。明日から、手はずを整えたり、人に会ったり、そう、ただ人に「やあ」と言ったり、いろいろやらずにちゃいけないことについて話し合ったり、なんていうこととは、完全に無縁の日々が始まる。

そうして、飛行機に乗り込み、家に着いたものの、自分が何をすればいいのか、そうだな、2週間ぐらいはわからないんだ。うろろう歩き回っては、ただ、「何を、次に何をすればいいんだ？」という感じでね。普通の生活に戻るのとは、とにかく大変なことなんだよ。まあ、俺の場合はそうなんだけど、何しろ普段は活動的で、いろいろやりたい性質なものだから。だから、そう、変な、まあ、ほろ苦い、と言っていいような感情だったね、ツアーが終わったときは。「ああ、畜生、たぶんもう1行程ならやってもいいな」という感じだったよ。

インタビュアー：そして、あの舞台装置はどうなるのですか？ 汽車は取っておくんですか？

ジョンソン：そうだなあ、あの汽車が壊されるのは見たくないなあ。あの汽車はマジで最高だよ。本当に、まったく飽きなかった――振り返って、そこに鎮座しているのをずっと見ていると、本当に最高の出来だった――あれを作った連中は、とにかく最高だね。それに、本当にユニークだ。あんなもの、今まで見たこともないね、自分は。まったく素晴らしかった、本当にさ。それに、ショーの内容とも関連性があった。意味もなく、そこにあるわけじゃなかったからね。

【原文】[▶](#)

テールフィンとクロムメッキ

 **DL**  **Track48**

インタビュー：それと関連した話で、出版なさった自伝には、車に関する話が満載です。あれはなぜですか？

ジョンソン：車にロックンロール、ってことだよ。そう、最初から、ロックが出現したことで、車は格好良くなっていったんだ、そうだろ？ 「ロケット**88**」とかが発売になって、そしてエルヴィスが登場して、ああいう最高の車、キャデラックだの、テールフィンとクロムメッキだのが出てきた。そういう車を見ると、必ずロックンロールを連想するんだ。

エルヴィスや、リトル・リチャードを連想する。ロックンロールだよ——それに、チャック・ベリーが始めたんだ、「俺の車を乗り回してさ、ドウ、ドウ、ドウ、ドウ、ドウ、ドウ」ってね。そして、ビーチボーイズもいる。でも、彼らが何かを歌にしたとき、あれは何だったつけ？ えっと、「小さな平たいフォードを持ってい
て・・・」。実際は歌というよりは、工場のマニュアルみたいなものだったけどね。そこにはロックンロールはなかったけどね。

【原文】[▶](#)

一流のオペラ歌手

 [DL](#)  [Track49](#)

インタビュアー：伝説的ロックミュージシャンと言えば、フレディー・マーキュリーに会ったことはありますか？ 亡くなってからすでに**20年**が経ったなんて、信じられません。

ジョンソン：会ったのは、会ったのは1度だけだよ、**1973年**、俺がジョーディにいた時のことだ。俺たちはヒルバーサム・スタジオでテレビ番組をやっていたんだ。彼らが大成功を収めることはすぐにわかった。何しろ俺たちにはバスが迎えに来て、彼らは1人1台ボルシェに乗っていたんだからね。俺たちはレコード会社の秘書に連れてってもらったんだ、彼女が1日空いていたからだけど。

全部そんな具合でさ、覚えているのが、俺らが終わって、彼が、控室に派手に登場したのさ。とにかく不機嫌だったな。「嫌われてる。客席に嫌われてるよ」つてね。それで、「まあ、気にするなよ」つて言っただ。実際にあいつを見たのはそれっきりだよ。でも、彼の実績は、説明が要らないよな。すげえオペラ歌手だったよ。本当にそうだった。そして、もちろん偉大なパフォーマーだったよ。

【原文】[▶](#)

（訳：春日聡子）

Vocabulary List

A

- actual** 実際の
- and all that** などなど、とか
- and like** みたいな
- appreciate** （～に）感謝する

B

- biography** 伝記
- bittersweet** ほろ苦い

C

- come off** 降りる
- come out** 世に出る、発表される
- come round** 現れる
- cope with** ～ ～にうまく対処する
- cracking** 素晴らしい

D

- deal with** ～ ～を処理する
- dressing room** 控室

E

- energetic** 活動的な、精力的な

F

- flash past** 一瞬にして過ぎ去る
- flaunt** ひけらかす、扇情的な動作をする
- folk** 人々
- from the very start** 当初から

G

- get on well** うまくやる
- get picked up** （車で）迎えに来てもらう
- get tired of** ～ ～に飽きる
- greedy** 欲深い

H

- hand-pick** 直接選ぶ、厳選する
- have a day off** 1日仕事を休む

I

- in a different light** 違った角度で
- in the middle of** ～ ～の最中に

M

- manage to do** 何とか～する
- massive** 圧倒的な、素晴らしい

O

- on a similar note** 似たような話をすると
- on end** 続けて
- organization** 手はずを整えること
- over** 終わって

P

- packed** 満員の、満席の
- piece of work** 作品
- piss** ～ off ～を怒らせる
- posh** 上品な、上流階級の

R

- reference** 言及、参照
- regular** 一般的な
- rent** ～ out ～を貸し出す
- run** 運営する、管理する

S

- sewage 下水
- ~ speaks for itself ~は自明である
- stage prop 舞台装置
- straight off すぐに

U

- unfortunately 残念ながら

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	ジョンソンは、ツアーでドイツに滞在しているとき、よく地元のバーを訪れる。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	AC/DCのツアーを手掛けるスタッフは、AC/DCの専属である。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	AC/DCのツアーの収益金の一部は、アフリカの小国に寄付される。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	サーカス・クロネでのコンサートでは、会場に入れなかった人のために、出口の扉が全て開け放たれた。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	AC/DCはウェンブリー・スタジアムで演奏をしたことはない。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	AC/DCのメンバーは皆、同じ市内に住んでいる。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	ジョンソンは、ツアーの舞台装置として用いられた車を、家に引き取った。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	ジョンソンは、自伝を出版したことがある。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	ジョンソンは、ロックンロールによって車は格好良くなったと思っている。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	ジョンソンがフレディー・マーキュリーに最後に会ったのは、彼の死の20年前のことである。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	ジョンソンは、ツアーでドイツに滞在しているとき、よく地元のバーを訪れる。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	AC/DCのツアーを手掛けるスタッフは、AC/DCの専属である。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
3	AC/DCのツアーの収益金の一部は、アフリカの小国に寄付される。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
4	サーカス・クローネでのコンサートでは、会場に入れなかった人のために、出口の扉が全て開け放たれた。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	AC/DCはウェンブリー・スタジアムで演奏をしたことはない。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
6	AC/DCのメンバーは皆、同じ市内に住んでいる。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
7	ジョンソンは、ツアーの舞台装置として用いられた車を、家に引き取った。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
8	ジョンソンは、自伝を出版したことがある。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	ジョンソンは、ロックンロールによって車は格好良くなったと思っている。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	ジョンソンがフレディー・マーキュリーに最後に会ったのは、彼の死の20年前のことである。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

語注

deal with ~

～を処理する

[▶本文に戻る](#)

Four Seasons

フォーシーズンズ ★国際的ホテルチェーン、フォーシーズンズ・ホテルズ&リゾーツのこと。

[▶本文に戻る](#)

posh

上品な、上流階級の

[▶本文に戻る](#)

and like

みたいな

[▶本文に戻る](#)

Gunter

ガンター ★ドイツに多い名前であることから、地元の関係者と思われる。

[▶本文に戻る](#)

regular

一般的な

[▶本文に戻る](#)

bratwurst

ブラートヴルスト ★焼いて食べるソーセージ。

[▶本文に戻る](#)

sauerkraut

ザワークラウト ★塩漬け発酵キャベツ。

[▶本文に戻る](#)

we

★= us。イングランド北部の方言。

[▶本文に戻る](#)

Pilsner

ピルスナービール

[▶本文に戻る](#)

folk

人々

[▶本文に戻る](#)

manage to do

何とか～する

[▶本文に戻る](#)

cope with ~

～にうまく対処する

[▶本文に戻る](#)

on end

続けて

[▶本文に戻る](#)

get on well

うまくやる

[▶本文に戻る](#)

crew

（一緒に仕事をする）グループ、仲間
[▶ 本文に戻る](#)

lad

男 ★親愛の情を表す呼び掛け。
[▶ 本文に戻る](#)

hand-pick

直接選ぶ、厳選する
[▶ 本文に戻る](#)

Opie

オピー ★AC/DCの2008～'10年のワールドツアー（**Black Ice Tour**）のプロダクションマネジャー、**Dale Skjerseth**の愛称。すぐ次の**Tim**は、ツアーマネジャーの**Tim Brockman**のこと。
[▶ 本文に戻る](#)

run

運営する、管理する
[▶ 本文に戻る](#)

turn ~ round

～を良くする、～を立て直す
[▶ 本文に戻る](#)

hospitals'd

★= hospitals would
[▶ 本文に戻る](#)

sewage'd

★= sewage would。sewageは「下水」の意。
[▶ 本文に戻る](#)

on

（機能が）働いて
[▶ 本文に戻る](#)

I'm telling you

あのね、言っておくけど ★発言を強調する表現。
[▶ 本文に戻る](#)

rent ~ out

～を貸し出す
[▶ 本文に戻る](#)

unfortunately

残念ながら
[▶ 本文に戻る](#)

straight off

すぐに
[▶ 本文に戻る](#)

Ozzy Osbourne

オジー（・オズボーン） ★（1948- ）イギリスのミュージシャン。ヘビーメタルバンド、ブラックサバス（1969-2006、'11- ）の結成時のメンバーで、1979年の脱退後はソロ活動を行っていたが、2011年にオリジナルメンバーで再結成を果たした。
[▶ 本文に戻る](#)

appreciate

（～に）感謝する
[▶ 本文に戻る](#)

gig

ギグ、演奏会 ★口語。比較的小さな会場で行われるライブのこと。

[▶本文に戻る](#)

in a different light

違った角度で

[▶本文に戻る](#)

with fondness

懐かしさとともに、懐かしく

[▶本文に戻る](#)

Circus Krone

サーカス・クローネ ★ドイツ・ミュンヘンのサーカス団、サーカス・クローネの劇場。ロック・コンサートの会場として使われる。

[▶本文に戻る](#)

in the middle of ~

～の最中に

[▶本文に戻る](#)

and all that

などなど、とか

[▶本文に戻る](#)

packed

満員の、満席の

[▶本文に戻る](#)

get in

入場する

[▶本文に戻る](#)

exit door

出口、扉

[▶本文に戻る](#)

touch

触れる

[▶本文に戻る](#)

Wembley Stadium

ウェンブリー・スタジアム ★イギリス、ロンドン北西部にある多目的スタジアム。「サッカーの聖地」「ロックの聖地」などと呼ばれる。

[▶本文に戻る](#)

greedy

欲深い

[▶本文に戻る](#)

over

終わって

[▶ 本文に戻る](#)

make the transition from A back to B

AからBへの移行を遂げる

[▶ 本文に戻る](#)

mate

相棒 ★イギリス・オーストラリア英語。親しみを込めた呼び掛けの言葉。

[▶ 本文に戻る](#)

flash past

一瞬にして過ぎ去る

[▶ 本文に戻る](#)

(not) have anything to do with ~

～とは一切関わりがない

[▶ 本文に戻る](#)

organization

手はずを整えること

[▶ 本文に戻る](#)

wander around

ぶらぶら歩き回る

[▶ 本文に戻る](#)

energetic

活動的な、精力的な

[▶ 本文に戻る](#)

bittersweet

ほろ苦い

[▶ 本文に戻る](#)

gosh

ああ、うわ ★^{えんきよく}godの 婉曲 表現。

[▶ 本文に戻る](#)

darn it

ちくしょう

[▶ 本文に戻る](#)

another leg

もう1行程 ★legはツアーの「行程」という意味。

[▶ 本文に戻る](#)

stage prop

舞台装置

[▶ 本文に戻る](#)

the train

★Black Ice Tourのツアー・オープニング曲"Rock 'N' Roll Train"（邦題「暴走/列車」）で使われた舞台装置。アニメーションに続き、実物大の汽車が舞台上に飛び出してくる演出だった。

[▶ 本文に戻る](#)

get tired of ~

～に飽きる

[▶ 本文に戻る](#)

cracking

素晴らしい

[▶ 本文に戻る](#)

piece of work

作品

[▶ 本文に戻る](#)

for the sake of it

それ自体を目的として

[▶ 本文に戻る](#)

on a similar note

似たような話をする

[▶本文に戻る](#)

biography

伝記

[▶本文に戻る](#)

reference

言及、参照

[▶本文に戻る](#)

from the very start

当初から

[▶本文に戻る](#)

come round

現れる

[▶本文に戻る](#)

"Rocket 88"

「ロケット88」 ★（1951）ジャッキー・プレストン／アイク・ターナー／キングズ・オブ・リズムの曲。ゼネラルモーターズ社のオールズモビル88にちなんでいる。

[▶本文に戻る](#)

come out

世に出る、発表される

[▶本文に戻る](#)

Elvis (Presley)

エルヴィス（・プレスリー） ★（1935-77）アメリカのロックミュージシャン。キング・オブ・ロックンロールと称される。

[▶本文に戻る](#)

Cadillacs

キャデラック ★アメリカ、ゼネラルモーターズ社が展開する車のブランド。エルヴィスは、「ベイビー・レッツ・プレイ・ハウス」（1955）の中で、ピンク色のキャデラックについて歌った。

[▶本文に戻る](#)

fins and chrome

テールフィンとクロムメッキ ★1950-60年代にかけて生産されたアメリカ車に多く見られるデザイン。テールフィンは、戦闘機の尾翼をモチーフにしており、バンパーやフロントグリルなどにクロムメッキを多用していた。

[▶本文に戻る](#)

Little Richard

リトル・リチャード ★（1932-）アメリカのミュージシャン、ピアニスト。ヒット曲に「のっぽのサリー」（'56）がある。

[▶本文に戻る](#)

Chuck Berry

チャック・ベリー ★（1926-）アメリカのミュージシャン、ギタリスト。代表曲は「ロックンロール・ミュージック」（'57）、「ジョニー・B・グッド」（'58）など。

[▶本文に戻る](#)

"Riding along in my automobile,..."

★チャック・ベリーの曲「ノー・パティキュラー・プレイス・トゥ・ゴー」（1964）の歌詞。

[▶本文に戻る](#)

the Beach Boys

ビーチボーイズ ★（1961-）アメリカのロックバンド。「サーフィン・U.S.A.」（'63）、「カリフォルニア・ガールズ」（'65）に代表される、アメリカ

西海岸の若者文化に関する歌で一世を風靡した。^{ふうび}

[▶本文に戻る](#)

"I got a little flat Ford with a ..."

★歌詞は誤っているが、フォード社のデュース・クーペを歌った「リトル・デュース・クーペ」（1963）のことと思われる。

[▶本文に戻る](#)

workshop

工場

[▶ 本文に戻る](#)

actual

実際の

[▶ 本文に戻る](#)

nae

★= no。イングランド北部の方言。

[▶ 本文に戻る](#)

Freddie Mercury

フレディ・マーキュリー ★(1946-91) イギリスのバンド、クイーン ('71-) のボーカル。

[▶本文に戻る](#)

Geordie

ジョーディ ★(1972-80、1982-85、2001、'12-) ジョンソンが1970年代に所属していた、イギリスのグラムロック・バンド。

[▶本文に戻る](#)

Hilversum Studios

ヒルバーサム・スタジオ ★オランダのヒルバーサムは、メディア関連企業が多く存在するため「メディア・シティ」とも呼ばれる。

[▶本文に戻る](#)

massive

圧倒的な、素晴らしい

[▶本文に戻る](#)

get picked up

(車で) 迎えに来てもらう

[▶本文に戻る](#)

Porsche

ボルシェ ★ドイツの高級スポーツカー。

[▶本文に戻る](#)

have a day off

1日仕事を休む

[▶本文に戻る](#)

come off

降りる

[▶本文に戻る](#)

flaunt

ひけらかす、扇情的な動作をする

[▶本文に戻る](#)

dressing room

控室

[▶本文に戻る](#)

piss ~ off

~を怒らせる

[▶本文に戻る](#)

go

言う

[▶本文に戻る](#)

out there

あちらでは ★ここでは観客席を意味する。

[▶本文に戻る](#)

track record

実績

[▶本文に戻る](#)

~ speaks for itself

~は自明である

[▶本文に戻る](#)

a hell of a ~

大した~、すげえ~ ★強調を表すスラング。

[▶本文に戻る](#)

Lenny Kravitz

あの人のことについて私が言えることは、今まで出会った中で、一番面白い人の1人だということです。
「（アイ・キャント・メイク・イット）アナザー・デイ」でマイケル・ジャクソンとコラボしたときのことを振り返って

発音分析

ニューヨーク（以下NY）訛りは、社会的に低い階層で使われるというイメージがあり、強い訛りは現在そうは聞かれないだろう。クラ
ヴィッツ自身にも強いNY訛りはない。とはいえ、母音の後（語中や語末）の[r]が落ちることがある。これはNY訛りだ。例えばyearsやgirlが
それ。だが、最も特徴的なのは、「Inspiration」の中ほどに2つある"part"の最初の方だ。[r]は響かず[páət]となっている。[ɑ:r]が[əə]となるの
はNY訛りの典型。

Interview Data	
収録日	2011年6月25日
収録地	カリフォルニア
スピード	やや遅い
語彙・表現	普通

レニー・クラヴィッツ

Lenny Kravitz

1964年、アメリカ・ニューヨーク生まれ。父はアメリカ人のテレビプロデューサー、母はバハマ出身の女優。高校を中退後、セッション・ミュージシャンとして活躍。'89年にアルバム『レット・ラブ・ルール』でデビュー、続く『ママ・セッド』（'91）でブレイクした。王道ロックにとどまらず、ソウルやファンク、自らのルーツであるバハマのサウンドも取り込んだ彼の音楽は世界的な人気を集め、2012年までに発表した8枚のアルバムは、3500万枚を売り上げている。

2011年にリリースした『ブラック・アンド・ホワイト・アメリカ』では、黒人としての出自を意識し、強い政治的メッセージを発信したレニー・クラヴィッツ。ここでは彼が、同アルバム誕生の経緯や、敬愛するマイケル・ジャクソンとのコラボ、溺愛する娘について、胸の内を明かす。

Inspiration

DL Track51

語注

Interviewer: Your album, [Black and White America](#), seems to be very [political](#), and you've spoken of growing up in a [multiracial environment](#), just as [Obama](#) did.

Lenny Kravitz: Yeah, which was, you know, which is very interesting. And I don't know if you saw [his speech on, on race, when he was running for off--](#)you actually should see it. It was very interesting, because, of course, he could have both [perspectives](#) as someone like myself does, and really understand both sides. And, uh, it's a strength, it's a strength.

But [that song](#) was actually part of the [inspiration](#) -- you mentioned Obama--part of the, of the inspiration for that song was a [documentary](#) that I was watching about this group of Americans -- I forget what c--city they lived in, in Middle America somewhere -- that were completely [against](#) the fact that there was an African-American, uh, president, and that they wanted their America back and they were gonna do whatever they could do to stop this. And, you know, it was really [violent](#), you know, about them saying what, what they had planned for him, etc., etc.

Obviously I know it's [out there](#), but it just [blew me away](#) that in two thousand, you know, ten, or whenever I was watching this thing, "Wow, people really do have these views. They haven't [let go](#), they haven't [moved on](#). They haven't been educated or exposed. I don't know what. The [hatred](#) is too deep." Um, but it amazed me, and that's what's, got me starting to write the song.

tanslation ▶

Interviewer: You released "[Stand](#)" as a single from the album. Is it also your [anthem](#) for [the upcoming election campaign](#)?

Kravitz: You know, it's an [uplifting](#) song about [no matter what](#) life throws you, you get right back up and you keep moving. And you don't give up hope, and you [persevere](#), [and so forth](#). It was, the truth of the matter is it was written personally to a friend who [became, uh, paralyzed from the waist down](#).

And I wasn't in the country, and I felt like, "What can I do? I, I, I just wanna give this person a feeling, [what little I can do](#)." So I wrote the song for this person.

And the person now is running again -- learned to walk again, learned to run again, [*back on their feet](#). So it's interesting, it works in this, sort of, worldly way. And, but, it's really about a person that I was writing to.

Interviewer: And what made you work with [Jay-Z](#) again? Are you longtime friends?

Kravitz: Yeah, and, he, he's a, he, he's a great artist and a very interesting human being. And, uh, it wasn't that I was trying to make a repeat. But when I was doing "[Boongie Drop](#)" I kept hearing his voice. And so I called him and he [hooked it up](#). And then you also have the local DJ from my area in [the Bahamas](#), uh, [DJ Military](#), on the track. I like that track a lot. Quite different.

Interviewer: Yeah, it's got a strong [reggae vibe](#) and some [electronics](#), too, so it really [stands out](#).

Kravitz: And "boongie," by the way, in the Bahamas means "[ass](#)." So it's about how these women dance. It's about the whole vibe of the culture of these women, and the dancing, and the, the whole Bahamian thing. Just so, just so you know.

Interviewer: You record at [Gregory Town Sounds](#) in the Bahamas, right? What's it like there?

Kravitz: It's a beautiful studio. It's, uh, it's a beautiful concrete structure, and very modern, [in the middle of](#) the jungle, and then inside is, uh, beautiful [wood](#). It looks, it looks almost like something you'd expect, like a studio you'd find, like, in the [mid- to late 70s](#) that was just preserved. Um, like classic, you know, [wood strips](#) and, you know, beautiful wood floors. And cork and, uh, it's great, it's great. And, and the, and the be--, and the, just the most amazing [equipment for my taste](#).

An Organic Partnership

DL Track53

語注

Interviewer: I [happened to](#) see you in a tv-commercial for [Wrangler Jeeps](#). How did that come about? Did you need a new Jeep?

Kravitz: It was a whole thing, and they called and da, da, da, da, and the fact that I actually have had one for all those years, and have used it in the Bahamas and written so many songs driving it.

And, and then when we discussed the [creative](#), um, you know, how it would be, and how, how I would like it to be, and it [ended up being](#) just very natural, you know, and a good way to get the song out there as well.

You know, you gotta take different [angles](#) this, these days, you gotta come at all angles. And it's been a good partnership, it's been an [organic](#) partnership.

tanslation ▶

Laughing with Michael

DL Track54

語注

Interviewer: I'd like to talk about [Michael Jackson for a moment](#). I know that [the Jackson 5](#) was one of the first gigs you ever saw. And then later, I guess you were able to work with him, or was it for him? How did that work?

Kravitz: We were [put together](#) by a [mutual](#) friend. And, uh, we met and [instantly](#) just loved each other and got to work.

The thing I can tell you about him that was the most fun for me was that he's one of the funniest people I've ever met in my life.

We laughed for days and days and days, just laughed. And had fun. And you would think that perhaps somebody in his position, who's been [making records](#) since [1960-whatever](#), that he'd be [over](#) it. And he's still like a kid in the studio, still wants to [nail](#) it, still wants to [please](#), still wants to have it be as excellent as it can be. And it was, it was a fantasy, it was just an [absolute](#) amazing experience to work with him. And, uh, I was very happy that I was given that [opportunity](#).

Interviewer: What album was [that](#) for?

Kravitz: It was for [Invincible](#). And then they decided that, uh, it was too rock for *Invincible*. So they were holding it, [and then tragically](#) we know the rest.

translation ▶

Proud Father

DL Track55

語注

Interviewer: On another topic, you've been doing some acting, and your [daughter](#) is also very successful.

Kravitz: Yeah, she's a -- I say this like a proud father -- but she's in the [number one film in the world](#) right now. Not America, in the world. That is a fact.

Interviewer: I read that interview of hers where she [claims](#) you are a [tough](#) dad.

Kravitz: Oh, where she talked about how I was [strict](#)? Yeah, she's funny. I read that, and I was laughing.

Interviewer: So things are a little different now?

Kravitz: She's, she's 22 years old. She, she, she does what she does. But she's a great girl.

tanslation [▶](#)

*Marcel Anders / The Interview People
Narrated by Michael Rhys*

インスピレーション

 **DL**  **Track51**

インタビュー：あなたのアルバム、『ブラック・アンド・ホワイト・アメリカ』は、かなり政治的なものになっているようですね、ちょうどオバマ氏と同じように、多民族の環境で育ったことも話していらっしますし。

レニー・クラヴィッツ：ああ、それは、そう、とても興味深いことです。彼の人種についてのスピーチをご覧になったかどうかわかりませんが――選挙（大統領選）を戦っていたときの――ぜひ見るといいですよ。何がとても興味深いかというと、当然のことですが、彼は僕のような人間と同じで、双方の視点を持ち、両者を本当に理解できるんです。そしてそれは、強味、強味なんです。

でも、あの歌は、実はインスピレーションの一部は――オバマ大統領のことをおっしゃいましたけど――あの曲を着想するきっかけの1つになったのが、私が見ていた、とあるアメリカ人の一団に関するドキュメンタリーだったんです――どの街に住んでいる人々だったかは忘れましたが、アメリカ中部のどこかでした――彼らは、アフリカ系アメリカ人の大統領がいることを、真っ向から否定していて、自分たちのアメリカを取り戻したいと話し、あらゆる手段を使っても、これ（再選）を阻止しようとしていたのです。そしてそれは、本当に過激だったんですよ、その人たちが、彼に対して何をするつもりかを話す様子は。

もちろんそれ（人種差別）が世の中に存在することは知っていますが、それでも心底驚きました。**2010年**だったか、その番組を見ていた時点で、「わあ、こういうことを本当に思っている人がいるんだ。まだ（そういう考えを）捨てていない、今も立ち止まったままなんだ。教育を受けていない、あるいは現実を経験していないんだな。僕には（理由が）何かはわからない。憎しみが深過ぎるんだ」とね。とにかく、それにとっても驚いて、すぐにこの曲を書くことにしたんです。

【原文】[▶](#)

バハマならではのもの

 **DL**  **Track52**

インタビュー：今回のアルバムからの1枚目のシングルとして、「スタンド」をリリースされました。これは今度の選挙キャンペーンへの応援歌でもあるのですか？

クラヴィッツ：ええと、これは、気持ちを高揚させる曲になっていて、人生で何が起ころうとも、すぐさま立ち上がって、前進し続けるのだ、ということを歌っています。決して希望を捨てず、屈することなく頑張りとおす、といったようなことです。これは、実は個人的に、下半身まひになってしまった、ある友人のために書いた曲なのです。

当時私は国内にいなかったのですが、ただ、「自分に何ができるだろうか？ たとえ自分にできることは小さくても、とにかくこの人に（ポジティブな）気持ちを与えたい」、そう思ったのです。それで、この人のために、この曲を書きました。

そして、この人は、また走れるようになっていきます—また歩けるようになり、また走れるようになった、再び立ち上がったのです。ですから、面白いことに、これは、ある意味世俗的な曲になっています。でも、本当は、ある1人の人のために書いたものだったのです。

インタビュー：そしてジェイ・Zと再び組まれたのは、どういういきさつだったのですか？ 古くからの付き合いなのですか？


クラヴィッツ：そうですね、それに、彼は偉大なアーティストであり、とても興味深い人です。そして、ええと、同じことをやろうとしたわけではありません。ですが、「ブンギー・ドロップ」を演奏していると、どうしても彼の声が聞こえてくるんですよ。そういうわけで、電話をしてみたところ、引き受けてくれた、というわけです。さらに、私の地元のバハマ出身のDJ、DJミリタリーもこの曲に参加してくれています。あの曲はかなり気に入ってますね。他にないものになっていますから。

インタビュー：そうですね、レゲエのヴァイヴが強く出ていて、電子音もありますから、かなり際立っていますよね。

クラヴィッツ：そして、ちなみに「ブンギー」というのは、バハマの言葉で「尻」という意味です。バハマの女性たちが、踊る様子を歌っているんです。こうした女性たちの文化、踊り、バハマ的なものならではの、ヴァイヴを歌っています。つまりは、そういうことです。

インタビュー：今は、バハマにあるグレゴリー・タウン・サウンドでレコーディングをされるんですよね。どんな所なんですか？

クラヴィッツ：美しいスタジオです。きれいなコンクリートの建造物で、極めてモダンなんですよ、ジャングルの真ん中であって、そして、中はというと、美しい木材なんです。例えば、'70年代半ばから後半にかけて存在していたような、それがそのまま保存されて残っていたかのようなスタジオなんです。伝統的な、そう、壁板だったり、美しい木の床だったりね。コルクも使っていて、そう、最高、最高ですよ。さらに、とにかく僕の好みにとってこれ以上ないような、素晴らしい機材も揃っています。

[【原文】](#) 

自然に発生したパートナーシップ

 [DL](#)  [Track53](#)

インタビュアー：あなたがジープ・ラングラーのテレビコマーシャルに出演されているのをたまたま見ました。どのような経緯があったのですか？ ジープの新車をご入り用だったとか？

クラヴィッツ：一連の流れですよ、電話がかかってきて、どうのこうの。そして、実際に何年も前から1台所有しているという事実があるんですよね、バハマでも乗ってきましたし、運転中に本当にたくさんの曲が生まれていますから。

そして、その後クリエイティブについて話をして、そう、どのようなものになるか、私がどういうものにしたいかということですね、そして結果的に、非常に自然なものになった上に、曲を披露するいい機会にもなったんです。

そう、この業界ではいろんな角度からやっていく必要がありますからね、昨今は、あらゆる角度から活動しなくてはなりません。そして、それ以来いいパートナーシップを築けていますね、自然発生的なパートナーシップです。

[【原文】](#) [▶](#)

マイケルと談笑

 [DL](#)  [Track54](#)

インタビュアー：少しマイケル・ジャクソンさんのことをお伺いしたいと思います。あなたが人生で初めて見たコンサートの1つが、ジャクソン5のものだったと聞いています。その後やがて、その人と一緒に働けることになったんですね。その人のために、でしょうか？　いかがでしたか？


クラヴィッツ：共通の友人が引き合わせてくれたんですよ。そして、会ってすぐに、お互いのことが好きになって、作業を開始しました。

あの人のことについて私ができることで、個人的に一番楽しかったことは、あの人は、今まで出会った中で、一番面白い人の1人だということです。

私たちは何日も何日も何日も、ただ笑っていました。そして楽しい時間を過ごしました。そして、あの人のような地位にある人、1960年ぐらいからレコードを作り続けてきたような人は、ひょっとしたら、もうそれに関心がないんじゃないかと思うかもしれません。でもあの人は、スタジオの中では、まだまだ子どものようだったんです、いまだに完璧を求めるし、いまだに喜ばせたい、いまだに可能な限り最高のものを作り上げたいと思っている。そして、ただもう夢のような、あの人と一緒に仕事をするというのは、この上なく素晴らしい経験でした。そして、その機会が与えられたことを、とてもうれしく思いました。

インタビュアー：それはどのアルバムのためだったのですか？

クラヴィッツ：『インヴィンシブル』のためです。でも、『インヴィンシブル』に収録するには、ロック色が強過ぎると判断されました。そのため、取っおいてあったのですが、その後の一部始終は、悲しいことに、皆の知るところです。

[【原文】](#) 

鼻が高い父

 [DL](#)  [Track55](#)

インタビュアー：話題を変えますと、あなたは俳優業も少しなさっていますよね。また、お嬢さまも成功を収めていらっしゃるみたいです。


クラヴィッツ：ええ、娘は――鼻が高い父として言わせてもらいますけど――彼女は今、興行収入世界一の映画に出演しています。全米一じゃないですよ、世界一です。これは事実です。

インタビュアー：あなたが厳しいお父さんだと話している、彼女のインタビューを読みましたよ。

クラヴィッツ：ああ、私がどれほど厳しかったか、と話しているやつですか？ ええ、面白い子ですよ。私も読んで、笑っていました。

インタビュアー：では今は、幾分状況が違いますね？

クラヴィッツ：彼女は22歳ですよ。もう好きなことをやりますよ。でも、とてもいい子です。

[【原文】](#) 

（訳：春日聡子）

Vocabulary List

A

- absolute** 完全な
- against ~** ~に反対の
- ... and so forth**など
- angle** 角度
- anthem** 賛歌
- ass** 尻

B

- back on one's feet** 再び元気になる、立ち直る
- become paralyzed from the waist down** 下半身まひとなる
- blow ~ away** ~を圧倒する、~をひどく驚かせる

C

- claim** （～であると）言い張る、（～と）主張する

D

- daughter** 娘

E

- electronics** 電子音
- end up doing** ~する結果となる
- equipment** 設備、機材

F

- for a moment** 少しの間
- for one's taste** （人の）好みとして

H

- happen to do** たまたま~する
- hatred** 憎しみ

L

- let go** 捨てる、解き放つ

M

- move on** 進歩する、気持ちを切り替える
- multiracial environment** 多民族の環境
- mutual** 共通の

N

- nail** 確実に物にする、うまくやる
- no matter what ...** たとえどんな.....が起ころうとも

O

- opportunity** 機会
- organic** 自然発生的な
- out there** 世の中には

P

- persevere** 辛抱する、屈せずにやり通す
- perspective** 視点、観点
- please** 喜ばせる
- political** 政治的な

S

- stand out** 目立つ、卓越する
- strict** 厳格な

T

- tough** 厳しい

U

- uplifting** 精神が高揚する、気持ちが盛り上がる

V

□**vibe** ヴァイブ、雰囲気、様子、気

□**violent** 激しい、暴力的な

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(* 質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	クラヴィッツは、自分とバラク・オバマの間には共通点があると考えている。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	クラヴィッツは、バハマ滞在時に「ブラック・アンド・ホワイต์・アメリカ」の曲の着想を得た。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	「スタンド」はオバマ大統領の選挙キャンペーンのために書かれた曲である。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	「ブンギー・ドロップ」のレコーディングには、バハマ出身のDJも参加した。	C	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	「ブンギー・ドロップ」の「ブンギー」とは、バハマ語で「尻」という意味である。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	クラヴィッツのスタジオ、グレゴリー・タウン・サウンドは、内装までコンクリート造りのモダンなスタジオである。	A	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	クラヴィッツは、コマーシャルに出演する前からジープ・ラングラーに乗っていた。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	クラヴィッツは、マイケル・ジャクソンの出演するコンサートを見たことがない。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	クラヴィッツとジャクソンが共に制作した曲は、ジャクソンのアルバム『インヴィンシブル』に収録されている。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	クラヴィッツの娘は、映画女優として活躍している。	B	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

答え [▶](#)

理解度チェック

インタビューの内容に一致するものは○Yes、一致しないものは○Noを選びましょう。

(＊質問の難易度..A=易しい、B=普通、C=難しい)

Questions		難易度	Yes	No
1	クラヴィッツは、自分とバラク・オバマの間には共通点があると考えている。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	クラヴィッツは、バハマ滞在時に「ブラック・アンド・ホワイต์・アメリカ」の曲の着想を得た。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
3	「スタンド」はオバマ大統領の選挙キャンペーンのために書かれた曲である。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
4	「ブンギー・ドロップ」のレコーディングには、バハマ出身のDJも参加した。	C	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	「ブンギー・ドロップ」の「ブンギー」とは、バハマ語で「尻」という意味である。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	クラヴィッツのスタジオ、グレゴリー・タウン・サウンドは、内装までコンクリート造りのモダンなスタジオである。	A	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
7	クラヴィッツは、コマーシャルに出演する前からジープ・ラングラーに乗っていた。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	クラヴィッツは、マイケル・ジャクソンの出演するコンサートを見たことがない。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
9	クラヴィッツとジャクソンが共に制作した曲は、ジャクソンのアルバム『インヴィンシブル』に収録されている。	B	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
10	クラヴィッツの娘は、映画女優として活躍している。	B	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

語注

Black and White America

『ブラック・アンド・ホワイト・アメリカ』 ★（2011）クラヴィッツ9枚目のアルバム。

[▶本文に戻る](#)

political

政治的な

[▶本文に戻る](#)

multiracial environment

多民族の環境

[▶本文に戻る](#)

(Barack) Obama

（バラク・）オバマ ★（1961-）アメリカの政治家。第44代アメリカ合衆国大統領（2009-在任）。

[▶本文に戻る](#)

his speech on, on race

★2008年の大統領予備選時、人種差別主義者と深い関わりを持っているという疑惑が浮上した際にオバマ氏が行ったスピーチ、"A More Perfect Union"（2008年3月18日）のこと。

[▶本文に戻る](#)

when he was running for off--

★when he was running for office（選挙に立候補していたとき）と言い掛けて止めている。

[▶本文に戻る](#)

perspective

視点、観点

[▶本文に戻る](#)

that song

★アルバム『ブラック・アンド・ホワイト・アメリカ』と同名のタイトル曲のこと。

[▶本文に戻る](#)

inspiration

インスピレーション、素晴らしいひらめき、着想

[▶本文に戻る](#)

documentary

ドキュメンタリー、記録作品

[▶本文に戻る](#)

against ~

～に反対の

[▶本文に戻る](#)

violent

激しい、暴力的な

[▶本文に戻る](#)

out there

世の中には

[▶本文に戻る](#)

blow ~ away

～を圧倒する、～をひどく驚かせる

[▶本文に戻る](#)

let go

捨てる、解き放つ

[▶本文に戻る](#)

move on

進歩する、気持ちを切り替える

[▶本文に戻る](#)

hatred

憎しみ

[▶本文に戻る](#)

"Stand"

「スタンド」 ★アルバム『ブラック・アンド・ホワイト・アメリカ』の収録曲。

[▶本文に戻る](#)

anthem

賛歌

[▶本文に戻る](#)

the upcoming election campaign

★2012年のオバマ陣営の選挙キャンペーンを指している。upcomingは「^{きた}来るべき」という意味。

[▶本文に戻る](#)

uplifting

精神が高揚する、気持ちが盛り上がる

[▶本文に戻る](#)

no matter what ...

たとえどんな.....が起ころうとも

[▶本文に戻る](#)

persevere

辛抱する、屈せずにやり通す

[▶本文に戻る](#)

... and so forth

.....など

[▶本文に戻る](#)

become paralyzed from the waist down

下半身まひとなる

[▶本文に戻る](#)

what little I can do

★ここではwhat little help I can give（私にできるささやかな手伝い）と同義。

[▶本文に戻る](#)

back on one's feet

再び元気になる、立ち直る

[▶本文に戻る](#)

their

★性別をばかして言うために、hisやherではなくこの語を用いている。

[▶本文に戻る](#)

Jay-Z

ジェイ・Z ★（1969-）アメリカのラッパー、音楽プロデューサー、実業家。クラヴィッツとは、自身のアルバム『ザ・ブループリント2：ザ・ギフト & ザ・コース』（'02）収録曲の「ガンス&ローゼズ」、およびクラヴィッツのアルバム『パプティズム』（'04）収録曲の「ストーム」で共演している。

[▶本文に戻る](#)

"Boongie Drop"

「ブンギー・ドロップ」 ★アルバム『ブラック・アンド・ホワイト・アメリカ』の収録曲。

[▶本文に戻る](#)

hook ~ up

★「～を接続する」という意味だが、ここでは「～を引き受ける」ぐらいのニュアンスで用いている。ちなみにhookにはhip hopのスラングで「歌詞のサビ」という意味もある。

[▶本文に戻る](#)

（Commonwealth of）the Bahamas

バハマ（連邦） ★英連邦に属する国。

[▶本文に戻る](#)

DJ Military

DJミリタリー ★バハマ出身のDJ。

[▶ 本文に戻る](#)

reggae

レゲエ ★ジャマイカ起源の音楽。

[▶ 本文に戻る](#)

vibe

ヴァイブ、雰囲気、様子、気

[▶ 本文に戻る](#)

electronics

電子音

[▶ 本文に戻る](#)

stand out

目立つ、卓越する

[▶ 本文に戻る](#)

ass

尻

[▶ 本文に戻る](#)

Gregory Town Sound(s)

グレゴリー・タウン・サウンド ★クラヴィッツが2010年、バハマで立ち上げた録音スタジオ。

[▶ 本文に戻る](#)

in the middle of ~

～の真ん中に

[▶ 本文に戻る](#)

wood

木材

[▶ 本文に戻る](#)

mid- to late 70s

'70年代半ばから後半

[▶ 本文に戻る](#)

wood strip

木の板、壁板

[▶ 本文に戻る](#)

equipment

設備、機材

[▶ 本文に戻る](#)

for one's taste

(人の)好みとして

[▶ 本文に戻る](#)

happen to do

たまたま～する

[▶本文に戻る](#)

Wrangler Jeep

ジープ・ラングラー ★アメリカ、クライスラー社製の四輪駆動車。

[▶本文に戻る](#)

creative

クリエイティブ ★広告業界において、企画、制作する企業や部門、もしくは広告表現、広告作品自体を指す。

[▶本文に戻る](#)

end up doing

～する結果となる

[▶本文に戻る](#)

angle

角度

[▶本文に戻る](#)

organic

自然発生的な

[▶本文に戻る](#)

Michael Jackson

マイケル・ジャクソン ★（1958-2009）アメリカのポップ歌手。King of Pop（ポップ・ミュージックの王）と呼ばれる。アルバム『スリラー』（1982）は歴史上最も売れたアルバム。

[▶本文に戻る](#)

for a moment

少しの間

[▶本文に戻る](#)

the Jackson 5

ジャクソン5 ★（1962-90、2001、'12-）アメリカの兄弟ボーカルグループ。マイケル・ジャクソンがリード・ボーカルを務めていた。

[▶本文に戻る](#)

put ~ together

～を引き合わせる

[▶本文に戻る](#)

mutual

共通の

[▶本文に戻る](#)

instantly

すぐに

[▶本文に戻る](#)

make records

レコードを製作する

[▶本文に戻る](#)

1960-whatever

★-whateverを付けることで「～か何かそのようなもの」という意味が加わる。

[▶本文に戻る](#)

over ~

～への興味は終わって

[▶本文に戻る](#)

nail

確実に物にする、うまくやる

[▶本文に戻る](#)

please

喜ばせる

[▶本文に戻る](#)

absolute

完全な

[▶本文に戻る](#)

opportunity

機会

[▶本文に戻る](#)

that

その曲 ★クラヴィッツがマイケル・ジャクソンのアルバム『インヴィンシブル』のために制作した楽曲「（アイ・キャント・メイク・イット）アナザー・デイ」のこと。

[▶本文に戻る](#)

Invincible

『インヴィンシブル』 ★（2001）マイケル・ジャクソンの10枚目のアルバム。

[▶本文に戻る](#)

and then tragically ...

★「（アイ・キャント・メイク・イット）アナザー・デイ」は長く未発表のままだったが、マイケルが悲劇的な死を遂げた後、音源の一部が何者かによってインターネットにリークされ、2010年1月、騒動となった。クラヴィッツは、流出に関わっていないと動画サイト上で声明を発表。曲は同年12月に発売

されたアルバム『MICHAEL』に収録された。
[▶本文に戻る](#)

daughter

娘 ★クラヴィッツの娘で女優のZoe Isabella Kravitz（1988-）のこと。

[▶本文に戻る](#)

number one film in the world

（興行成績）世界一の映画 ★*X-Men First Class*（2011、邦題『X-MEN：ファースト・ジェネレーション』）のこと。

[▶本文に戻る](#)

claim

（～であると）言い張る、（～と）主張する

[▶本文に戻る](#)

tough

厳しい

[▶本文に戻る](#)

strict

厳格な

[▶本文に戻る](#)

【音声DL付】ロックスターの英語
(電子書籍版)

発行日：2013年10月1日 (ver1.0)
2015年2月1日 (ver1.1)

企画・編集：株式会社アルク

巻頭コラム：キャロル久末

学習法コラム：松岡 昇

音声解説：小川直樹

英文校正：Peter Branscombe、Owen Shaefer、Joel Weinberg、Victoria Wilson

編集協力：五十嵐 哲

翻訳：春日聡子、挙市玲子、久永 優

表紙デザイン：直井忠英 (ナオイデザイン室)

カバー写真：©Mark Harrison/Camera Press/アフロ

電子書籍制作：有限会社ギルド

録音・編集：嶋津行夫 (YeastSounds)

発行者：平本照麿

発行所：株式会社アルク

〒168-8611 東京都杉並区永福2-54-12

Email：csss@alc.co.jp

Website：http://www.alc.co.jp/

- ・本書は『ロックスターの英語』（2012年発行）の電子書籍版です。
- ・本書の全部または一部の無断転載を禁じます。著作権法上で認められた場合を除いて、本書からのコピーを禁じます。

©2013 Carole Hisasue / Noboru Matsuoka / Naoki Ogawa / naoi design office / WHY?, Inc / Planet Syndication / The Interview People / ALC PRESS INC.

PC：9580185

ISBN：9784757421547

地球人ネットワークを創る



アルクのシンボル
「地球人マーク」です。